

馬場遺跡 2

太宰府市文化財調査報告書
馬場遺跡第8次調査



平成18年

2006

太宰府市教育委員会

馬場遺跡 2

太宰府市文化財調査報告書
馬場遺跡第8次調査

平成18年

2006

太宰府市教育委員会

序

今回報告いたします馬場遺跡第8次調査は、九州国立博物館建設に伴う散策路整備事業に先立つ埋蔵文化財の発掘調査であります。

今回の調査では、平安時代の区画を示す石組の溝跡や、中世の鑄造炉跡、近世の土坑跡、「安楽寺天承二年銘」「安楽寺参重塔」と記した瓦など、今まで存在が知られていなかった、天満宮周辺の町屋地区の成立に関わる貴重な遺構や遺物が発見されました。

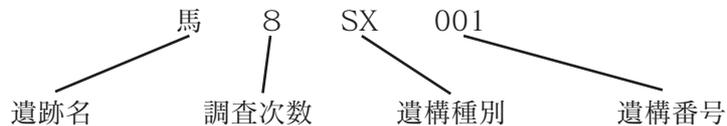
今後、本報告が周辺地域の歴史的環境を復元する作業の基礎資料として、また広く文化遺産の保存と啓発に活用していただければ幸いに存じます。

また、調査及び整理に参加されました作業員の皆様、調査に多大なご理解ご協力いただきました地元地区ならびに関係諸機関の皆様方にたいして、心より御礼申し上げます。

平成18年3月
太宰府市教育委員会
教育長 關 敏治

例 言

- 1.本書は、太宰府市教育委員会が平成15・16年度に実施した馬場遺跡第8次調査の報告書である。
- 2.本書に掲載した資料の調査に関わる経緯については、各章に記載している。
- 3.本書に掲載した資料の整理は、主に平成17年度に実施した。
- 4.周辺調査区の配置については本文中の周辺遺跡図を参照されたい。
- 5.遺構および遺物の実測及び図の浄書は、調査、整理・執筆担当者のほか高橋学・渡邊仁・山村信榮・豊岡（島）純子・森若知子・森部順子・松本理栄子・久味木理恵・久家春美・大隈郁美がおこなった。地形図・石垣等の図化の一部は東亜建設技術株式会社に委託した。
- 6.掲載した遺構・遺物の写真撮影は調査・整理担当者のほか、山村・（有）空中写真企画・（有）文化財写真工房がおこなった。
- 7.出土した木製品・金属製品の保存処理は下川可容子が担当した。
- 8.本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される。なお遺構の性格を表記する記号については、SB掘立柱建物跡、SA柵列跡、SI住居跡、SK土坑、ST墳墓、SD溝、SF道路状遺構、SXその他の遺構などであり、略号として以下のように記載している。



- 9.本書の執筆・編集は山村の助力のもと柳智子がおこなった。
- 10.鑄造関連遺構評価と金属分析、瓦等の考察は別稿を予定している。
- 11.出土した遺物および全ての図面、写真等の記録は太宰府市教育委員会が保管している。
- 12.本書で用いる分類は以下の文献に記載されている。

土器・陶磁器・中世須恵器

- 太宰府市教育委員会（1983）『大宰府条坊跡II』
- 太宰府市教育委員会（2000）『大宰府条坊跡XV』
- 太宰府市教育委員会（2002）『大宰府条坊跡XVI』
- 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」（1982）『貿易陶磁研究』No.2
- 森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年について」（1982）『貿易陶磁研究』No.2
- 中世土器研究会編（1995）『概説中世の土器・陶磁器』

土師質・瓦質土器

- 山村信榮（1990）「太宰府出土の瓦質土器」『中近世土器の基礎研究VI』

瓦

- 九州歴史資料館（2000）『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』
- 太宰府天満宮（1988）『太宰府天満宮』
- 太宰府市教育委員会（1995）『太宰府天満宮III』
- 太宰府市教育委員会（2003）『宝満山遺跡群IV』

目 次

第1章 調査経緯と調査体制	1
1、調査経緯	
2、調査・整理作業の体制	
第2章 遺跡の位置と環境	4
第3章 調査の報告	9
1、調査概要と層位	9
2、遺構	11
3、遺物	22
第4章 まとめ	64
付図	
遺構番号台帳	
写真図版	
遺構	
遺物	
CD-ROM	
遺構写真・遺物写真	
遺構番号台帳	
出土遺物一覧表	

第1章 調査経緯と調査体制

1、調査経緯

調査地は太宰府市宰府2丁目1133に所在する。

九州国立博物館の開館に合わせて、博物館と最寄り駅西鉄太宰府駅をつなぐ全長690mの博物館散策路整備事業計画により、平成15年5月9日に太宰府市まちづくり技術開発課から開発の届け出を受けた。周辺地域での遺跡の状況から、調査が必要であると判断した。現地での調査は太宰府市教育委員会が平成15年2月2日～7月8日にかけて実施した。開発対象面積は368.69㎡、調査面積は177㎡（延べ面積354㎡）である。

2、調査・整理作業の体制

本報告の調査を実施した平成15・16年度、および整理報告を行なった平成17年度の調査体制は以下の通りである。

(平成15/2003年度)

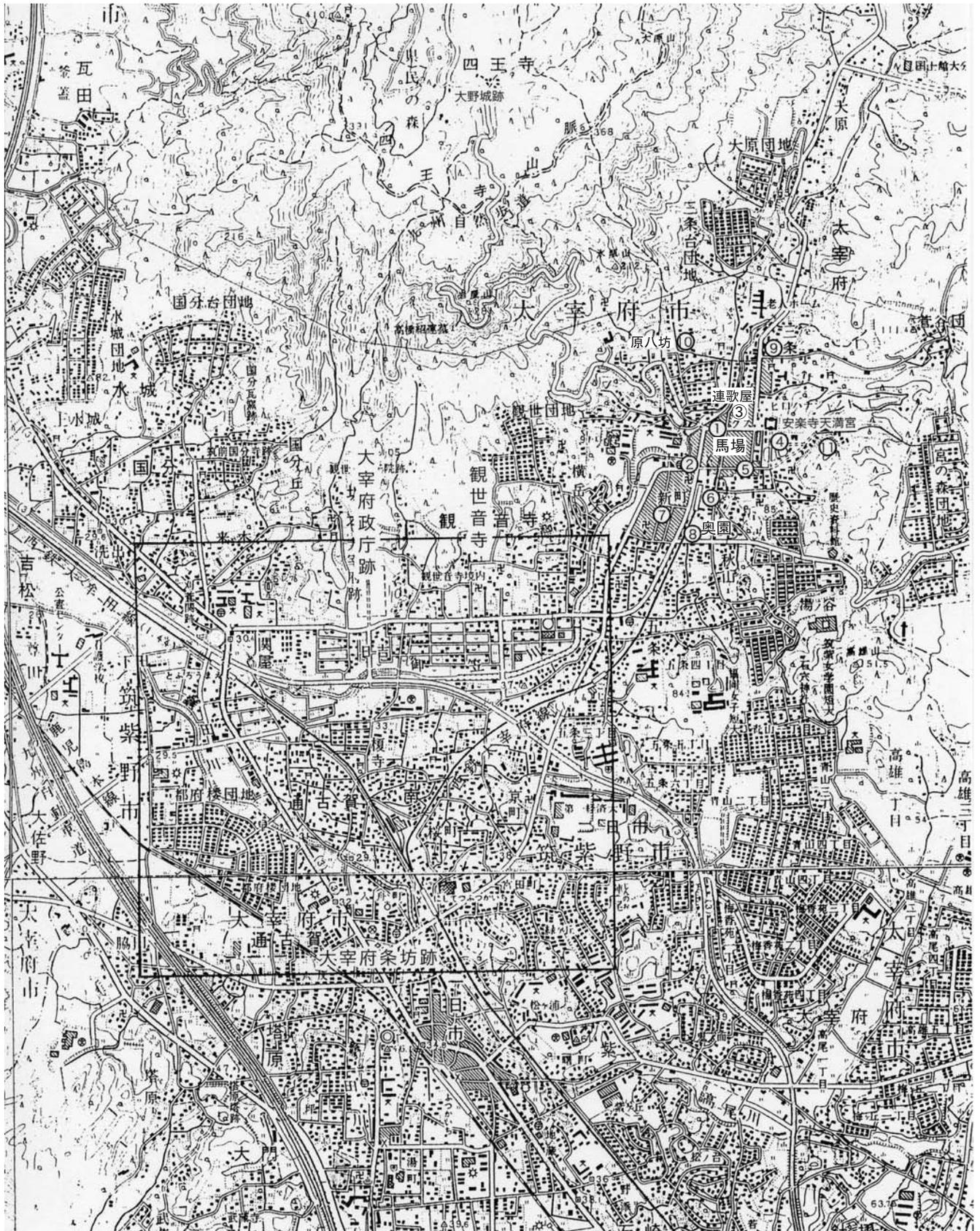
総括	教育長	關 敏治		
庶務	教育部長	白石純一		
	文化財課長	木村和美		
	文化財保護係長	和田敏信（～6月30日）		
		久保山元信（7月1日～）		
	保護係長	久保山元信（10月1日～）		
	文化財調査係長	神原 稔（～9月30日）		
	保護係長	永尾彰朗（10月1日～）		
	事務主査	藤井泰人		
	主任主事	大石敬介		
	調査	主任主査	城戸康利	
		技術主査	山村信榮	
		中島恒次郎	(事前調整担当)	
	主任技師	井上信正		
	高橋 学	(調査担当)		
	宮崎亮一			
技師（囑託）	下川可容子			
	森田レイ子			
	柳 智子	(調査担当)		
	渡邊 仁	(調査担当)		

(平成16/2004年度)

総括	教育長	關 敏治
庶務	教育部長	松永栄人
	文化財課長	木村和美
	保護活用係長	久保山元信
	調査係長	永尾彰朗

	事務主査	藤井泰人（～6月30日） 齋藤実貴男（7月1日～）
調査	主任主事	大石敬介
	主任主査	城戸康利
	技術主査	山村信榮 中島恒次郎
	主任技師	井上信正 高橋 学（調査担当） 宮崎亮一
	技師（囑託）	下川可容子 森田レイ子 柳 智子（調査担当） 渡邊 仁 長 直信 松浦 智（7月1日～）
(平成17/2005年度)		
総括	教育長	關 敏治
庶務	教育部長	松永栄人
	文化財課長	木村和美（～6月30日） 齋藤廣之（7月1日～）
	保護活用係長	久保山元信
	調査係長	永尾彰朗
	事務主査	藤井泰人 齋藤実貴男
調査	主任主事	大石敬介
	主任主査	城戸康利
	技術主査	山村信榮（整理担当） 中島恒次郎
	主任技師	井上信正 高橋 学 宮崎亮一
	技師（囑託）	下川可容子（保存処理担当） 柳 智子（整理・報告担当） 長 直信 松浦 智

また、現地での調査に対し地元馬場地区の方々には物心ともに厚いご協力をいただいた。また、次の皆様にご指導・ご協力を頂いた。小田富士雄（福岡大学）、川添昭二（立正大学）、狭川真一（元興寺文化財研究所）（以上、敬称略）



- | | | | |
|-------------|-------------------|---------------|-----------------|
| 1 馬場遺跡 (集落) | 2 大町遺跡 (集落) | 3 連歌屋遺跡 (集落) | 4 太宰府天満宮遺跡 (寺院) |
| 5 天満宮参道遺跡 | 6 馬場遺跡8次 | 7 新町遺跡 (集落) | 8 奥園遺跡 (集落) |
| 9 三条遺跡 (集落) | 10 原遺跡 (寺院、山城、集落) | 11 浦の田遺跡 (墳墓) | |

図1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

第2章 遺跡の位置と環境

馬場遺跡は太宰府市北東部に所在し、宝満山裾の標高約47mの砂礫・シルト層を基盤とする斜面上にある。太宰府天満宮の南西方向に位置し、参道から約100m南に下った角地にあたる。馬場遺跡第8次調査区は西側の東西に伸びる参道へ接続する南北道路「溝尻」の通りに面している。この南北道路は参道を挟んでさらに北側に伸び、連歌屋遺跡が展開する「小鳥居小路」につながっている。調査区南側には光明寺から流れてくる藍染川と「浦町」の通りとが合流する角地にあたる。調査区周辺の水利を見ると、北の三条地区幸ノ元堰から取水し宰府の街をながれてくる溝と東から流れてくる藍染川が合流することから、「溝尻」という地名が残っている。

調査区周辺には北東に太宰府天満宮境内遺跡や浦ノ田遺跡がある。天満宮境内の丘陵よりさらに北東には宝満山遺跡群が、北西には原遺跡群が展開し、天台系寺院群に囲まれた斜面上に遺跡が展開している。東西に延びる天満宮参道遺跡より北側には平安時代後期に開発され、中世～近世にかけて存在した町屋が展開する連歌屋遺跡がある。馬場遺跡は天満宮参道遺跡よりも南側にあたり、遺跡の西側には大町遺跡、新町遺跡と中世を中心とした集落遺跡が広がっている。

遺跡のはじまりは丘陵地である浦ノ田遺跡では縄文早期の集落遺構が見つかっており、新町遺跡では縄文晩期後葉の包含層が見つかっている。

弥生、古墳時代については報告例がない。本報告で小片ではあるが須玖Ⅱ式の甕が出土しているが、遺構や遺物包含層は確認できていない。7世紀後半～8世紀に属する須恵器の小片は少数ながら周辺遺跡や本報告でも確認できるが、遺構は確認されていない。

太宰府北東部にあたる天満宮周辺遺跡の大きな画期は12世紀段階、平安時代後期に入ってからと考えられる。特に連歌屋遺跡1、2、6次では平安時代後期の溝が見つかっており、この溝の延長は本調査区でも検出されている。この南北の土地区画ラインは現在の通称「小鳥居小路」や「溝尻」の通りにまで踏襲されている。現在の天満宮周辺の土地区割に大きな影響を残していることから、平安時代後期に行なわれた土地区画が大規模であったことと中世以降の開発でもその機能が持続されたことを示している。平安時代後期～中世以降では13世紀中頃までの炉跡や铸造関連土坑が本報告で検出されている。太宰府における生産遺構では観世音寺前面や御笠川南条坊遺跡の時期に近く、天満宮安楽寺に関わる金属生産遺構の可能性が考えられる。

近世の遺跡周辺については地誌や天満宮境内絵図などから馬場遺跡には社家屋敷があり、その北側で天満宮境内と接していた状況が描かれている。本報告では近世までの溝や廃棄土坑、土間の痕跡などの生活関連遺構が検出されている。本報告の調査以前には和洋折衷の太宰府では珍しい昭和初期建築の邸宅が建てられており、調査前に現在の場所から20m東側に移築している。邸宅のあった場所は太宰府の賑わいを描いた『博多太宰府屏風』など多くの作品を残した秋月藩御用絵師、斎藤秋圃（1768～1859年）が隠居した場所と伝えられる。

参考文献

- 『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』1978福岡県教育委員会
- 『福岡県遺跡等分布地図 筑紫野市・春日市・大野城市・筑紫郡編』1980福岡県教育委員会
- 『太宰府天満宮』1988太宰府天満宮
- 『太宰府天満宮Ⅲ』1995太宰府市教育委員会
- 『大町遺跡』1992太宰府市教育委員会
- 『馬場遺跡』1999太宰府市教育委員会
- 『連歌屋遺跡1』2003太宰府市教育委員会



図2 馬場遺跡周辺遺跡図 (1/3,000)

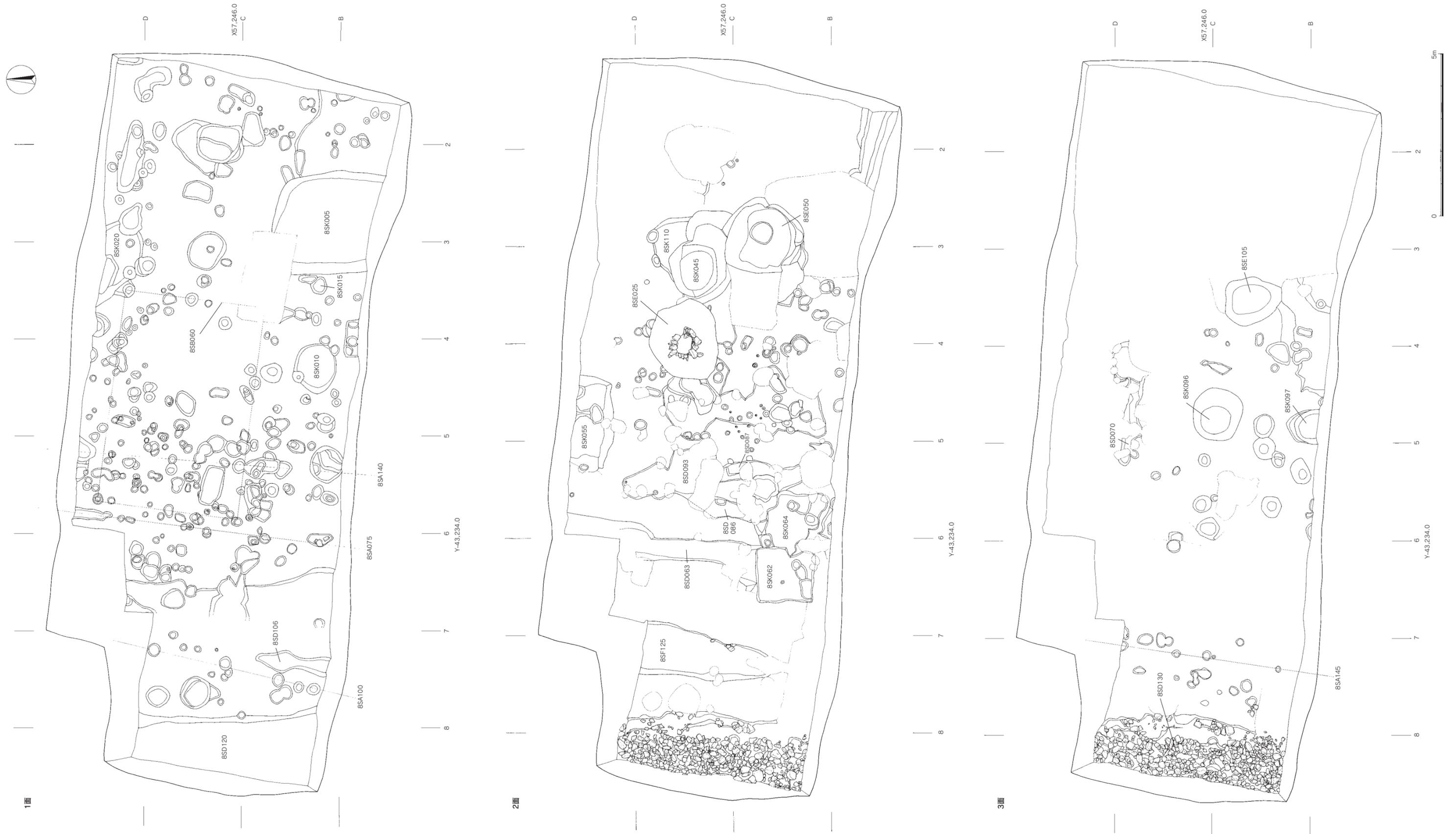


图3 馬場8次全体図 (1/100)

『大宰府条坊跡XⅦ』2001太宰府市教育委員会
『三条遺跡』2001太宰府市教育委員会
『連歌屋遺跡』2003太宰府市教育委員会
『太宰府市史 考古資料編』1992太宰府市
『太宰府市史 環境資料編』2001太宰府市

第3章 調査の報告

1、調査概要と層位

調査区には家屋移築に関連する真砂土除去したところ、近現代までの整地層が堆積していた。この整地層は大きく橙灰色粘質土層、炭や焼土を多く含む黒茶色土層の二つに分けられる。調査区南壁では黒茶色土上面で国産陶器の土瓶を容器にした胞衣壺が出土している。土層や検出時の状況で廃棄土坑や井戸が複数確認でき、何度も整地を行なっていることから近世～近現代までの絶え間ない生活活動を窺うことができた。遺構面は現況道路面から約1.0～1.2m除去すると検出できた。遺構面については、遺構と整地層の関係から3面の調査を行なった。各遺構面においては、基準とした整地層が途切れている部分もあり、下層の遺構を検出している可能性もあるが、検出した遺構面に帰属させて取り扱った。

なお、調査区内で排土の持ち出しを行なうために7ライン付近で、東西で反転して調査を行なった。東側から調査を開始した。そのため、同一土層で土色名が異なる部分があるため、ここで整理しておきたい。

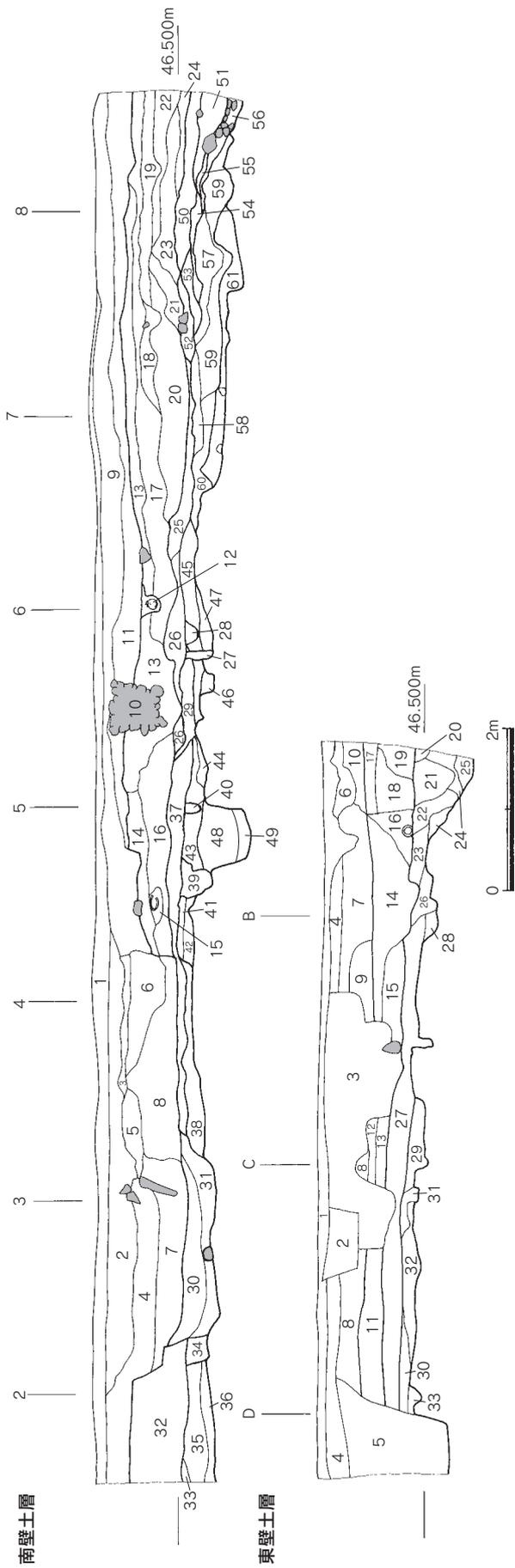
まず、第1遺構面検出時に上層からの混入を考え、任意土層を設定した。7ラインより東では黒灰色土、西では茶色土で取り上げを行っており、同一の任意土層である。第1、2遺構面は基本的に茶灰色土の整地層SX080に切り込む遺構で、遺構の切り合い関係で遺構面を判断した。8ライン付近で南北に延びる溝SD120を検出し、7ライン付近で西への落ち込みSX150（SX116～119、SX133～137の総括番号）を基盤としている。第1遺構面では大半が近世までの遺構である。

第2遺構面検出時にはC2地区付近でたまり状の黒色土層が確認でき、除去後SK045、SE025を検出した。B5地区付近ではたまり状の黄灰色土層SX066に鑄造炉跡SX064や関連土坑SX062が切り込んでいる。8ライン付近では溝SD120の下から14世紀後半までの遺物が入る南北溝SD115が検出された。井戸や土坑、炉跡など大型の遺構が目立ち、12世紀中頃～13世紀後半までの遺構が主体である。

12世紀前半の整地層SX080除去後に検出された遺構を第3遺構面とした。整地層は約15～25cmの厚みでC4.5地区から南に広がっている。黄色シルトの地山上に11世紀後半～12世紀前半までの遺構が検出できた。第1、2遺構面と比べると遺構・遺物ともに希薄である。溝SD115除去後、石積溝SD130が検出された。この溝の基盤層（SX133～137）の時期を確定させるため、調査区南壁に確認のためのトレンチを入れ、土層と遺物を確認した。その結果、12世紀前半（平安時代後期初頭）以前に大きな区画溝が掘られ、埋没後石積溝が造られたことが分かった。

この遺構は連歌屋遺跡で確認されていた平安時代後期の溝と連続している蓋然性が高く、石積の状況が確認できたのは初めてであった。このことから太宰府市まちづくり技術開発課との協議の結果、地下に保存されることになった。馬場地区や宰府の街区割りに関わる石積溝が地下に保存される前に、地域住民の方々への啓発活動として6月19日に現地説明会を実施し、60人程の参加者があった。

現在、調査区は平成17年10月16日に開館した九州国立博物館への散策路と公園として整備された。公園内には「溝尻周辺の文化財」をタイトルにした説明板が設置され、周辺の文化財と発掘の成果が記されている。



- 南壁土層**
1. 灰色土
 2. コンクリート井戸枠
 3. 茶灰色土 (礫を含む)
 4. 暗灰色土
 5. 茶色土 (礫を含む)
 6. 橙茶色土
 7. 暗灰色土 (炭・橙茶色土ブロックを含む)
 8. 黄灰色土 (黄灰色土、黄灰色土の互層)
 9. 暗灰色土 (炭・焼土ブロックを含む)
 10. 暗灰色土 (炭・焼土ブロックを含む)
 11. 黄灰色粘質土
 12. 黄灰色土 (炭を含む)
 13. 黄灰色シルト
 14. 黄灰色シルト (炭を含む)
 15. 淡灰色粘質土 (炭を含む)
 16. 茶色土 (土管入り)
 17. 暗灰色土
 18. 淡茶色土 (炭・焼土ブロックを含む)
 19. 茶色粘質土
 20. 茶色土 (炭を含む)
 21. 茶色土 (炭を含む)
 22. 黒茶色土
 23. 黒茶色土
 24. 黒茶色土
 25. 黒茶色土
 26. 黒茶色土
 27. 黒茶色土
 28. 黒茶色土
 29. 黒茶色土
 30. 黒茶色土
 31. 黒茶色土
 32. 黒茶色土
 33. 黒茶色土
 34. 黒茶色土
 35. 黒茶色土
 36. 黒茶色土
 37. 黒茶色土
 38. 黒茶色土
 39. 黒茶色土
 40. 黒茶色土
 41. 黒茶色土
 42. 黒茶色土
 43. 黒茶色土
 44. 黒茶色土
 45. 黒茶色土
 46. 黒茶色土
 47. 黒茶色土
 48. 黒茶色土
 49. 黒茶色土
 50. 黒茶色土
 51. 黒茶色土
 52. 黒茶色土
 53. 黒茶色土
 54. 黒茶色土
 55. 黒茶色土
 56. 黒茶色土
 57. 黒茶色土
 58. 黒茶色土
 59. 黒茶色土
 60. 黒茶色土
 61. 黒茶色土
- 東壁土層**
1. 灰色土=表土 (1~26.32)
 2. 黒色粘質土
 3. 橙茶色土
 4. 茶色土 (炭・焼土を多く含む)
 5. 茶色土 (橙茶色土ブロックを含む)
 6. 茶色土 (炭・焼土を多く含む)
 7. 茶色土
 8. 茶色土 (焼土ブロックを多く含む)
 9. 黄色土 (真砂土)
 10. 石組井戸
 11. 灰色粘質土
 12. 黄灰色粘質土 (土埋埋納遺構SX085)
 13. 黄灰色粘質土
 14. 真砂土と灰色土の互層
 15. 橙茶色土 (土管入り)
 16. 茶色土 (炭を多く含む)
 17. 茶色粘質土 (黄色砂と橙茶色粘質土を含む)
 18. 茶色土 (炭を含む)
 19. 茶色土 (大量の炭を含む)
 20. 茶色土 (大量の焼土を含む)
 21. 茶色土
 22. 茶色土 (大量の炭を含む)
 23. 茶色土
 24. 茶色土と茶灰色粗砂の互層
 25. 暗灰色粘質土
 26. 茶灰色粘質土
 27. 灰色土 (炭を含む)
 28. 灰色土
 29. 茶灰色土 (炭・焼土を含む)
 30. 31. SK005
32. 茶灰色土 (炭を含む)
 33. 淡茶灰色粘質土
 34. 茶色土
 35. 淡茶灰色土
 36. 暗茶色土
 37. 暗灰色土 (炭を含む)
 38. 茶灰色土
 39. 灰色土 (黄色土ブロックを含む)
 40. 茶色土 (炭を含む)
 41. 淡黄灰色土
 42. 茶灰色土 (SX080)
 43. 茶灰色土 (黄色土ブロックを含む)
 44. 茶灰色土 (黄色土ブロックを含む)
 45. 茶灰色土 (黄色土ブロックを含む)
 46. 茶灰色土 (黄色土ブロックを含む)
 47. 茶灰色土 (黄色土ブロックを含む)=SK064
 48. 茶灰色土 (SX097)
 49. 茶灰色粘質土 (SX097)
 50. 茶灰色粘質土と茶灰色砂の互層 (SD120)
 51. 暗灰色粘質土 (SD115)
 52. 茶灰色砂 (SD106)
 53. 黒灰色土 (炭を含む)=SF125
 54. 灰色粘質土 (炭を含む)=SX116
 55. 暗灰色土 (SD119)
 56. 茶灰色砂 (SD130)
 57. 淡灰色シルトと黄白色粗砂との互層 (SX134)
 58. 黒灰色土 (炭を含む)=SF135
 59. 茶灰色土 (マンガンを含む)=SX133
 60. 茶灰色粘質土 (SX136)
 61. 暗茶色土と灰色粗砂、礫の互層 (SX137)

図4 土層図 (1/80)

2、遺構

遺構、遺物は、1～3遺構面に分けて図や写真などの掲載を行なっている。

第1遺構面検出遺構

柵列

8SA075 (図5)

調査区西側で検出された柵列で、4つのピットが確認できた。さらに南北に延伸する可能性が高い。柱間はa～b間が1.9m、b～c間が2.3m、c～d間が1.7mである。柱間はややばらつきが大きい。柵列の振れはN-7° -Eで、北に対して東に振れている。

8SA100 (図5)

調査区西側で検出された柵列で、3つのピットが確認できた。さらに南北に延伸すると思われる。柱間はa～b間が2.2m、b～c間が2.4mである。柵列の振れはN-14° -Eで、北に対して東に振れている。

8SA140 (図5)

調査区中央で検出された柵列で、4つのピットである。柱間はa～b間1.9m、b～c間2.1m、c～d間2.3mである。柵列の振れはN-4° -Eで、北に対して東に振れている。8SB060、8SA075とは振れが異なる。

掘立柱建物

8SB060 (図5)

調査区北側で検出された建物で、1間×3間である。検出できたのは12のピットである。柱間b～d間は攪乱により、遺存していない。現状でさらに建物が北側に延伸するのかは確定できなかった。柱間は2.1mと2.2mで均等である。建物の振れはN-8° -Eで、北に対して東に振れており、現在の土地区割りに近い。

溝

8SD106 (図5)

調査区西側で検出された南北溝である。溝幅は約30～70cm、深い所で約30cmを測り、南に向かって延伸している。北に対して東に振れており、柵列8SA100に隣接している。

8SD120 (図13、CD写真61)

調査区西壁に接した南北溝である。調査区の制限により、溝幅や深さは確定できない。南北に向かって延伸しており、北に対して東に7° 振れている。土層観察から木片を含む有機質な暗灰色粘質土層と砂層との互層堆積が見られた。このことから滞水と流水を繰り返していた状況が考えられる。18世紀後半以降の時期と想定される。

土坑

8SK005 (図6、CD写真9・10)

調査区南東壁に接して検出された土坑である。長辺が3mほどで平面形が隅丸方形プランをなすと推定される。18世紀後半以降の遺物が大量に廃棄される。

8SK010 (図6、CD写真11・12)

調査区南側で検出され、直径1.3mほどの円形をなす形状を持つ土坑である。土師器小皿a、坏aのみが出土し、遺物から12世紀後半までに埋没している。

8SK015 (図6、CD写真13・14)

調査区南東側で検出された埋甕土坑である。長辺が60cmほどの楕円形をなす。甕底部を打ち割って

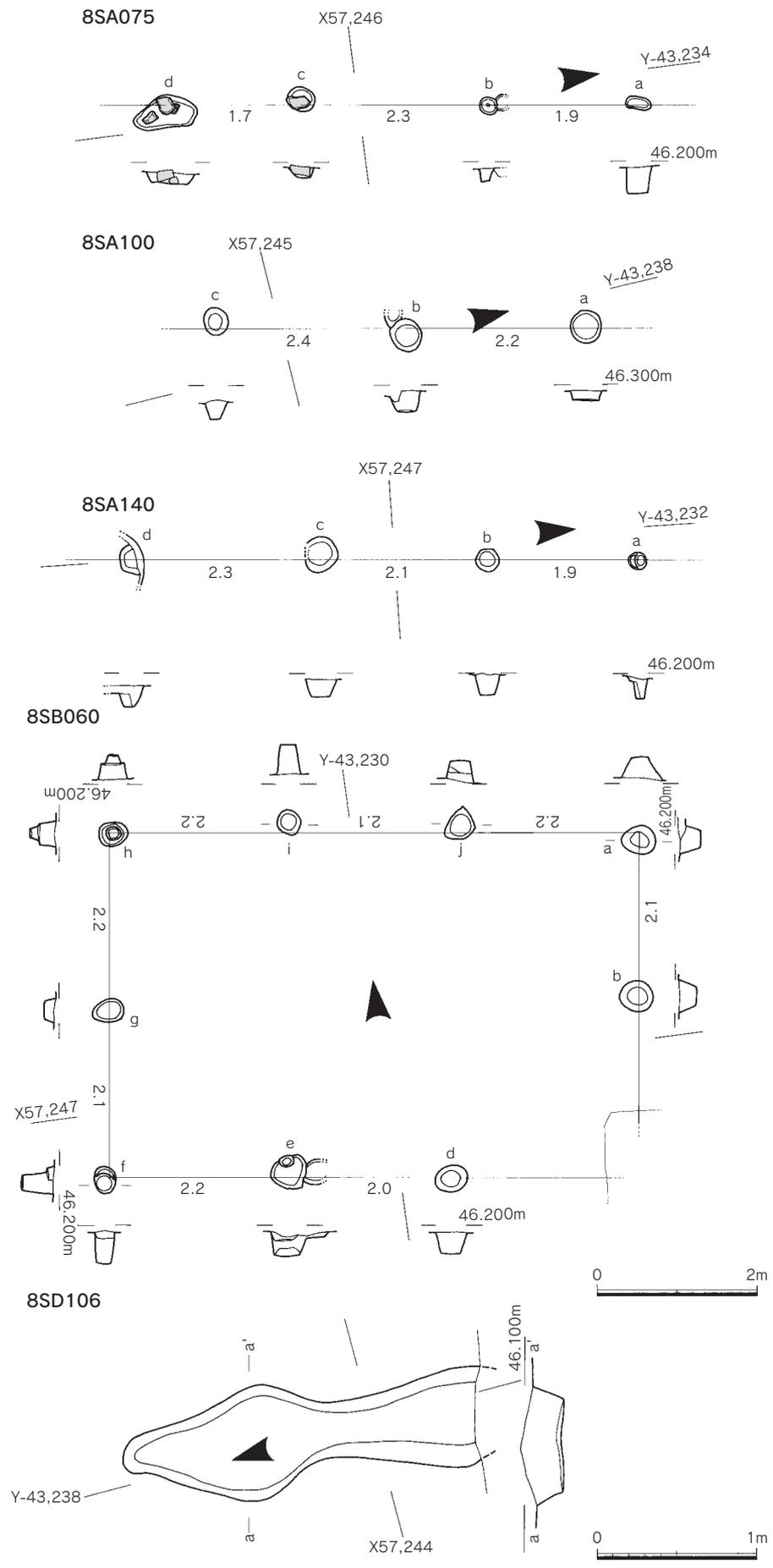
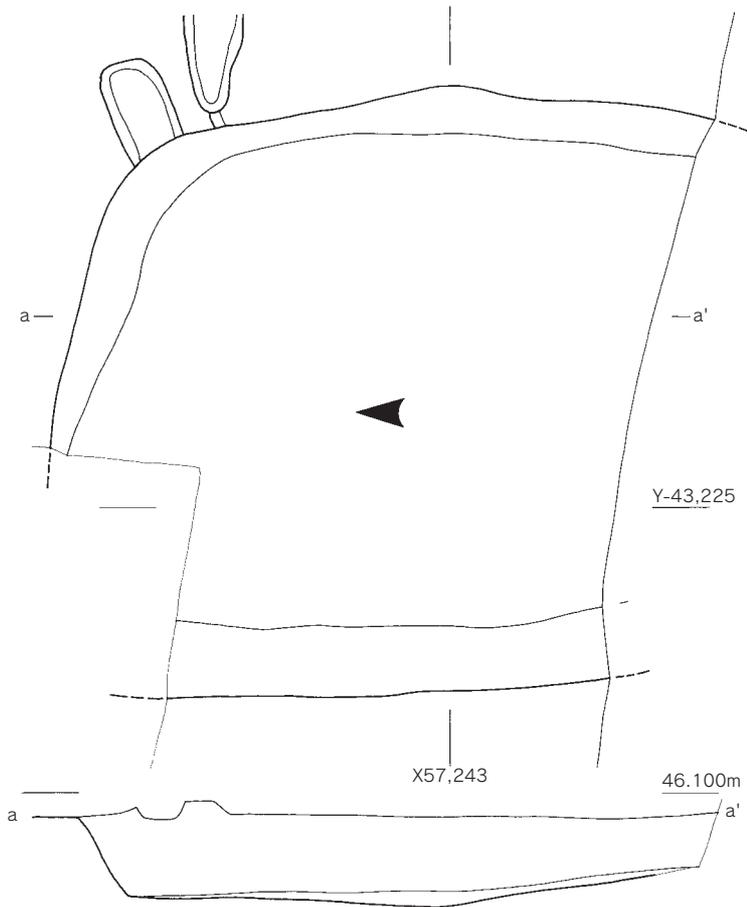
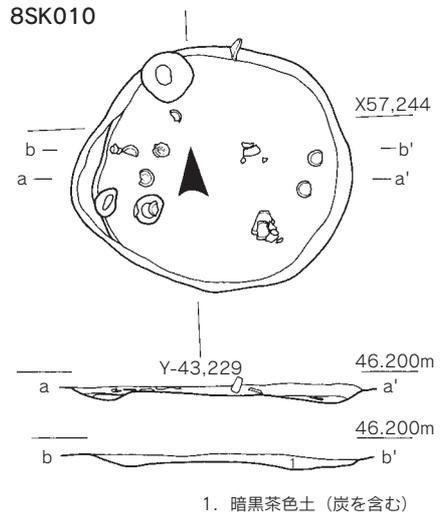


图5 8SA075·100·140、SB060、SD106实测图 (1/40、80)

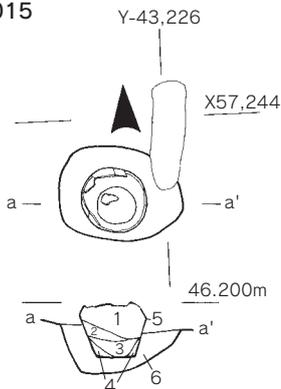
8SK005



8SK010



8SK015



- 8SK015
 1. 黒茶色土
 2. 黒茶色粘質土 (明黄色粘質土を含む)
 3. 明黄色粘質土
 4. 暗茶色土
 5. 瓦質大甕
 6. 灰茶色粘質土 (黄色粘ブロックを含む=掘方)

8SK020

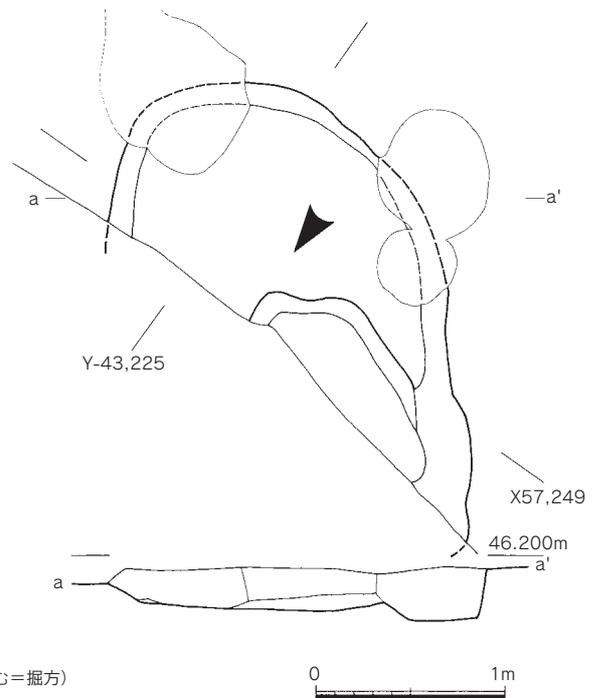


図6 8SK005・010・015・020実測図 (1/40)

いることから小便壺の可能性が高い。

8SK020 (図6)

調査区北東壁に接して検出された土坑である。平面形はやや長方形と推定される。幕末までの遺物が廃棄される。

その他の遺構

8SX085 (図4、CD写真15)

調査区南壁断面で検出した近代の埋納壺である。埋土は灰色土で、近代までの国産陶器の土瓶内に土師器小皿aが二枚納められていた。南側の道路に近い場所に面していることや他の類例から胞衣壺の可能性が高い。表土や黒灰色土で出土した遺物の中に同様の土瓶や小皿aが複数確認できることから、他にも同様の胞衣壺が埋納されていたと考えられる。

第2遺構面検出遺構

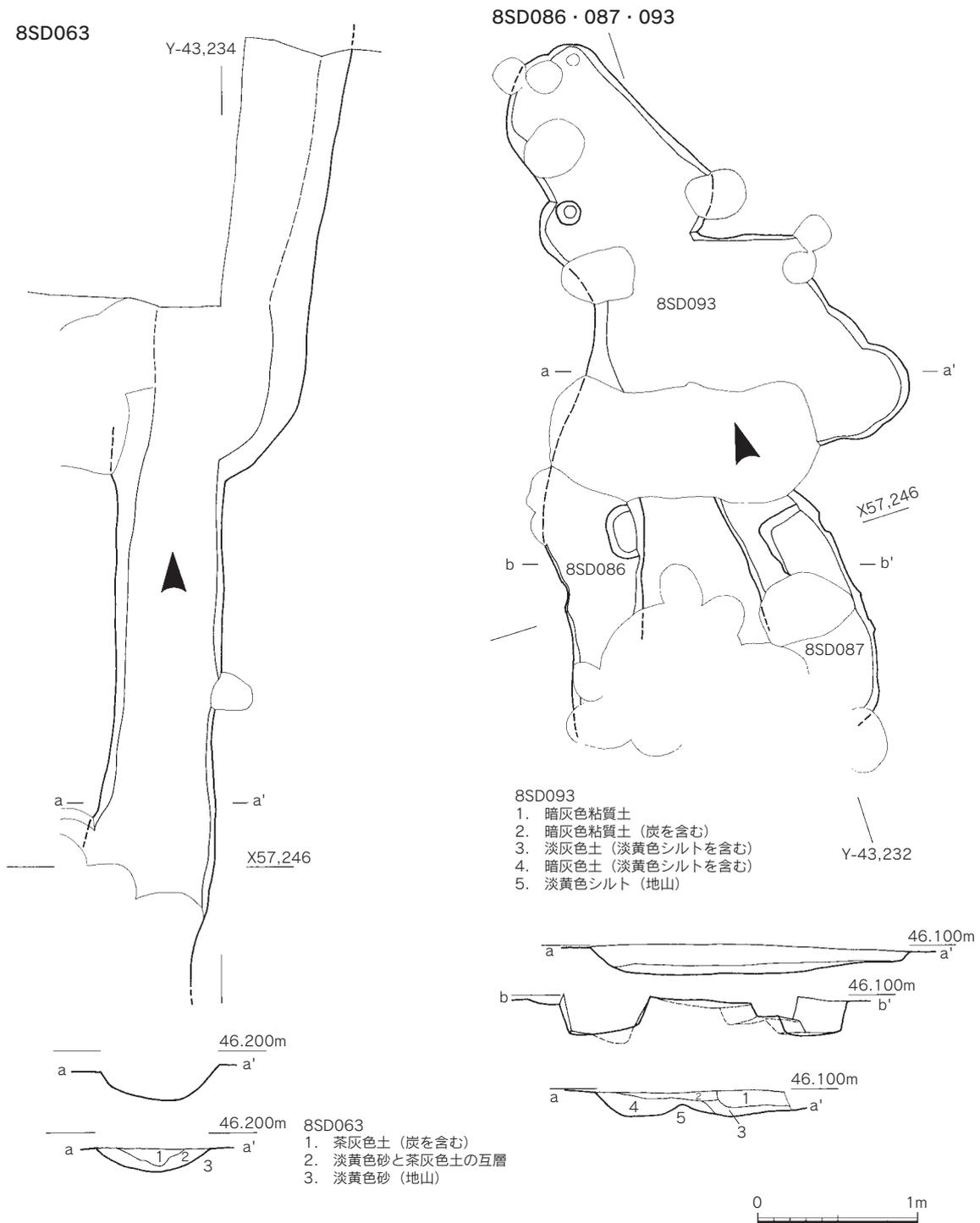


図7 8SD063・086・087・093実測図 (1/40)

溝

8SD063 (図7、CD写真16)

調査区西側で検出された南北溝であり、鑄造土坑8SX062に切られている。溝幅は60~70cmで、北に向かって延伸している。北に対して東に振れており、道路状遺構8SF125・135や8SD115の振れに近い。埋土は下から淡黄色砂と茶灰色土の混合土、炭混じりの茶灰色土の順に堆積し、最終埋没は12世紀後半と考えられる。

8SD086 (図7、CD写真19)

調査区中央西寄り検出された南北溝で8SD087に並行し、8SD093に接続する。溝幅60cm、深さ約40cmを測る。

8SD087 (図7、CD写真17・19)

8SD086と並行し、8SD093に接続する南北溝で、さらに南へ延伸する。溝幅50cm、深さ30cmを測る。埋土は下から暗灰色土、淡茶灰色土の順で堆積し、出土遺物から13世紀前半に埋没している。

8SD093 (図7、CD写真18・19)

南北溝8SD087の北側延伸部分にあたり、同一遺構の可能性が高い。

8SD115 (図13)

調査区西壁に接した南北溝で、第1遺構面検出の8SD120下層にあたる。埋土は暗灰色土で、8SD120に見られた滞水や流水の痕跡は確認できなかった。中世後期までの遺物を多く含むが、1点のみ肥前系染付の小椀が出土している。壁面に接した遺構のため、混入の可能性が高いと考え、第2遺構面検出遺構とした。

井戸

8SE025 (図9、Pla2-3、CD写真20)

調査区中央で検出された石組井戸で、調査時には井戸枠の石組がタコツボ状に変形していた。内径約1.4m、掘方径2.2m、深さ約2.0mを測る。平安時代後期までの整地層8SX080に切り込む遺構である。井戸底部には平均して縦50～60cm、横30cmまでの平坦な石をサークル状に立てて組み、その後石と粘土とで少しずつ枠を組み上げながら掘方を埋めていったと考えられる。石を組み上げる際に、接着と補強を兼ねた粘土を石と組み合わせて使用していることが分かった。井戸枠内は黄灰色粘質土、灰茶色土、茶灰色土の順で堆積し、出土遺物から最終埋没は13世紀中頃までと推定される。

8SE050 (図8、Pla2-4、CD写真21～24)

調査区東側で検出した井戸で、内径約0.7m、掘方径約2.4m、深さ1.9mを測る。表土剥ぎの際、トレンチで井戸中心部分を底部の曲げ物近くまで掘下げてしまっていた。このため、井戸の構造は不明である。平安時代後期までの整地層8SX080と第3遺構面検出の井戸8SX105に切り込む遺構である。井戸枠内は暗灰色粘質土、黒灰色土、灰色土の順で、たまり状に黒色土が堆積している。最終埋没は出土遺物から12世紀中頃までと考えられる。出土遺物では最上面のたまりと井戸枠内から大量の鑄造炉壁や鑄型、鞆羽口などの鑄造関係遺物が出土しており、12世紀中頃以前の段階の遺構周辺で鑄造が行なわれていたと推定される。さらに、井戸掘方埋土の茶灰色土層から瓦の一括廃棄が検出され、「安楽寺天承二年銘」と「安楽寺参重□(御カ)塔」の文字が入った平瓦が出土している。

道路状遺構

8SF125 (図9、CD写真25・26)

調査区西側で検出された道路状遺構で、幅約1.7m、深さ0.2mを測る。南北溝8SD115東側に近接し、北に対して東に約7°振れている。埋土は下から淡灰色砂、灰色シルトの順に堆積し、土層では砂とシルトが細かく互層堆積している状況が観察できた。12世紀後半までに埋没している。

8SF135 (図9)

8SF125下層で検出された。埋土は茶色土で、道路状遺構8SF125が切り込む。時期は出土遺物から12世紀中頃までと考えられる。

鑄造土坑

8SK045 (図10、Pla2-5・6、CD写真27～30)

調査区中央付近で検出され、長辺約80cmの楕円形プランを持つ土坑である。埋土は下から茶灰色土、茶灰色砂、灰色土、暗灰色砂、暗灰色土、炭を含む黒色土、黄茶色土、茶色土の順に堆積している。埋土はレンズ状に埋没している。炉壁や焼土が貼り付いた状況は確認できなかった。炭層の検出や大量の

8SE050・105

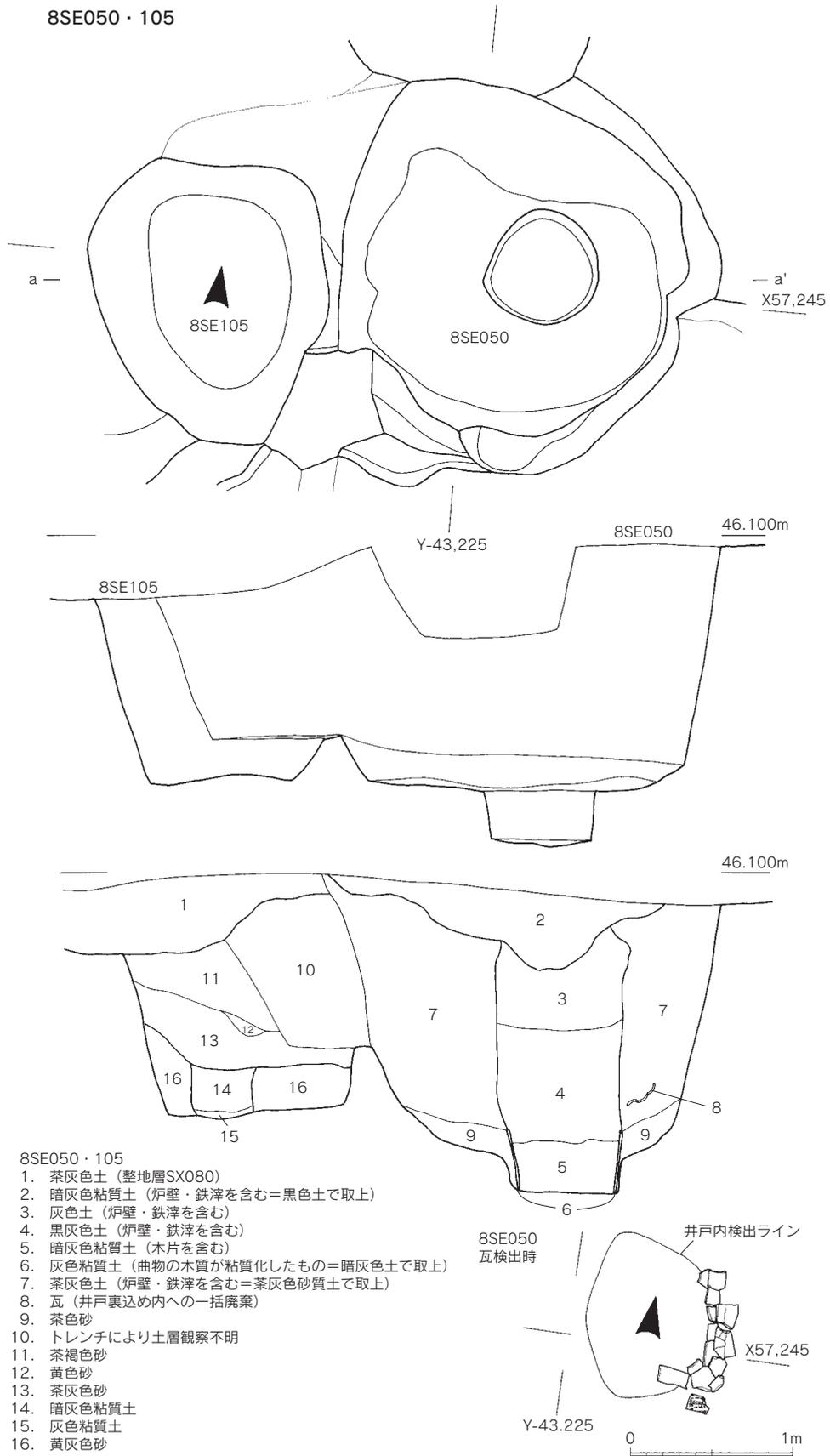
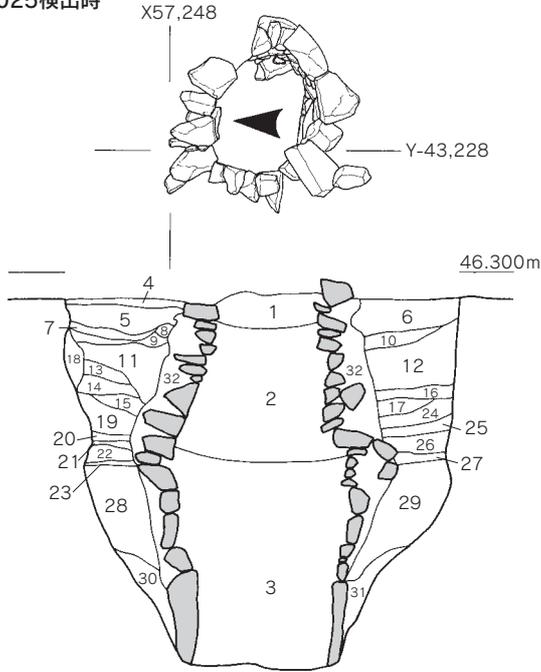
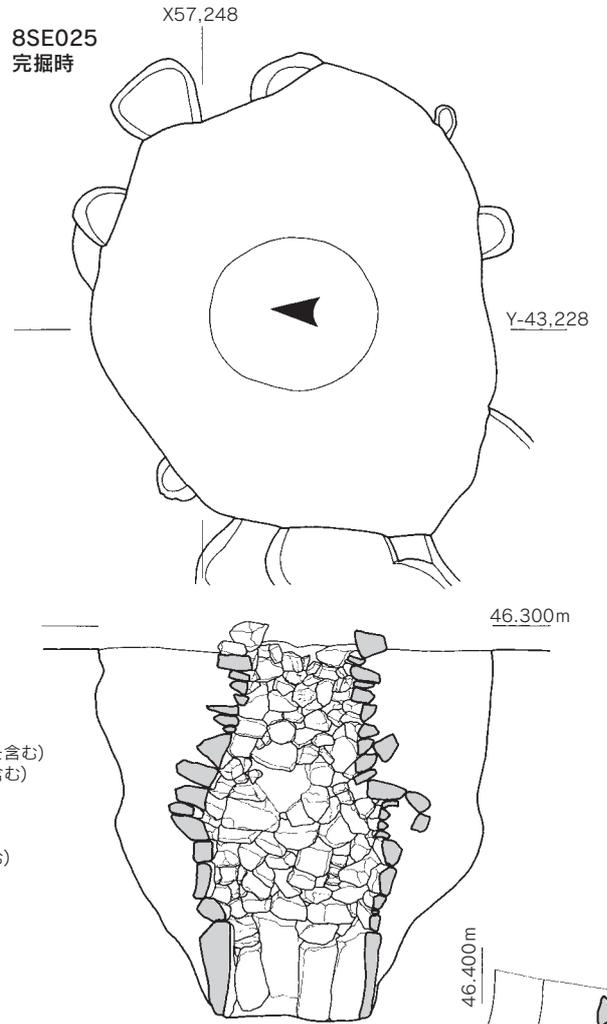


図8 8SE050・105実測図 (1/40)

8SE025検出時



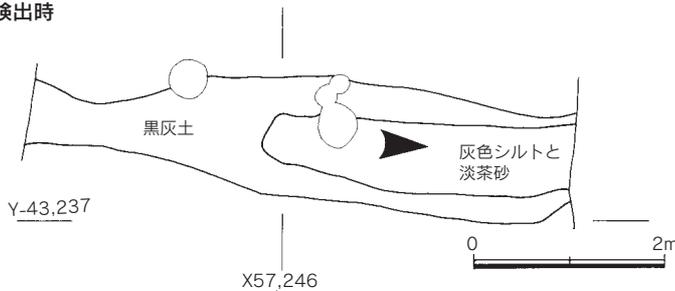
8SE025
完掘時



8SE025

- | | |
|--------------------------------|-----------------------|
| 1. 茶灰土 (井戸最終埋没) | 17. 茶灰色砂 |
| 2. 灰茶土 | 18. 茶灰色土 (黄色土ブロックを含む) |
| 3. 黄灰色粘質土 | 19. 茶色砂 (黄色土ブロックを含む) |
| 4. 茶色土 (灰色粘ブロックを含む=灰茶土で取上4~10) | 20. 茶灰色砂 |
| 5. 暗灰色土 | 21. 灰色粘質土 |
| 6. 暗灰色土 | 22. 灰色粘質土 |
| 7. 茶色粘質土 | 23. 茶灰色土 (灰色粘質土を含む) |
| 8. 灰色砂 | 24. 茶色砂 |
| 9. 灰色粗砂 (灰色土ブロックを含む) | 25. 暗灰色土 |
| 10. 茶色粘質土 | 26. 茶灰色砂 |
| 11. 暗灰色土 (茶色土ブロックを含む=暗灰色土で取上) | 27. 灰色粘質土 |
| 12. 暗灰色土 (茶色土ブロックを含む=暗灰色土で取上) | 28. 黄茶色砂 |
| 13. 暗灰色土 (茶灰色砂で取上=13~31) | 29. 茶灰色砂 |
| 14. 暗灰色土 (黄色土ブロックを含む) | 30. 灰色粘質土 |
| 15. 茶灰色土 (黄色土ブロックを含む) | 31. 暗灰色粘質土 |
| 16. 茶色砂 (黄色土ブロックを含む) | 32. 灰色粘質土 (灰色粘で取上) |

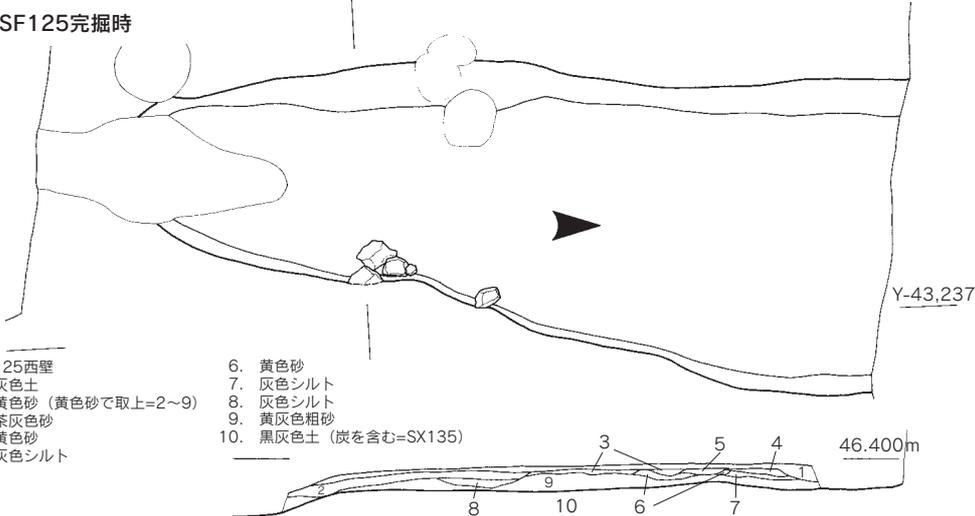
8SF125検出時



8SF125北壁

- | |
|-------------------------|
| 1. 茶灰色土 (橙色・黄色土ブロックを含む) |
| 2. 暗灰色土 (炭を含む) |
| 3. 灰色粘質土 (SD120) |
| 4. 暗灰色粘質土 (SD115) |
| 5. 黄色粘質土 (SX116~118) |
| 6. 茶色土 |
| 7. 灰色粗砂 (SF125=7~12) |
| 8. 灰色シルト |
| 9. 茶灰色砂 |
| 10. 茶色粗砂 |
| 11. 白色・茶色シルトの互層 |
| 12. 灰色シルト |
| 13. 灰色シルト |
| 14. 茶灰砂 (SD119) |
| 15. 黒灰色土 (炭を含む=SF135) |
| 16. 茶色土 |
| 17. 灰色土 |
| 18. 石積 (SD130) |

8SF125完掘時



8SF125西壁

- | | |
|---------------------|------------------------|
| 1. 灰色土 | 6. 黄色砂 |
| 2. 黄色砂 (黄色砂で取上=2~9) | 7. 灰色シルト |
| 3. 茶灰色砂 | 8. 灰色シルト |
| 4. 黄色砂 | 9. 黄灰色粗砂 |
| 5. 灰色シルト | 10. 黒灰色土 (炭を含む= SX135) |

図9 8SE025、SF125・135実測図 (1/40、80)

鞆羽口、鑄造炉壁や鑄型などの鑄造遺物の出土から、廃棄土坑もしくは炉跡の可能性も考えられる。最終埋没は13世紀中頃以降と推定され、井戸8SE025・050に切り込んでいる。

8SK062 (図10、CD写真31・32)

調査区南西側で検出され、一辺1.7mの正方形プランを持つ土坑である。南北溝8SD063、南北方向に延伸する西への落込み8SX150と溝状遺構8SX066に切り込む遺構である。埋土は最下層の淡灰色土で大量の炭を含み、最上層で炭と焼土塊を含む黒灰色土が確認できた。炉壁や鞆羽口、鑄型などの遺物が大量に出土している。8SK064の西に隣接し、炭層と大量の鑄造関連遺物の出土から廃棄土坑か、炉跡の可能性が高い。埋没時期は出土遺物から13世紀中頃と考えられる。

8SK064 (図10、Pla3-1、CD写真33～36)

8SK062の東に近接して検出され、幅1.3mを測る。溝状遺構8SX066と整地層8SX080に切り込む遺構である。ピット状の掘り込み(8SX082で取り上げ)に炉壁が残った状況が確認でき、炉跡の可能性が高い。炉壁から北西方向に地山に貼り付くように流動滓状の(8SX065で取り上げ)遺物が出土している。炉壁付近には鞆羽口の破片も確認でき、北西方向に流れ出た流動滓と逆の方向に羽口が差し込まれていたと推定される。この遺構は13世紀中頃には埋没している。

土坑

8SK055 (図11、CD写真37・38)

調査区中央北壁に接して検出された土坑で、長辺約2.7mを測る方形と推定される。埋土は下から暗灰色粘質土、灰色シルト、淡灰色土、灰色土、暗灰色土の順に堆積しており、出土遺物から埋没は12世紀後半までに埋没している。

8SK110 (図11、CD写真39)

調査区北東側で検出された。土坑8SK045に切られ、平面形は不明である。出土遺物から埋没は12世紀初頭と考えられる。鑄造関連遺物はまったく出土していない。

第3遺構面検出遺構

柵列

8SA145 (図12)

調査区西側で検出された柵列で、3つのピットである。さらに南北に延伸する可能性が高い。柱間はa～b間2.5m、b～c間2.25mである。柱間はややばらつきがある。柵列の振れはN-10°-Eで、北に対して東に振れている。

溝

8SD070 (図12)

調査区中央で検出された東西溝で、12世紀前半の整地層8SX080除去後に検出された。溝幅は約35cmで、深い所で約10cmを測る。11世紀後半～12世紀初頭までの遺物が出土している。

8SD130 (図13、Pla3-2、CD写真40～51)

調査区西壁に接した石敷きの南北溝で、8SD120、115の下層にあたる。溝の南側延長部分は西に流れる藍染川と小鳥居小路から溝尻にかけて南に流れる溝との合流地点にあたる。これまでの連歌屋遺跡の調査で同じく南北に延伸する溝が検出されている。方位から見て同様の土地区割りに関わる南北溝だと考えられるが、斜面に石を敷いた(ないし貼った)状況で検出されたのは初めてである。石積みは石垣のように規則性のある積み方ではなく、大小様々な石を隙間なく敷いた状況で検出された。構成される石のほとんどが花崗岩の河原石で、一部五輪塔火輪風未製品や石臼片などが含まれている。溝のベース面にあたる落ち込み8SX133の時期から12世紀中頃以降に、石積みが形成されたと考えられる。その

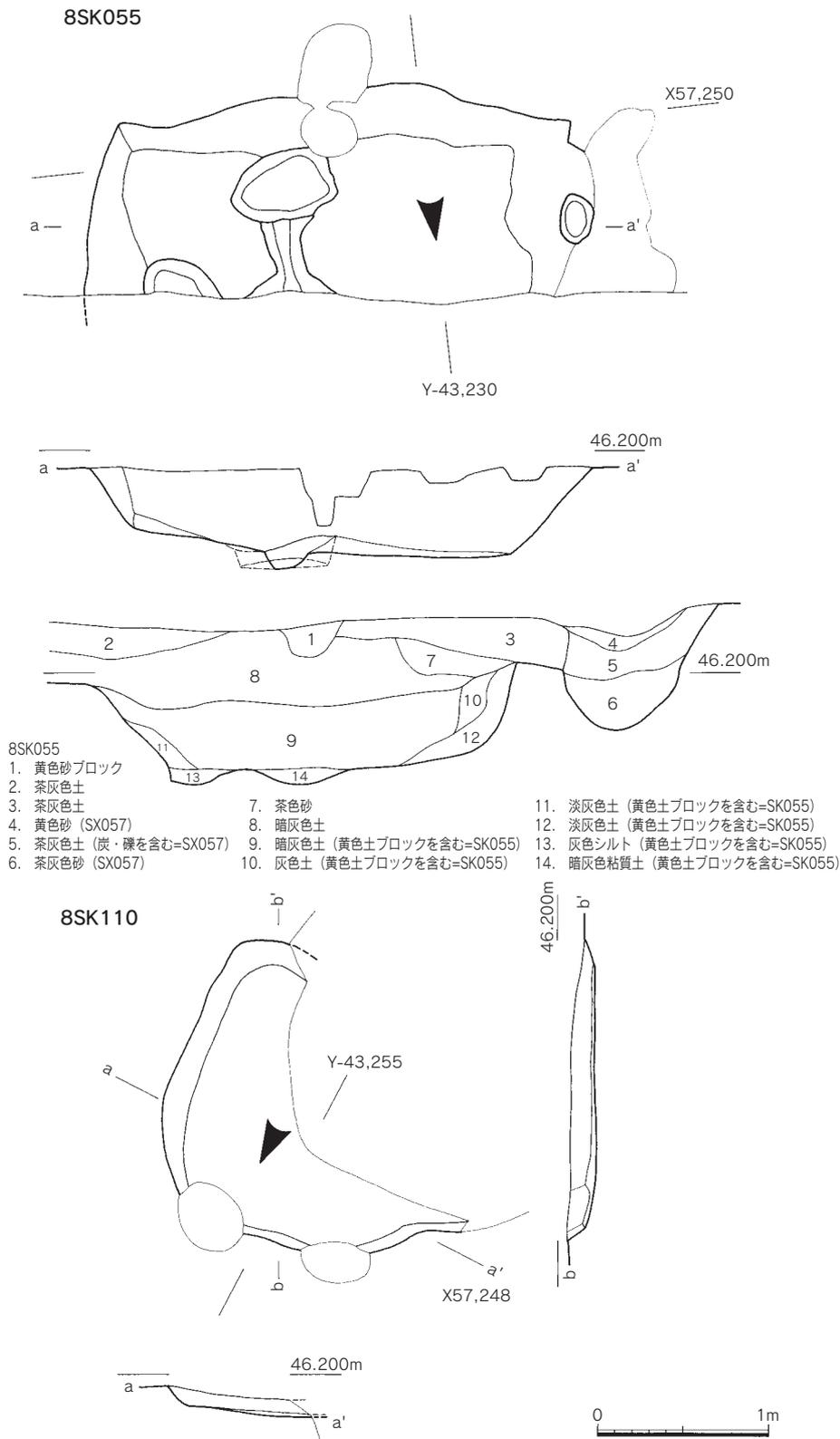


図11 8SK055・110実測図 (1/40)

なく、鋳造関連遺物は皆無である。時期は出土遺物から11世紀後半～12世紀初頭までと考えられる。

土坑

8SK096 (図12、CD写真56・57)

調査区中央付近で検出され、直径1.6mの楕円形をなす土坑である。12世紀前半の整地層8SX080除去後検出された。埋土は下から淡灰色土、黄灰色土、黄灰色砂の順に堆積する。遺構の時期は整地層8SX080の関係から12世紀前半以前に埋没と推定される。

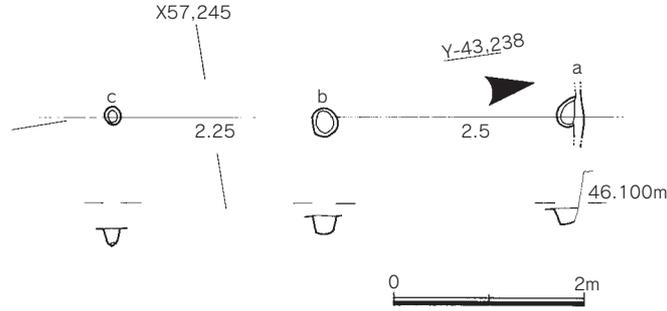
後、8SD115が埋没する14世紀後半までの間に五輪塔風石(図33-29)などが石敷きに加えられたと推定される。この遺構は調査区北側に位置する連歌屋遺跡でも検出されていた平安時代後期の溝と連続している可能性が高い。平安時代後期の街区割りを示す貴重な遺構として、石積み検出状況で調査を止め、地下に保存することになった。なお、南壁土層付近で石積みの構造と時期を確認するためにトレンチを入れ、土層観察を行った。

井戸

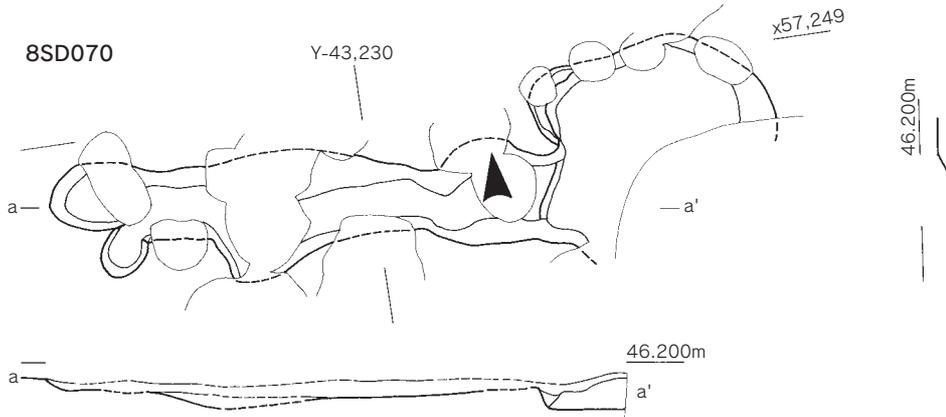
8SE105 (図8、CD写真54・55)

調査区中央で検出された井戸である。井戸枠が確認できず、井戸底の曲げ物の痕跡のみが検出できた。8SE050とトレンチで若干削平されている。12世紀前半までの整地層8SX080除去後検出された。調査区内ではもっとも古い井戸である。切り合い関係のある第2遺構面の井戸8SE050とは対照的に、極端に遺物が少

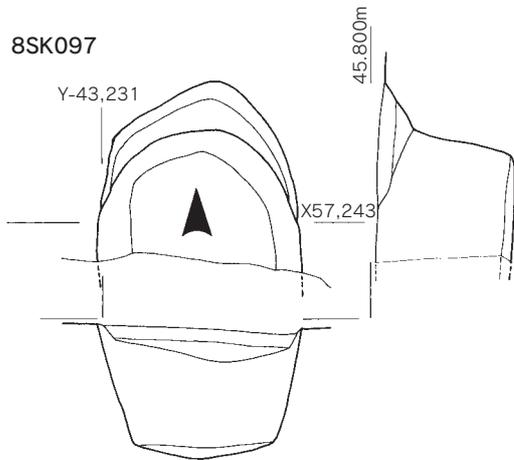
8SA145



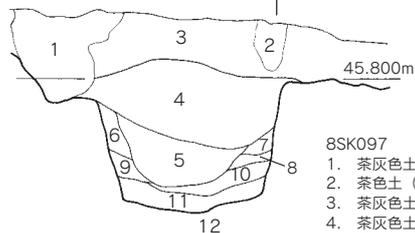
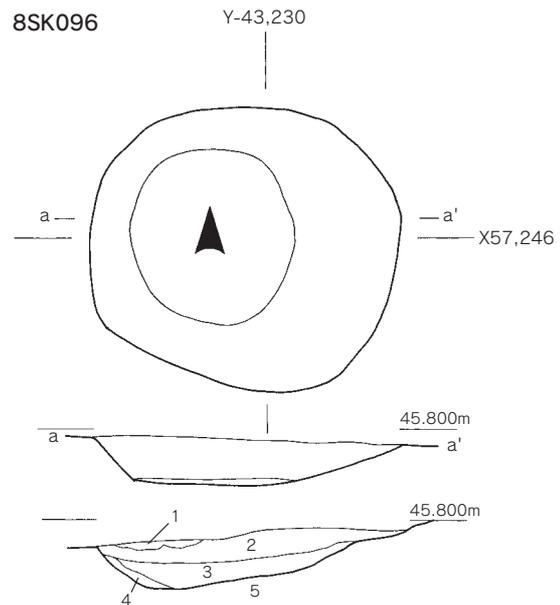
8SD070



8SK097



8SK096



8SK097

1. 茶灰色土 (炭・黄色土ブロックを含む)
2. 茶色土 (灰を含む)
3. 茶灰色土 (整地層SX080)
4. 茶灰色土 (SK097)
5. 茶灰色粘質土 (黒灰土で取り上げ=5~11はSK097)
6. 灰色土 (橙色土ブロックを含む=6~11は黄灰土で取り上げ)
7. 灰色土 (橙色土ブロックを含む)
8. 橙色土ブロック
9. 淡灰色土ブロック
10. 淡灰色粗砂
11. 灰色粘質土
12. 淡黄色土 (地山)

8SK096

1. 黄茶色土ブロック(黄灰色砂で取り上げ)
2. 灰色粗砂 (黄灰色土で取り上げ)
3. 淡白色シルト (灰色粗砂を含む=淡灰土で取り上げ)
4. 淡白色シルトブロック (淡灰土で取り上げ)
5. 灰色粘質土 (地山)



図12 8SA145、SD070、SK096・097実測図 (1/40、1/80)

8SK097 (図12、CD写真58)

調査区中央南壁に接して検出された。深さ約70cmを測り、調査区の関係で平面形は不明である。埋土は下から黄灰色土、黒灰色土の順に堆積し、時期は出土遺物から11世紀後半～12世紀初頭までと考えられる。

整地層

8SX080 (図4、CD写真59)

1、2面目と3面目を区切る12世紀前半までに埋没の整地層である。調査区中央から南にかけて認められる。後世に削平を受けていると考えられるが、約15～25cmくらいの厚みの茶灰色土で整地されている。

落込み

8SX133 (図13)

調査区西側で検出され、南北溝8SD130茶灰色砂のベース面になる落ち込みである。埋土は茶灰色土で、出土遺物は全体の量的にほとんどがへら切りだが、若干糸切りの小皿aが見られる。時期は12世紀中頃で収まると考えられる。

8SX134 (図13)

8SX133上面に切り込む遺構で、幅2m、深さ約0.5mを測る。淡灰色シルトと黄白色粗砂との互層堆積である。切り合いから南北溝8SD130茶灰色土のベース面になる。時期は出土遺物から12世紀前後と考えられる。

8SX136 (図13)

調査区反転部分の7ライン上で検出した落ち込みである。東側ではS-26で掘り下げた遺構と同一である。埋土は茶灰色粘質土で、出土遺物の供膳具から12世紀中頃までに埋没している。

8SX137 (図13)

調査区反転部分の7ライン上で検出した落ち込みで、8SX136の下層にあたる。東側で調査を行なった時にはS-44で掘り下げている。埋土は下から茶灰色砂、暗灰色砂、礫を含む灰色粗砂の順に堆積している。時期は出土遺物から土師器坏a、小皿aともにごく少量の糸切りが含まれるため、12世紀中頃までと考えられる。

3、遺物

第1遺構面出土遺物

柵列出土遺物

8SA075c出土遺物 (図14、CD写真63・64)

土師器

小皿a(1) 口径7.4cm、器高1.0cmを測る。底部切り離しは糸切りである。S-14出土。

石製品

砥石(2) 6.4×4.1cm、厚さ1.8cmを測る破片である。石材は灰黒色の泥岩で、対馬産の可能性がある。小振りな形状ときめ細かな石材から、手持ちの上砥と考えられる。S-28出土。

その他に写真のみの資料(CD写真63・64-3)で同安窯系青磁椀I類がS-14で出土している。

8SA100a出土遺物 (図14、CD写真65・66)

土師器

坏a(1) 底部のみの小片で、底径9.0cmを測る。内面見込み部分に渦巻き状の模様が残り、底部糸切りである。

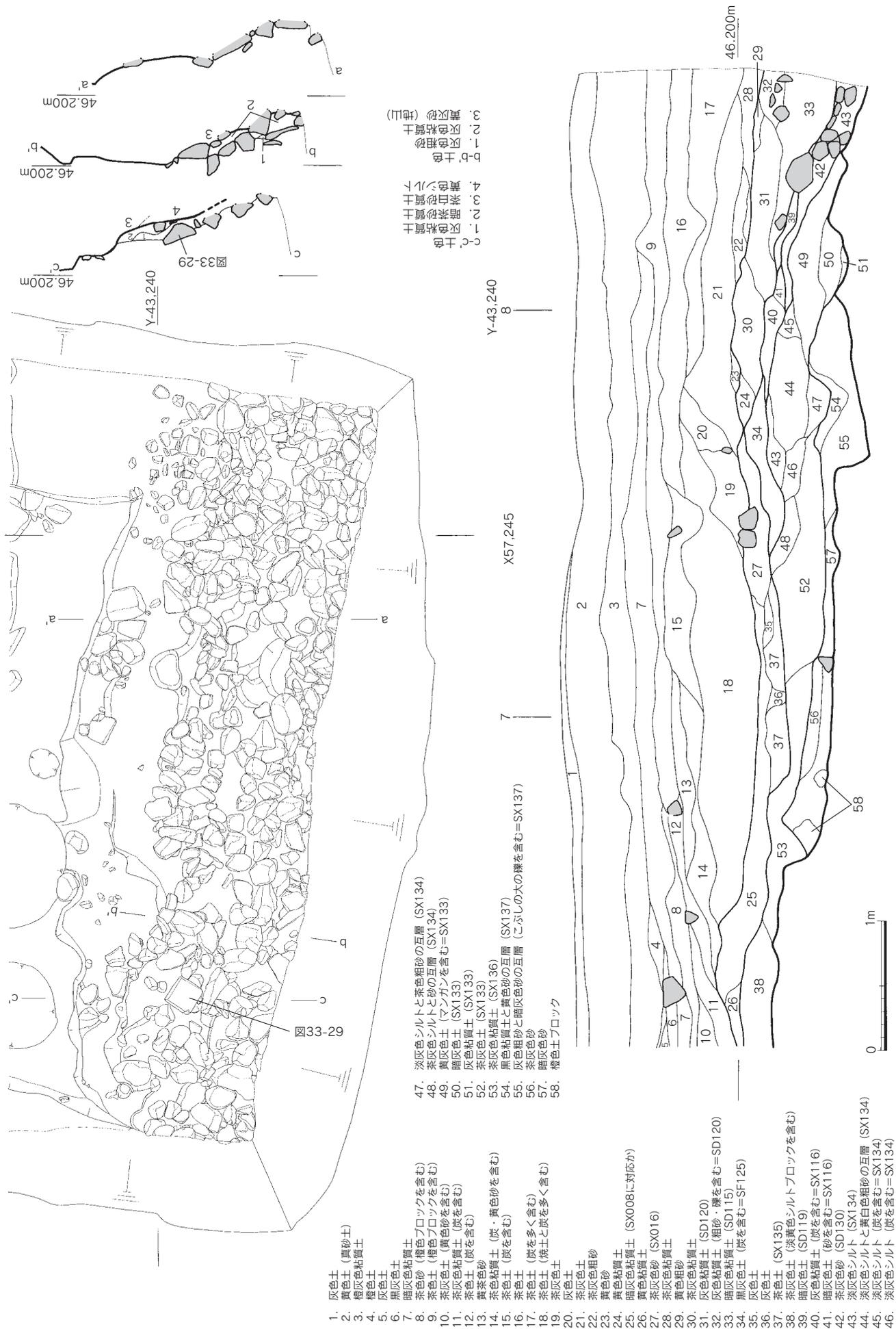


図13 8SD130実測図、SX133・134・137断面図 (1/40)

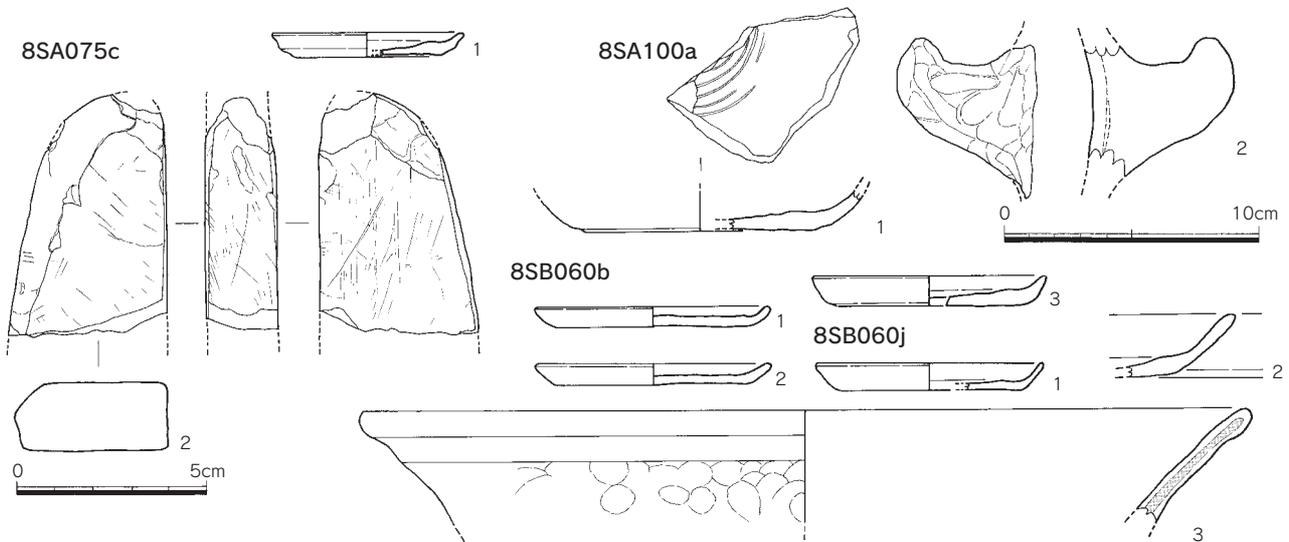


図14 8SA075・100、SB060出土遺物実測図（1/2、1/3）

甗（2） 把手部分のみの小片である。

その他に、写真のみの小片（CD写真65・66-3）であるが、同安窯系青磁椀片が出土している。

掘立柱建物出土遺物

8SB060 b 出土遺物（図14、CD写真62）

土師器

小皿a（1～3） 口径9.0cm、器高0.8～1.2cmを測る。底部糸切りで、XIV期以降と考えられる。S-13出土。

SB060 j 出土遺物（図14、CD写真62）

土師器

小皿a（1） 口径9.0cm、器高1.0cmを測り、底部糸切りである。S-38出土。

坏a（2） 口縁のみの小片で、器高2.5cmを測る。底部糸切りである。S-38出土。

土師質土器

鉢D（3） 口縁のみの小片で、口径35.0cm、器高4.5cmを測る。三足が付くと想定され、胎土が精良で断面がやや瓦質に焼きあがる。S-38出土。

溝出土遺物

8SD106出土遺物（図15、CD写真70・71）

土師器

小皿a（1～3） 口径9.5～9.8cm、器高0.8～1.3cmを測る。底部ヘラ切りで、板状圧痕が残る。

坏a（4・5） 4は口径13.7cmを測り、底部ヘラ切りである。5は口径14.2cm、器高2.3cmを測る。底部ヘラ切りで、外反気味の口縁形態をもつ。

丸坏a（6～9） 口径15.0～16.0cmを測り、押し出しによる内面ミガキbと外面の指圧痕が残る。6・7は淡黄白色の精良な胎土である。

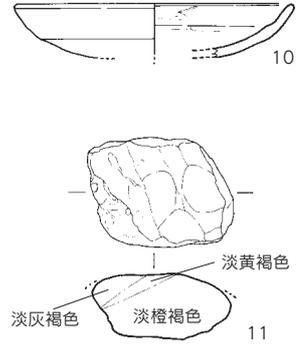
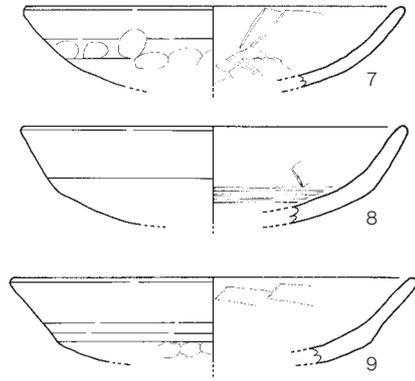
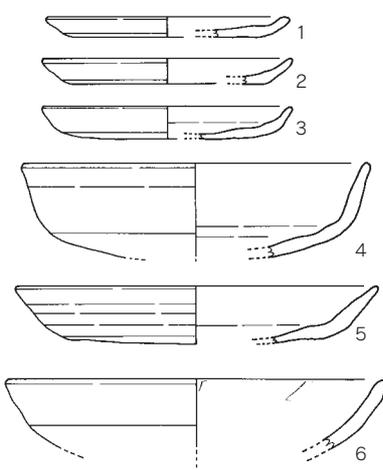
瓦器

小皿a（10） 口径11.0cmを測り、底部ヘラ切りである。口縁端部の燻しが良好で、内面にミガキcを施す。

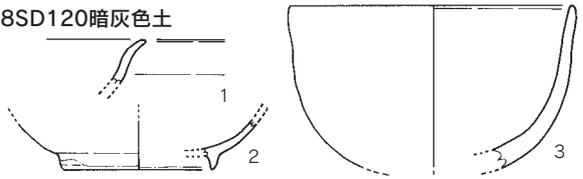
土製品

鋳型（11） 縦4.3×横5.6cm、厚さ2.6cmを測る破片である。胎土は白黄色の細かな砂粒で被熱に

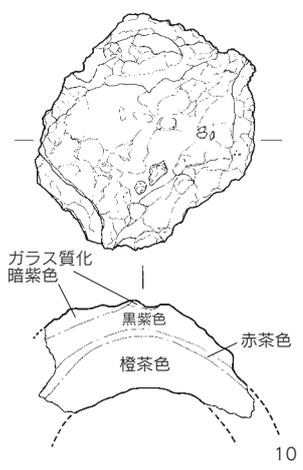
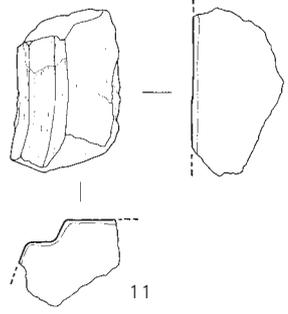
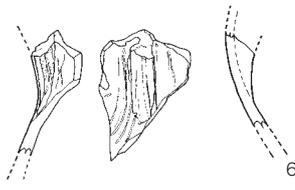
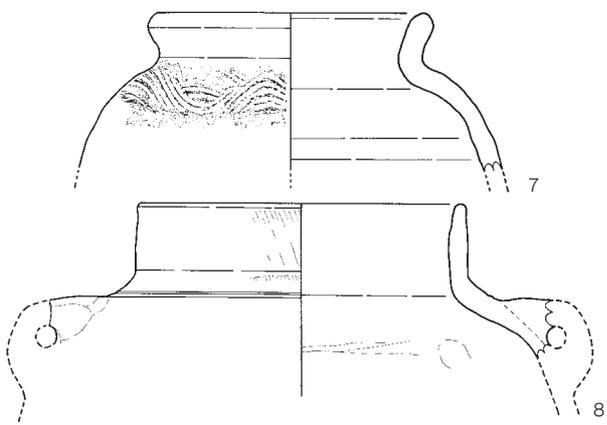
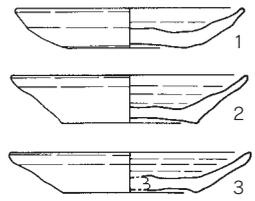
8SD106



8SD120暗灰色土



8SD120暗灰色粘質土



0 10cm

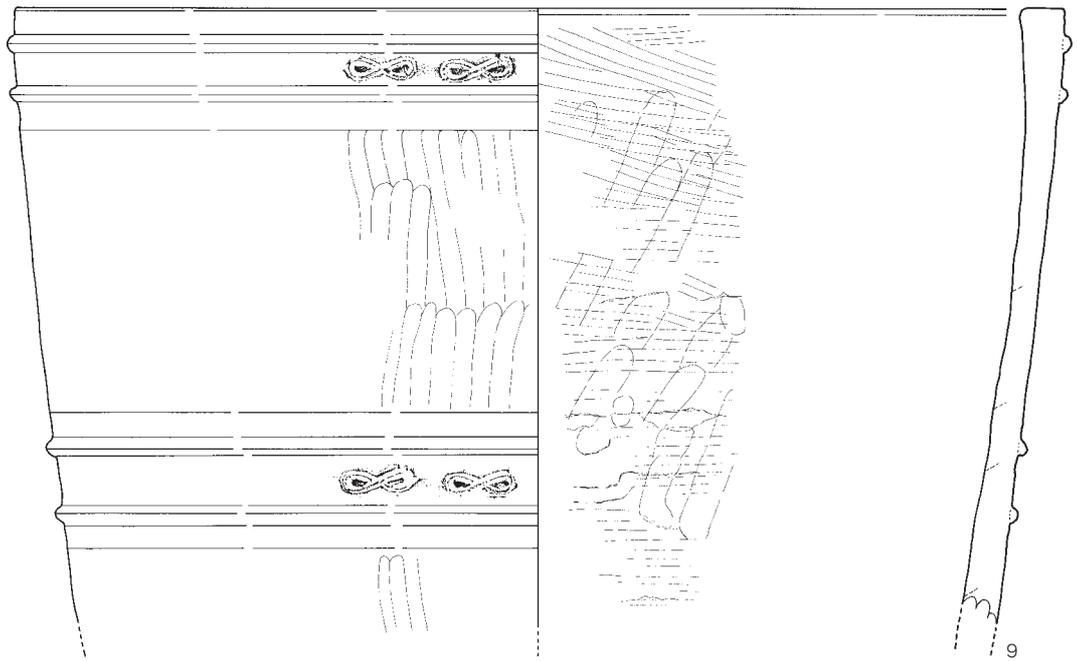


図15 8SD106・120出土遺物実測図 (1/3)

より酸化しているが、鑄込み面は確認できない。残存面に指押さえによる成形痕が確認できる。

8SD120暗灰色土出土遺物 (図15、CD写真70～72)

国産磁器

坏(1・2) 1は口縁部のみの小片で、外反した口縁端部をもつ。2は底部のみの破片である。

丸椀(3) 口縁から体部のみの破片である。淡褐色の精良な胎土で、淡黄褐色の薄い釉がかかる。

8SD120暗灰色粘質土出土遺物 (図15、CD写真70～72)

土師器

小皿b(1～4) 口径9.0～11.2cm、器高1.6～2.2cmを測る。底径が5.1～6.8cmと小さく、小皿aとbの中間的な形態を持つ。底部糸切りで、内底のナデや板状圧痕は見られない。

坏a(5) 口径13.5cm、器高2.7cmを測り、底部糸切りである。

土師質土器

釜B類(8) 口縁から体部上面にかけての破片である。残存する体部の形状から内面が偏球状になるB類にあたと推定した。耳貼り付け部分に一条の沈線がめぐる。

瓦質土器

火鉢AI(9) 口径41.0cm、器高24.5cmの破片である。大型の深鉢状で、胴部がバケツ状に開くタイプである。粘土帯貼付けにより、口縁と体部外面に2重突帯がめぐり、突帯周辺のヨコナデから凹型板状の工具によるナデが施される。

緑釉陶器

水注(6) 把手貼り付け部分のみの小片である。外面にミガキを施す。精良な胎土の須恵質な焼成である。釉調は緑灰色を呈し、薄く施釉される。残存する形状から把手の下部と考えられる。

国産陶器

小壺(7) 口径10.5cm、器高6.3cmの破片である。口縁端部は丸く、体部上面にヘラによる波状文がある。外内面は淡灰白色で、外面に一部淡黄白色の自然釉がかかる。形態から備前陶器伊藤編年Ⅲ×Ⅳ期と考えられる。

土製品

鑪羽口(10) 口径11.0cm、内径7.5cmを測る。胎土はスサや籾殻を多く含み粗く、内面は酸化により橙茶色を呈す。外面は大半が溶解し、暗紫色や赤紫色のガラス質に変容している。

鑄型(11) 縦6.4cm、横3.9cm、厚さ3.5cmを測る破片である。2段になる口縁部で、傾斜する体部は直線である。形状から鍋の鑄型と推定される。胎土は真土部分は精良な砂粒で、中真土部分は黒色砂粒や籾殻を若干含み、やや粗い。挽型による成形痕が残り、鑄込み面は還元気味の淡灰茶色だが、クロミはみられない。

土坑出土遺物

8SK005黄茶色粘質土出土遺物 (図16、Pl3-3、CD写真73・78・79)

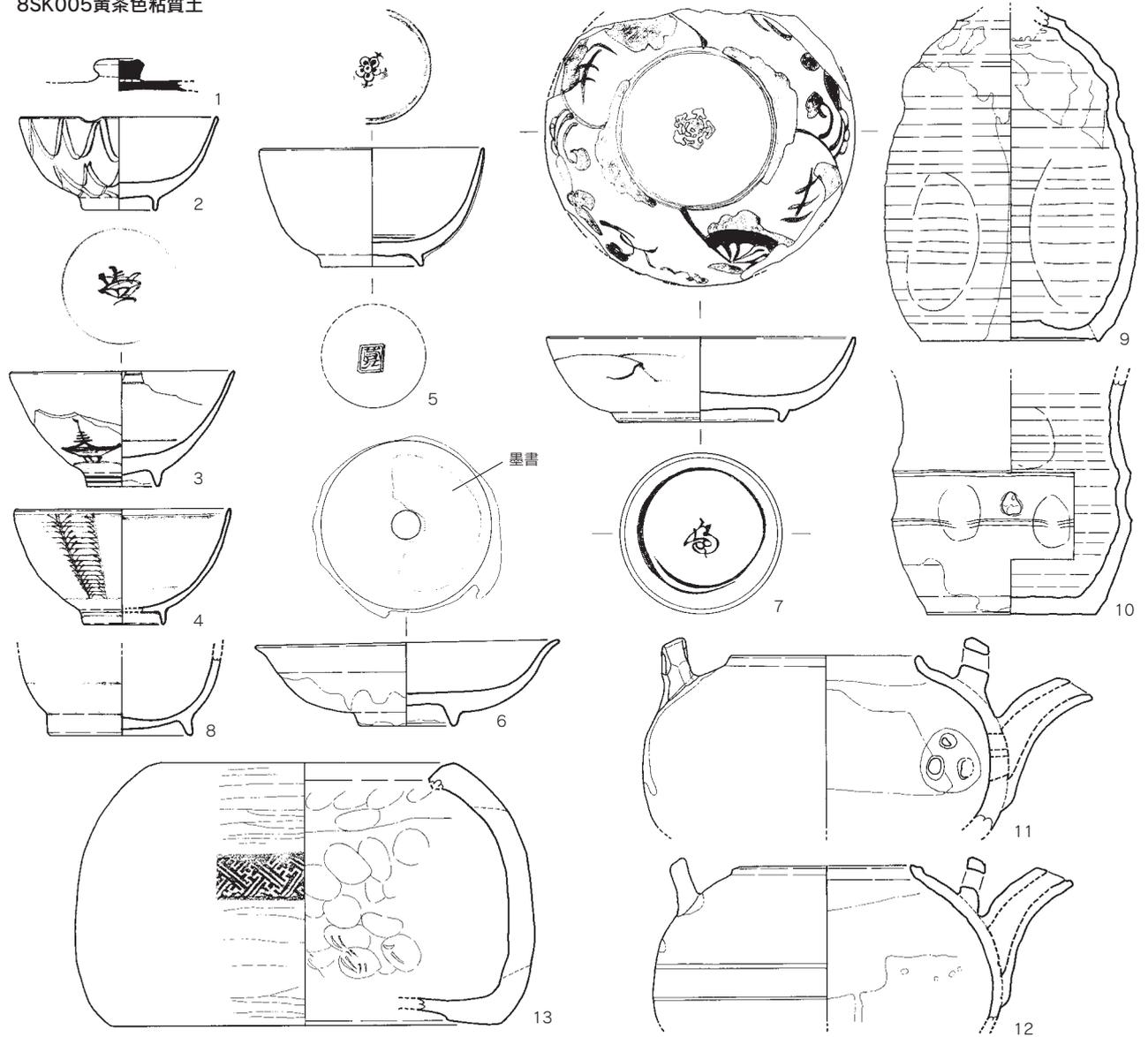
須恵器

蓋(1) つまみ部分のみの小片である。天井部は回転ヘラケズリで、貼り付けのやや扁平なつまみが付く。

瓦質土器

焜炉(13) 口径13.6cm、器高11.8cmを測る。饅頭状の形態で、胎土は黄灰色で砂粒や黒色粒を含みやや粗い。焜しは良好で、外面に細かなミガキc後、体部中央部にローラーによる連続文様が入る。内面は指押さえ成形が残り、口縁下部から見込みにかけて煤が付着している。

8SK005黄茶色粘質土



8SK005褐色土

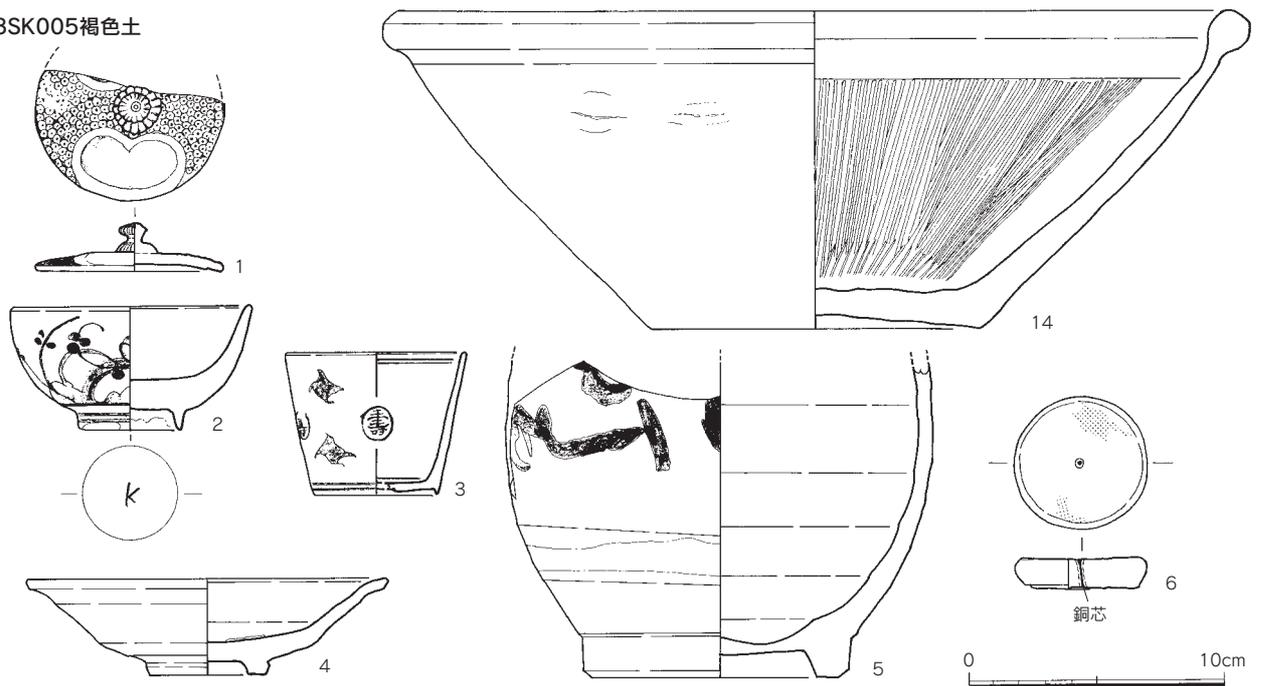


图16 8SK005出土遺物実測図1 (1/3)

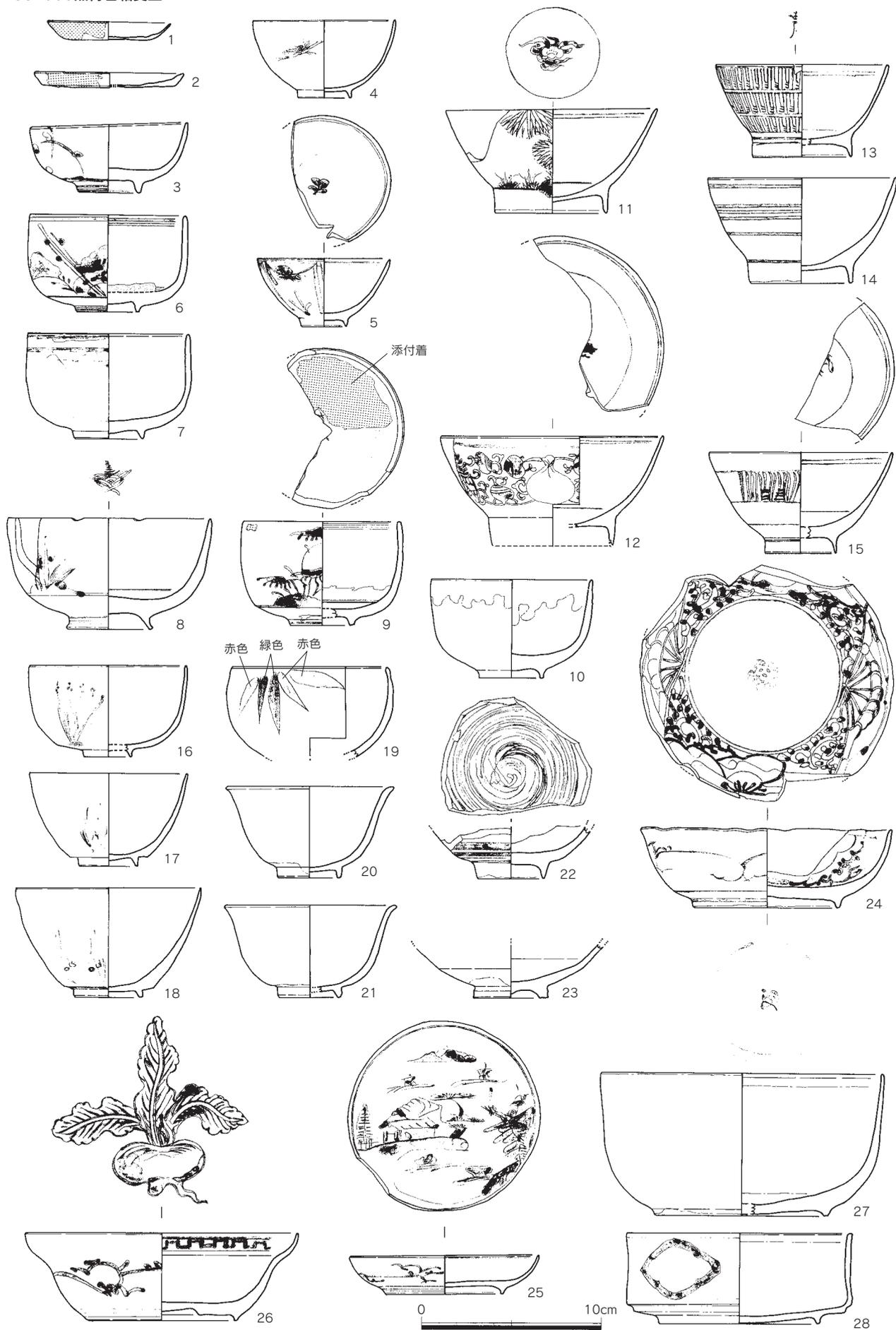


図17 8SK005出土遺物実測図2 (1/3)

肥前系磁器

椀（2～5） 2は口径8.8cm、器高4.2cmを測る。高台には釉ふき取り後剥離材の白色砂粒があり、対応するように内面見込みに重ね焼きによる輪状の砂粒が付着している。外面には網目文様が二重線で施され、呉須はやや暗い青色である。3は口径10.0cm、器高5.2cmを測る。内面見込みと外面には荒磯文が入り、呉須は暗い青色である。4は口径9.6cm、器高5.2cmを測る。口縁内外面に一条圈線が入り、外面に草文が施される。呉須は明るい青色である。5は口径10.0cm、器高5.4cmを測る丸椀である。内面見込みには手書き五弁花、底部畳付には二重界線内に「筒江」銘が入る。

皿（7） 口径13.8cm、器高3.8cmを測る。高台見込みにコンニャク印判の五弁花、高台畳付に渦福が入る。内面には草扇子文、外面は4分割の細い連続唐草文を施し、呉須は暗い藍色である。

徳利（8） 高台径6.5cmを測る高台のみの小片である。外面と体部下半に一条圈線が巡る。呉須は明るい青色である。

国産磁器

皿（6） 口径13.6cm、器高3.8cmを測る。口縁部は外反ぎみで、内面見込みに蛇ノ目釉剥ぎし、墨書が残る。

国産陶器

徳利（9・10） 9は器高14.8cm、底径8.0cmを測り、口縁部のみが欠損している。胎土は暗灰褐色で、外面には鉄釉～藁灰釉～飴釉と掛け合いがある。胴部上半で凹みがあり、下半には指圧で二カ所ほど凹みが施される。10は胴部～底部にかけての破片である。胎土は明茶褐色で多くの砂粒を含み粗い。胴部が竹節状に凹み、粘土塊を貼り付けて枝瘤を表現している。

土瓶（11・12） 11は胎土が茶褐色を呈し、白土を付けがけした後にやや黄色の透明釉がかかる。全体に淡黄白色な色調になっている。12は胎土が赤茶色を呈し、白土付けがけし、飴色の透明釉をかける。全体的に器壁が薄い。

播鉢（14） 口縁は丸い端部で、やや凸面に湾曲するが高台のない扁平な底部である。内面は放射状の櫛目が入る。

8SK005褐色土出土遺物（[図16](#)、Pla3-3、[CD写真73～75](#)）

肥前系陶磁器

丸椀（2） 口径9.5cm、器高5.0cmを測る。外面に雪の輪文が入り、高台畳付に「K」状の印が入る。呉須は暗い紺色である。

蕎麦猪口（3） 口径7.1cm、器高5.7cmを測る。外面に千鳥と丸に寿文のコンニャク印判が5分割して施される。呉須は薄い青色である。

国産磁器

蓋（1） 口径7.4cm、器高1.9cmを測る。天井部は鉄釉のかかった円の連続文が入り、型作りの菊花文のつまみを釉つなぎで接着させている。

皿（4） 口径14.2cm、器高3.9cmを測る。胎土は砂粒が少なく精良で、硬質で磁質傾向な灰色である。光沢のある明緑灰色の釉である。内面見込みと高台端部に砂目が残る。

国産陶器

徳利（5） 胴部中央で欠損しており、横方向に鉄釉で「□□□（町カ）□」の四文字が確認できる。高台から畳付にかけて目跡が残る。

土製品

円盤状燭台（6） 径5.2cm、器高1.3cmを測る円形で、底部回転ヘラ切りである。中央に2mmほど

の穿孔があり、中に銅線が残る。

8SK005黒青色粘質土出土遺物 (図17・18、CD写真74～82)

土師器

小皿a (1・2) 1は口径6.8cm、器高1.1cmを測り、底部糸切りである。器壁が薄く、外面に煤が付着する。2は口径8.4cm、器高0.9cmを測る。底部糸切りで板状圧痕を施す。1同様、外面に煤が付着する。

龍泉窯系青磁

香炉 (47) 器高1.6cm、底径7.7cmの底部のみの破片である。内面見込みには灰茶色の皮膜の上に粉状の砂粒が付着する。高台は青緑色の不透明釉を拭き取り、砂粒が付着し赤褐色化している。

土師質土器

足鍋 (46) 足のみの破片である。胎土は白色砂粒を多く含むやや密で、明橙灰色を呈す。指押さえによって成形している。

瓦質土器

火鉢 (35) 胎土は黄灰色で砂粒や黒色粒、金雲母石を含みやや粗い。燻しは良好で、外面はミガキ後、体部中央部にローラーによる連続文様が入る。内面は横ハケと指圧による調整が施される。

肥前系磁器

丸椀 (3～9) 3は口径8.8cm、器高3.8cmを測る。高台部には釉ふき取り後に剥離材の白色砂粒が付着している。外面には雪の輪文が入り、呉須は暗い青色である。4は口径8.0cm、器高4.4cmを測る。外面に鶴と草文が入り、内面見込みに円形の松竹梅文が施される。呉須は暗い青色である。5は口径7.4cm、器高3.8cmを測る小型の丸椀である。外面に羽子板と羽文が入り、呉須は暗い青色である。6は口径8.8cm、器高5.5cmを測る。外面には松竹梅文が入り、呉須は暗い青色である。内面見込みにはハマが付着したままである。7は口径9.0cm、器高5.9cmを測る。外面に圏線が入り、呉須は暗い青色である。高台部に釉掻き取り後に剥離材の白色砂粒が付着している。8は口径11.3cm、器高6.2cmを測る。内面見込みに変わり寿文が入り、外面には草花文が入る。呉須は明るい青色である。9は口径8.8cm、器高5.8cmを測る。内面見込みと高台の一部に黒色の漆が付着している。外面には草花文が入り、呉須は暗い青色である。

広東椀 (11～15) 11は口径11.7cm、器高5.8cmを測る。内面見込みに梅文が入り、外面に草文が入る。呉須は暗い青色である。12は口径12.4cm、器高6.2cmを測る。外面に宝珠寿唐草文が入り、呉須は暗い青色である。13は口径9.6cm、器高5.2cmを測る。外面には3段の梵字文が入り、呉須は黒灰色である。14は口径10.5cm、器高5.9cmを測る。外面に圏線が巡り、呉須は明るい淡青灰色を呈す。15は口径10.2cm、器高5.7cmを測る。外面には圏線内に縦縞文が入り、呉須は暗い青色である。

皿 (24～26) 24は口径13.8cm、器高3.8cmを測る。高台見込みにコンニャク印判の五弁花、高台畳付に渦福くずれが入る。内面には扇子蛸唐草文、外面は4分割の連続唐草文を施し、呉須は暗い藍色である。25は口径10.6cm、器高2.2cmを測る。内面に浜磯文が描かれ、外面には連続唐草文が入る。呉須は暗い青色である。26は口径15.2cm、器高4.9cmを測る。体部上部から内面に内湾する口縁をもつ。高台畳付部分は凹面になっており、中心以外は釉ケズリ後ハマの痕が残る。内面見込みには蕪の様子が描かれ、口縁に連続文が入る。外面には太めの連続唐草文が入り、呉須は暗い青色である。

重ね鉢 (28) 口径12.6cm、器高5.1cmを測る。底部と体部の境目の釉が拭き取られ、剥離材の白色砂粒が付着している。外面に菱文が入り、呉須は明るい青色である。

仏飯器 (29) 口径7.1cm、器高6.7cmを測る。高台底部は釉拭き取りで、椀外面には石畳文が入る。呉須は暗い青色である。

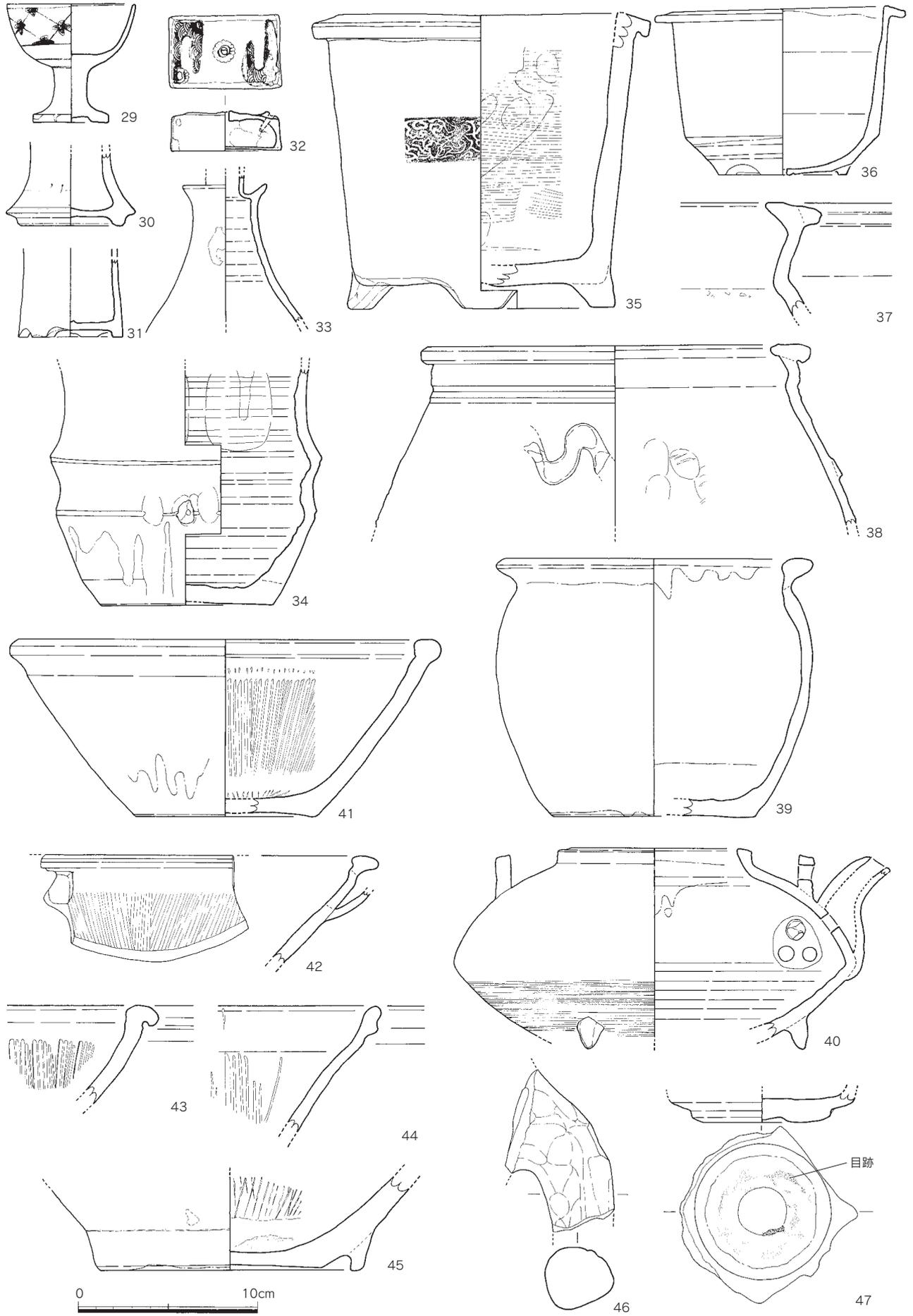


図18 8SK005出土遺物実測図3 (1/3)

華瓶 (30) 器高4.1cm、高台径5.9cmを測る破片である。外面に圈線が入り、呉須は暗い青色である。上記の仏飯器とセットで使用されることが多い。

水滴 (32) 縦4.1cm、横6.3cmの長方形である。注ぎ口と調整口には菊花文を、周辺には青海波文を型押しする。底部には接合に伴うナデと布目がある。一部に焼成のために釉を拭き取った面があり、立てて焼成されていることが分かった。

国産磁器

丸椀 (10) 口径9.0cm、器高5.5cmを測る。口縁内外面に濃緑黄色釉を流し掛ける。

鉢 (27) 口径15.8cm、器高8.0cmを測る。口縁端部は釉ふき取りで、内面見込みは搔き取られている。

国産陶器

椀 (22) 器高3.0cm、底径3.8cmを測る高台のみの破片である。内外面ともに白色化粧土をハケ塗りする。

丸椀 (16~19) 16~19はいずれも白黄色に焼成した京焼風陶器である。16は口径8.8cm、器高5.2cmを測る。外面に鉄釉で稲穂文が入る。17・18は外面に鉄釉で若松文を施す。19は外面に緑と赤の色絵で笹文を施す。

端反椀 (20・21) 磁質で硬質な焼成で、明灰色の胎土に貫入の多い灰色釉がかかる。

皿 (23) 体部下半に段がつく形態で、黒色粒子を含むやや粗い胎土である。貫入が多く光沢のある暗緑灰色釉がかかる。内面見込みと高台に帯状の砂目が付着する。

涼炉 (31) 高台径5.8cmを測る小片である。高台部分はヘラケズリによる割り込みが6箇所施される。

油差し (33) 頸部のみ的小片である。注ぎ口に油受けの段がつき黒褐色釉で塞がっているが、油を戻すための穿孔が確認できる。

徳利 (34) 器高13.3cm、底径9.5cmを測る破片である。胎土は明茶褐色で多くの砂粒を含み粗い。胴部が竹節状に凹み、1cmほどの粘土塊を貼り付けて枝瘤を表現している。

植木鉢 (36) 口縁部が屈曲し、底部はケズリ出しによる碁笥状を呈す。鉄釉が口縁部から体部下半にかかる。底部は焼成後に沈線の入る円を目印に穿孔する。

半胴甕 (37) 器高6.4cmを測る小片である。頸部がくの字に屈曲し、口縁はやや平坦なT字状である。口縁の釉を拭き取り、内面には叩き当て具痕がわずかに残る。

小甕 (38・39) 38は頸部がややくの字に屈曲し、口縁は平坦なTの字状である。外面体部上部に1cmほどの粘土ヒモが波状に付着する。内面には指押さえ痕が確認できる。明茶褐色の胎土に不透明な暗灰褐色釉がかかる。39は口径17.6cm、器高14.5cmを測る。底部は摩耗し、調整不明である。胎土は橙灰色を呈し、砂粒を多く含みやや粗い。口縁はくの字に外反し、白灰色の不透明釉がかかる。

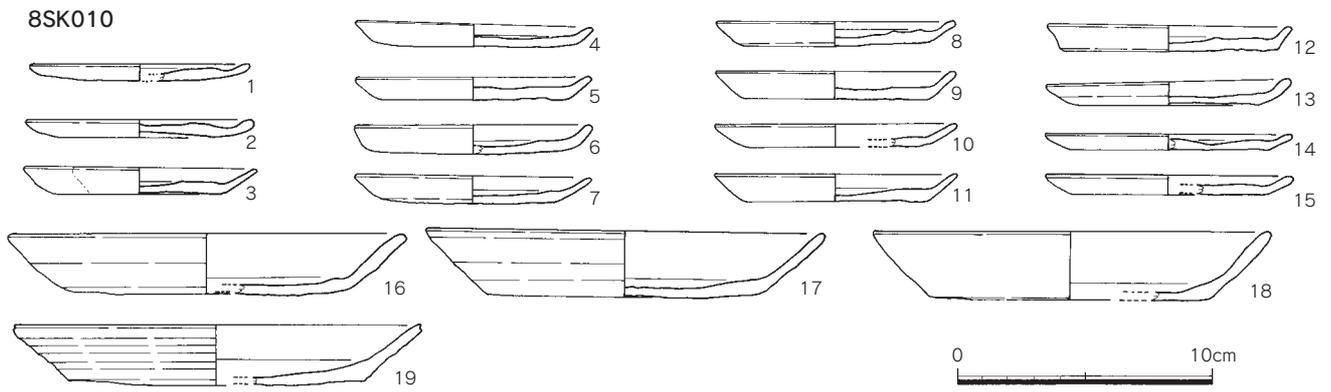
土瓶 (40) 全体形状がそろばん形を呈し、暗緑茶色の釉が入る。口縁端部は釉が拭き取られ、底部に五徳に引っかかる円錐状の粘土塊を貼り付けた3つ足がつく。

挿鉢 (41~45) 41~45は不透明な茶褐色がかかり、すべて破片資料である。41は口縁が丸く、底部ヘラケズリである。42は片口で、口縁は屈曲し外に張り出す形態である。43の口縁は玉縁状に短く外面に向かって屈曲する。44は胎土が白色、黒色砂粒を多く含む灰白色でやや粗い。焼成は軟質で、器壁が薄い。口縁形態は段を有する玉縁状を呈す。45は高台のみの小片である。高台が底部より体部側に接合し、釉は拭き取られる。

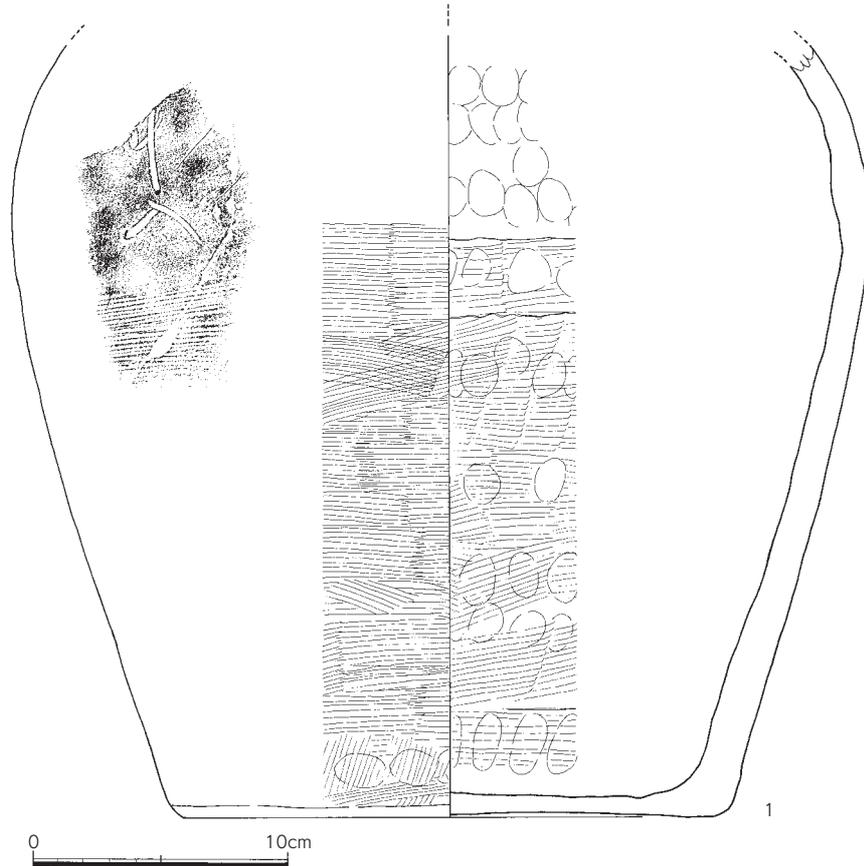
8SK010出土遺物 (図19、CD写真83)

土師器

小皿a (1~15) 口径8.6~9.6cm、器高0.6~1.1cmを測る。底部糸切りで、4以外は内底ナデと



8SK015



8SK020茶色土

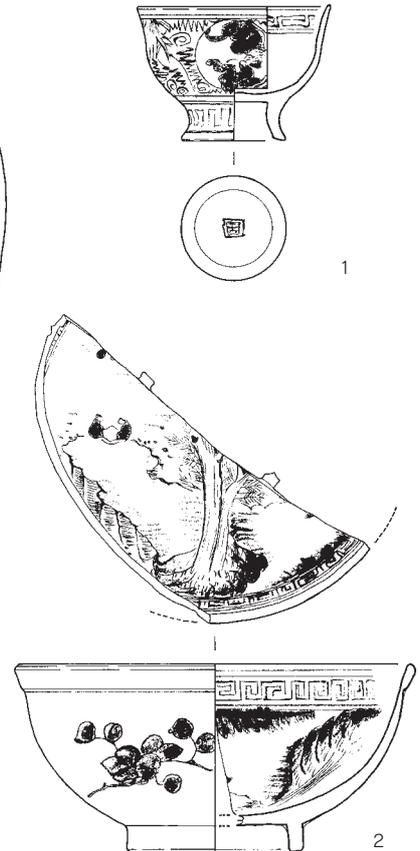


図19 8SK010・015・020出土遺物実測図 (1/3)

板状圧痕が確認できた。

坏a (16~19) 口径15.6~16.0cm、器高10.7~11.6cmまでを測る。すべて底部糸切りで、小皿aと同様のXV期に比定される。

8SK015出土遺物 (図19、CD写真84~86)

瓦質土器

甕 (1・5) 残存器高30.6cm、底部径22.1cmを測る。胎土は砂粒を多く含み粗い。黒色の燻しが内面と底にも及んでおり、伏せ焼きした可能性がある。胴部に「□入」のへら描きが入る。5は写真のみだが、口縁部分の破片が出土している。その他に、甕内から肥前系磁器 (CD写真85・86-2・3) と国産陶器土瓶 (CD写真85・86-4) の小片が出土している。

8SK020茶色土出土遺物 (図19、CD写真85・86)

肥前系陶磁器

小椀 (1) 高台底部の釉を拭き取る。外面には蔓草文が入る。

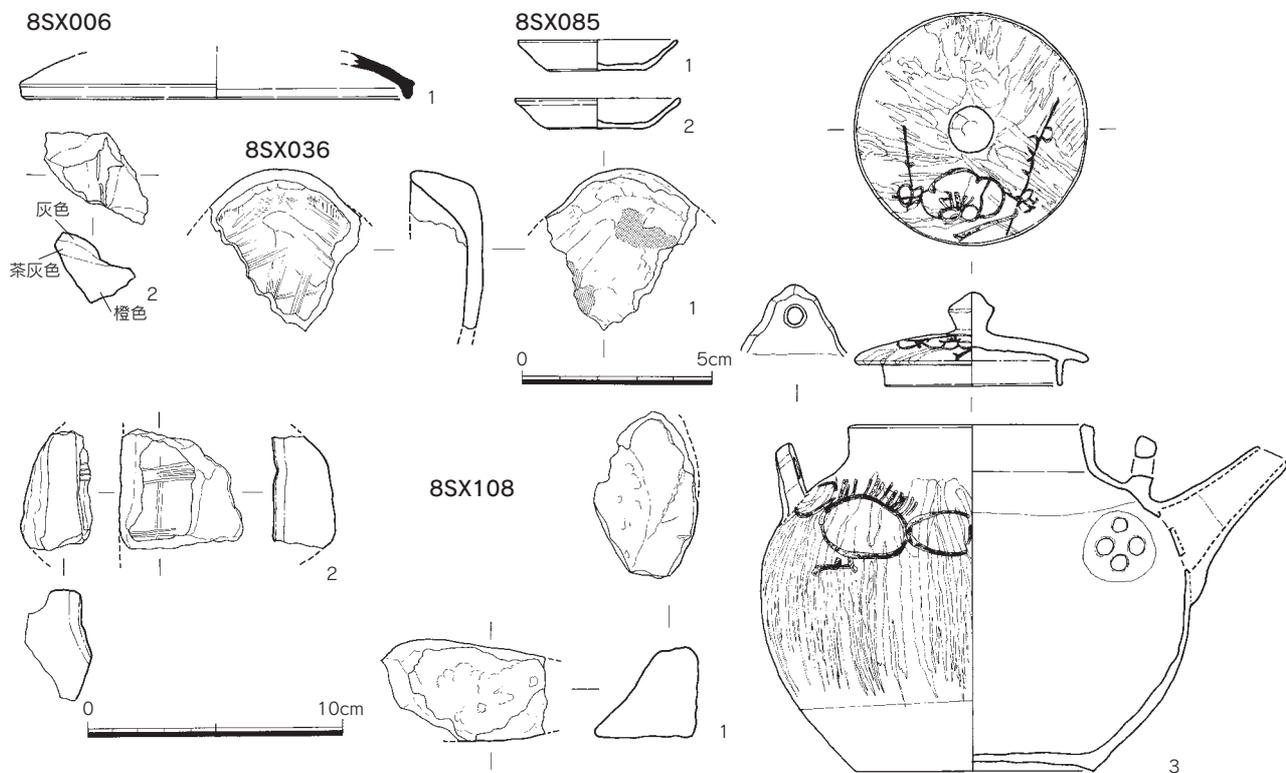


図20 8SX006・036・085・108出土遺物実測図 (1/2、1/3)

椀 (2) 口縁がやや丸く、外面には草花文が入り、内面は山水文である。呉須は明るい青色である。

その他の遺構出土遺物

8SX006出土遺物 (図20、CD写真67・68)

須恵器

蓋 3 (1) 口径15cmを測り、やや嘴状な口縁である。

土製品

鋳型 (2) 3.0×3.2cm、厚さ2.3cmの破片で、蒲鉾状の突帯が確認できる。鋳込み表面は灰色に還元している。胎土は細かな砂粒で、表面と残存する背面まで同じである。

8SX036出土遺物 (図20、CD写真67・68)

石製品

小型容器 (1) 滑石製で細かなケズリによる成形が施される。底部に煤が付着しており、石鍋の二次利用品と考えられる。

土製品

鋳型 (2) 縦4.9×横4.9cm、厚さ2.4cmを測る破片である。黒灰色土で出土している獣脚の鋳型と酷似していることから、同じ種類の鋳型と考えられる。鋳込み面が灰色に還元しているが、クロミは確認できなかった。二条の沈線が二カ所に見られる。

8SX085出土遺物 (図20、Pla3-4、CD写真69)

土師器

小皿a (1・2) 口径6.2~6.4cm、器高1.2cmを測り、底部糸切りである。器壁が薄く、内面見込みが少し盛り上がるのが特徴である。

国産陶器

土瓶 (3) 乳白色の釉を刷毛塗り後、薄い灰白色の釉を施している。蓋・身ともに鉄釉で梅模様を施文する。蓋のほうが釉の発色が不良であるが、セットの土瓶である。体部下半は露胎部分に使用によ

る煤が付着している。

8SX108出土遺物 (図20、CD写真67・68)

土製品

鋳型 (1) 3.9×6.3cm、厚さ3.5cmを測る小片である。小片であったため、口径は復元できなかったが、椀状の形態を呈す。鋳込み面は確認できないが、全体的に橙黄色に酸化している。胎土は籾殻を含むやや精良な胎土である。

第2 遺構面出土遺物

溝出土遺物

8SD063出土遺物 (図21、CD写真87)

土師器

坏a (1・2) 1は口径15.6cm、器高3.2cmを測る。底部糸切りで板状圧痕はない。全体的に器壁が厚く、胎土が橙色で金雲母を多く含む。2は口径16.4cm、器高2.8cmを測り、底部糸切りである。法量からXV期までの時期と推定される。

朱付着坏a (3) 器高2.5cmを測る破片である。底部の調整はヘラ切りと考えられる。内面に朱が付着している。

8SD086出土遺物 (図21、CD写真88・89)

土製品

鋳型 (1) 4.0×5.5cm、厚さ2.5cmを測る小片で、ドーナツ状の形状であったと考えられる。胎土に多くのスサや籾殻、土器片を含み粗い。一部にクロミを残す鋳込み面や灰色に還元した部分が確認できる。中子の可能性もある。

8SD087出土遺物 (図21、CD写真88・89)

石製品

権 (1) 緑色片岩製の厚さ0.9cmの扁平な形状の破片である。

8SD115出土遺物 (図21、CD写真87～89)

土師器

小皿b (1・2) 1は口径8.8cm、器高1.4cmを測る。口縁部が大きく外反し、底部糸切りである。内面見込みに強いヨコナデが残る。2は口径9.2cm、器高2.0cmを測り、底部糸切りである。

瓦質土器

火鉢A1 (5) 底径27.2cmを測る破片である。胎土はやや粗めの灰色で、内外面ともに黒色に燻されている。外面タテハケ後一条の突帯が付き、内面はヨコハケ後に指によるナデアゲが確認できた。

龍泉窯系青磁

鉢Ⅲ類 (3) 高台のみの小片である。胎土は黒色粒子を含む精良な灰白色で、厚めの緑色釉がかかる。高台畳付部分の釉が掻き取られ、茶色を呈す。

肥前系磁器

小椀 (4) 高台のみの小片である。呉須が明るい青色である。

土製品

土鈴 (6) 縦3.2×横3.2cmを測る。糸通し部分は指で調整され、鈴胴部に一条の沈線が入る。全体的にムラのある瓦質な焼成である。

鋳型 (7) 縦6.1×横7.0cm、厚さ2.8cmを測る破片である。鋳込み面は残存していないが、一部灰色に還元している部分がある。細かな砂粒と気泡を多く含むやや粗い胎土である。全体に指押さえて

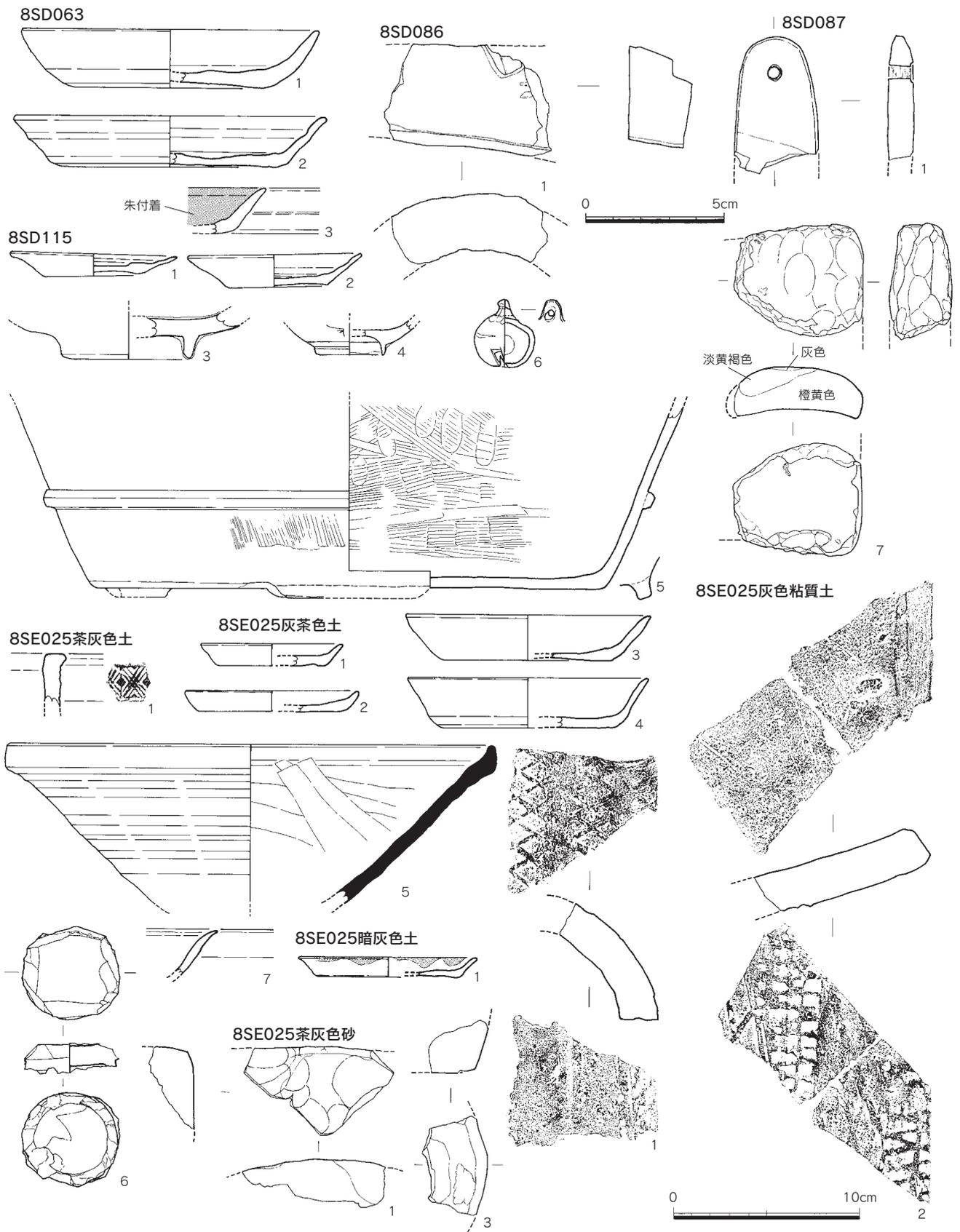


图21 8SD063·086·087·115、8SE025出土遺物実測図 (1/2、1/3)

成形した痕跡が残る。

井戸出土遺物

8SE025茶灰色土出土遺物 (図21、CD写真88・89)

土師質土器

火鉢E-Ⅲ類 (1) 器高2.9cmの口縁部のみの破片である。縦長の細い菱形状のスタンプ文が押印されている。

8SE025灰茶色土出土遺物 (図21、CD写真88・89)

土師器

小皿a (1・2) 1は口径7.4cm、器高1.3cmを測る。底部切り離しは糸切りで口径が小型化している。2は口径9.2cm、器高1.2cmを測り、底部糸切りである。

坏a (3・4) 3は口径12.9cm、器高2.7cm、4は口径13.0cm、器高2.5cmを測り、金雲母を多く含む。時期は器高が高く、口径が小型化している。XⅧ期以降と考えられる。

白磁

皿Ⅸ (7) 器高2.6cmの口縁部のみの小片である。口ハゲの口縁端部に油煙の煤が認められ、灯明皿として使用されていたと考えられる。

須恵質土器

鉢 (5) 東播系鉢で口縁端部形態がやや玉縁状を呈す。底部まで残存していないため、形態は不明だが、森田編年Ⅱ-2期に推定される。

土製品

円形状土器 (6) 5.1×4.3cm、厚さ1.3cmを測る。龍泉窯系青磁碗を高台周辺を打ち欠き、円形に加工している。

8SE025暗灰色土出土遺物 (図21、CD写真88・89)

土師器

小皿a (1) 口径9.4cm、器高1.1cmを測り、底部糸切りである。口縁端部周辺に油煙の煤が確認できる。

8SE025茶灰色砂出土遺物 (図21、CD写真88・89)

土製品

鋳型 (1) 1は縦4.6×横8.1cmの破片である。全体的に酸化気味で二次的に被熱した箇所が認められる。胎土は細かな砂粒である。

8SE025灰色粘質土出土遺物 (図21、CD写真88・89)

瓦

丸瓦 (1) 7.8×7.6cm、厚さ2.0cmの小片で、焼成は須恵質である。端部は分割切り離しのままで、横長斜格子目である。

平瓦 (2) 15.5×12.4cm、厚さ2.3cmの小片である。焼成は須恵質で、端部はケズリにより面取りが施されている。布目後のケズリ調整から一枚作りと考えられる。叩き目は二種類の異なる格子目が確認できた。版の重なりから、縦長斜格子目の後に縦線の入る横長斜格子目が押されていることが判った。叩き目の同時性が分かる面白い資料である。

土製品

鋳型 (3) 5.3×3.2cm、厚さ2.9cmの破片である。鋳込み面は確認できないが、欠損部分に二次的に煤が付着している。胎土は細かな砂粒で、全体的に酸化気味である。

8SE050黒色土出土遺物 (図22、Pla3-5・4-1、CD写真90～92・95・96)

土師器

小皿a (1・2) 1は口径9.1cm、器高1.0cmを測り、底部糸切りである。淡黄白色の精良な胎土である。2は口径9.6cm、器高1.0cmを測り、底部糸切りである。

瓦

丸瓦 (4～7) 4は胎土に金雲母石を多く含むやや粗い、やや硬質で須恵質の焼成である。側縁形状は条痕の残る面取りを行う。凸面は横長格子目(宝満山分類I-C b)に縦長二重界線が見られるが、文字部分がナデ消されている。凹面はタタラ挽きの残る粗い布目である。5は7.3×3.5cm、厚さ2.6cmを測る破片で、やや軟質で瓦質の焼成である。側縁形状は条痕の残る面取りで、端部は凸面にさらにナデを施す。凸面は縦長格子目(I-B b)で、凹面は粗い布目がある。6は10.7×7.5cm、器高2.8cmで玉縁の一部が残存する破片で、軟質で土師質の焼成である。側面形状は側縁に条痕の残る面取りを行う。凹面は布目と一部縄ヒモ痕が残る。7は8.4×8.7cm、厚さ2.0cmを測る。胎土は精良で、やや軟質で瓦質の焼成である。側面形状は丁寧な面取りが施される。凸面には縦長格子目(I-B b)と「参重□□(御塔カ)」の文字の入った叩き目である。凹面は粘土継ぎ足し痕が残り、やや粗めの布目が確認できる。

平瓦 (8～11) 8は13.7×10.0cm、厚さ2.1cmを測る破片である。やや硬質の須恵質である。凸面は横長斜格子目(I-B b)で凹面は細かな布目である。9は硬質で須恵質の焼成である。側縁、端部形状は条痕の残る粗い面取りを施す。凸面は縦長格子目(I-B b)で、凹面には一枚作りのケズリ痕が残る。10は14.3×13.7cm、2.0cmを測る破片で、硬質で須恵質の焼成である。凸面に横長格子目(I-C b)の叩きで、凹面にはケズリ痕とわずかに細かな布目が残る。11は20.0×16.5cm、2.3cmを測る破片である。砂粒を多く含む粗い胎土で、硬質で須恵質の焼成である。側面形状は条痕を残す粗い面取りを施す。凸面は縦長格子目(I-B b)と縦長三重界線内に「□□□(安楽寺)」の文字の入る叩きで、凹面は丁寧にナデ消される。

金属製品

椀形滓 (3) 6.6×6.1cm、厚み2.2cmを測る。底に白色砂粒が多く付着し、表面は黒色のメタル部分が確認できる。

8SE050灰色土出土遺物 (図23、Pla3-5・4-1、CD写真90～92・95・96)

土師器

小皿a (1～3) 1は口径9.2cm、器高1.1cmを測り、底部へら切りである。胎土が精良で、淡黄白色を呈す。2は口径9.4cm、器高1.9cmを測り、底部へら切りである。やや深手の形状で、口縁端部に黒灰色の油煙と芯の跡が残り灯明皿として使用している。3は口径9.8cm、器高0.9cmを測り、底部へら切りである。平坦な形態と口径の大きさから小皿a2との中間形態を示す。胎土は精良で、淡黄白色を呈す。

坏a (4) 口径15.0cm、器高2.3cmを測り、底部糸切りである。胎土は精良で淡黄白色を呈す。

青白磁

合子蓋 (5) 口径7.1cm、器高1.9cmを測る。淡灰白色の精良な胎土で、光沢のある淡緑白色釉がかかる。甲は平坦で草花文で、3条の弧で側面の菊弁との境を区別している。

瓦

平瓦 (6・7) 6は8.5×9.5cm、厚さ1.7cmを測る破片である。大粒の白色砂粒や茶色砂粒を多く含むやや粗い胎土で、やや軟質の須恵質な焼成である。側面の形状は分割後、端部と凹面側縁に条痕の

8SE050黑色土

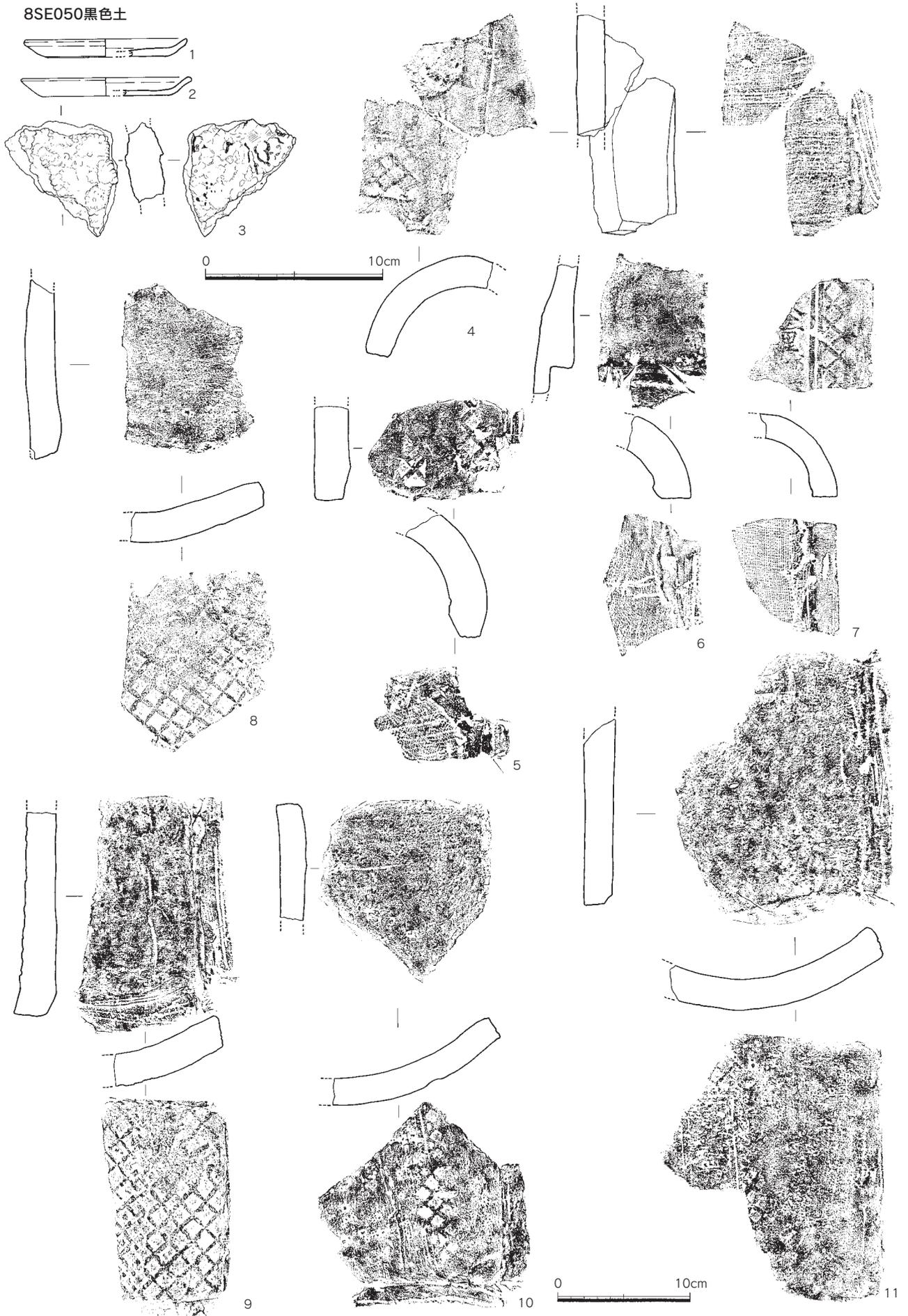
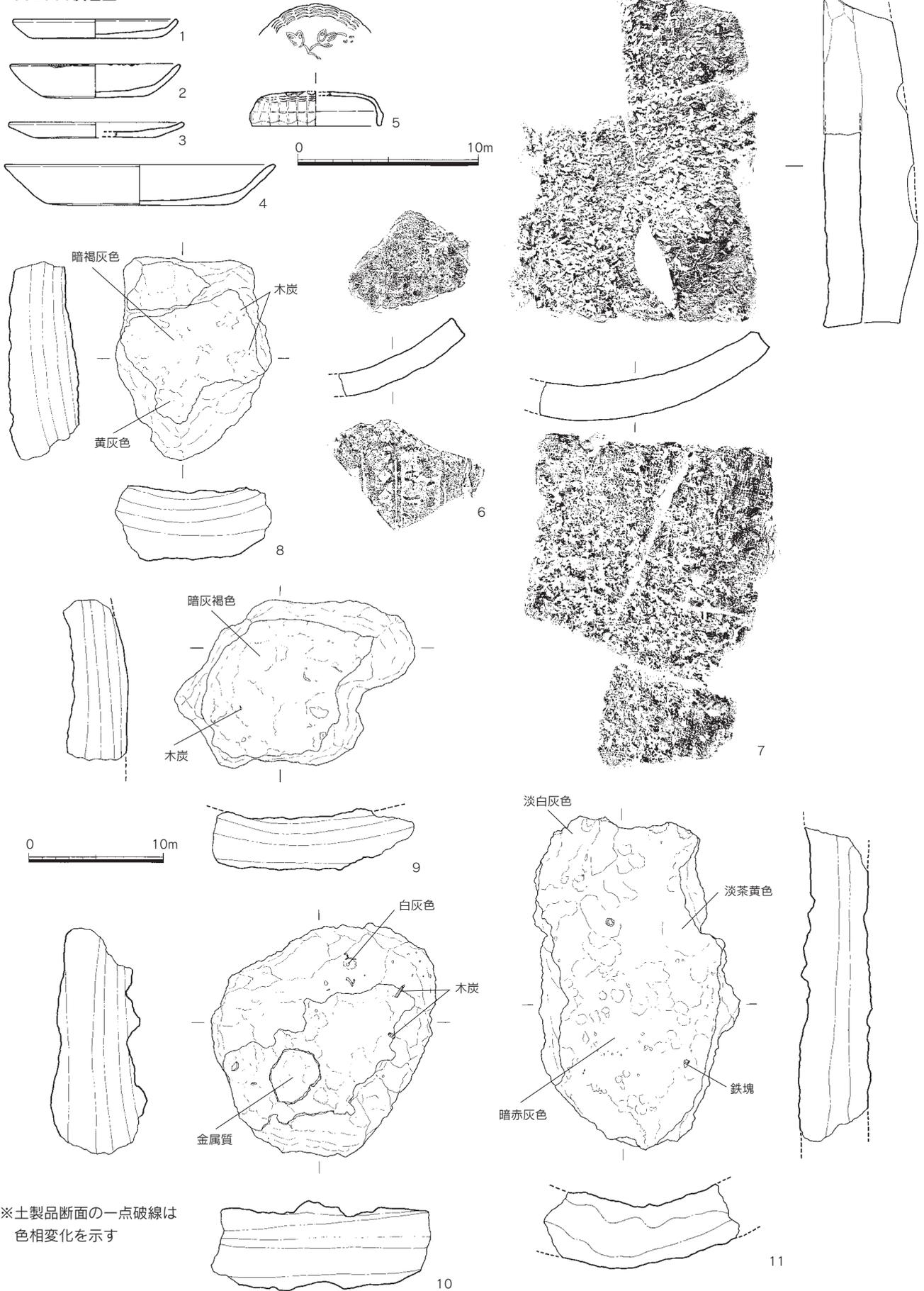


图22 8SE050出土遺物実測図1 (1/3、1/4)

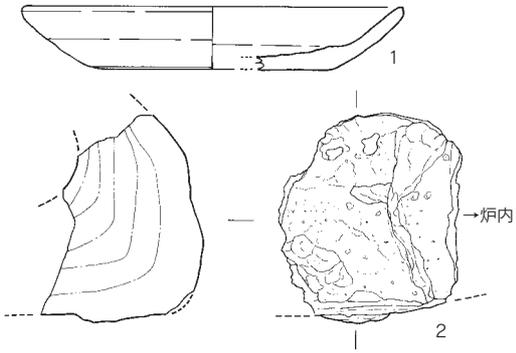
8SE050灰色土



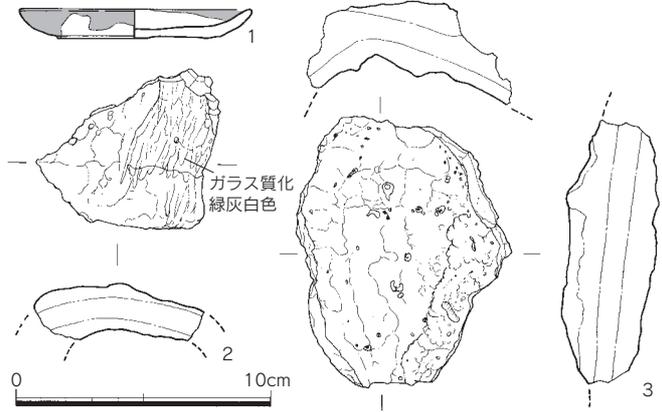
※土製品断面の一点破線は色相変化を示す

図23 8SE050出土遺物実測図2 (1/3、1/4)

8SE050暗灰色粘質土



8SE050暗灰色土



8SE050茶灰色砂質土

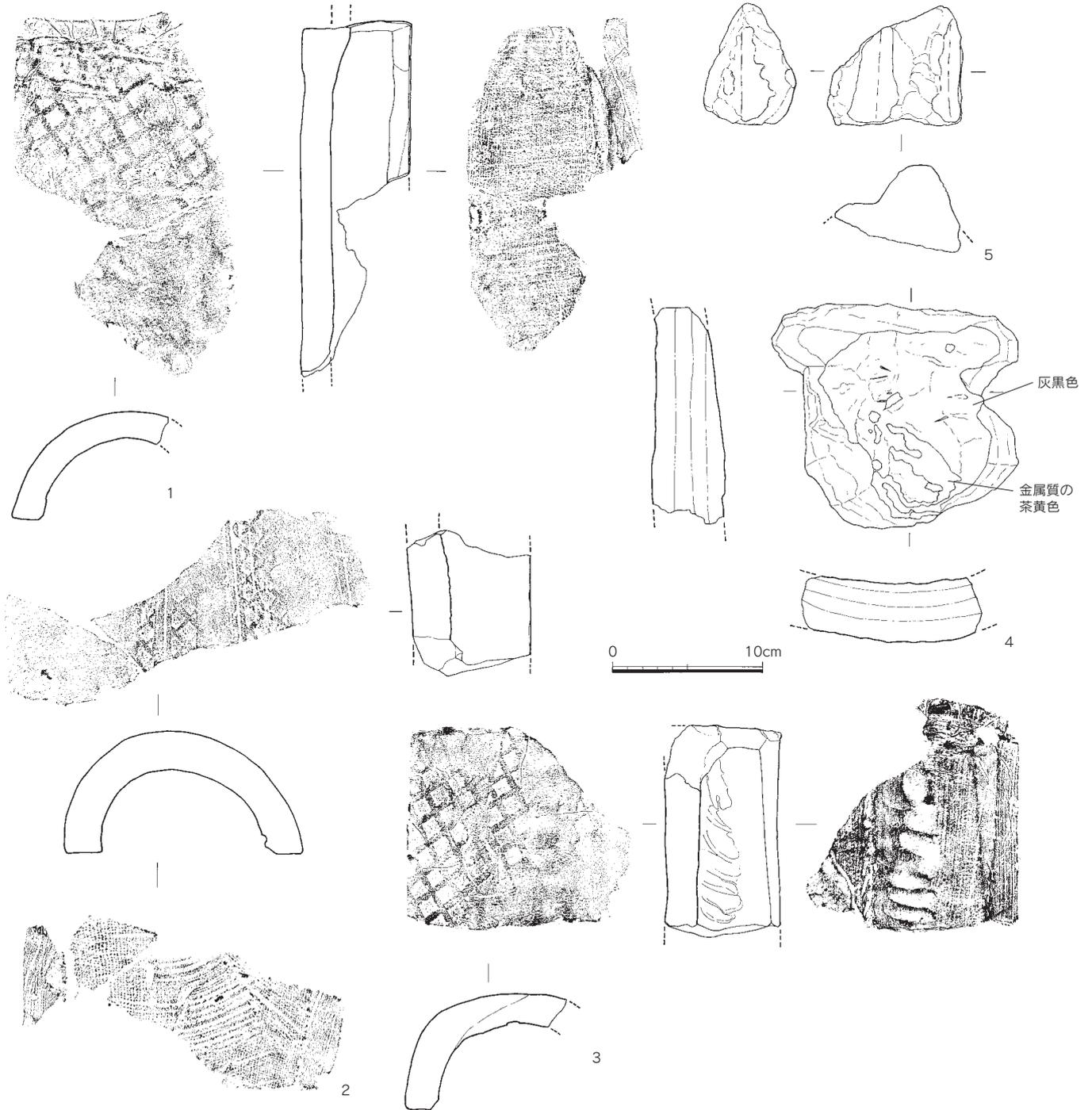


図24 8SE050出土遺物実測図3 (1/3、1/4)

残る面取りを行う。凸面は横長斜格子目（I-Cb）に山型形状の縦長二重界線内に「・・二年□（歳次壬子）」の文字が入る叩きが施される。凹面の布目は粗めである。7は25.0×18.0cm、厚さ2.7cmを測る破片で、やや軟質な須恵質の焼成である。側面の形状は端部と凹面側縁に粗い面取りを行う。端部や側縁を含む全面に粉殻が付着している。

土製品

炉壁（8～11） 8は縦15.2×横14.2cm、厚さ9.1cmの破片である。胎土には多くのスサや粉殻を含み粗い。内面は被熱して暗褐灰色に変色しているが、炉壁が高温で溶解している状況は見られない。9は12.0×14.9cm、厚さ3.9cmを測る。胎土には多くのスサや粉殻、炭、土器片などを粗い。内面には炉壁が溶解した痕跡はなく、金属の付着もみられないことから、炉上部の可能性はある。10は16.6×17.3cm、厚み6.3を測る。胎土には多くのスサや粉殻、炭を含み粗い。内面には金属質が多く付着しているが、炉壁が高温で溶解している状況は確認できない。このことから炉の底部に近い部分の炉壁と考えられる。11は縦23.5×横14.7cm、厚さ5.0cmを測る大型の破片である。胎土はスサや粉殻を多く含む粗い。炉内面側が高温で被熱しており、炉壁が暗赤茶色のガラス質に溶解している。炉壁の形状から縦方向の破片で、炉自体が大型であったことが想定される。

8SE050暗灰色粘質土出土遺物（[図24](#)、Pla3-5・4-1、[CD写真90～92](#)）

土師器

坏a（1） 口径15.0cm、器高2.5cmを測り、底部へラ切りである。胎土は精良で、淡黄白色を呈す。

土製品

轆羽口（2） 9.0×7.3cm、厚さ6.3cmを測る。外面は器壁が高温で溶解し、ガラス質化した暗紫黒色と黒白色である。内径部分と比較して、外面は角のある形状をしており、炉と轆との接合部分と考えられる。

8SE050暗灰色土出土遺物（[図24](#)、Pla3-5・4-1、[CD写真90～92](#)）

土師器

小皿a（1） 口径9.0cm、器高1.2cmを測り、底部糸切りである。内外面ともに煤が付着した状況が確認できる。

土製品

炉壁（3・4） 3は10.8×8.2cm、厚さ3.5cmの破片である。胎土はスサや粉殻を多く含む粗い。内面は炉壁が高温で溶解し、気泡や白色砂粒が噴出した赤紫色のガラス質になる。外面はスサや粉殻が確認でき、やや酸化気味の淡灰褐色である。4は15.0×16.2cm、厚さ4.6cmを測る大型の破片である。胎土はスサや粉殻、炭などを多く含む粗い。内面は3のように高温で炉壁が溶解した状況はなく、やや酸化気味の灰黒色である。炉壁の状況から4は炉の上面近くと考えられる。

轆羽口（2） 6.3×7.1cm、厚さ1.6cmを測る破片である。胎土は大粒の白色砂粒を多く含むやや粗い。内面は凸凹が多く、胎土が高温で溶解し、赤茶色や淡白灰色のガラス質が流れたような状況が見られる。外面は暗赤灰色に酸化している。

鋳型（5） 6.0×6.2cm、厚さ4.4cmを測る破片である。凸状の形態を呈す。胎土はやや気泡の入る細かな砂粒で淡黄白色に酸化している。鋳込み面は確認できない。

8SE050茶灰色砂質土出土遺物（[図24・25・26](#)、Pla3-6、[CD写真90～94・97・98](#)）

瓦

丸瓦（1～3） 1は24.1×10.3cm、厚さ1.9cmを測る破片である。やや軟質な須恵質の焼成である。側面の形状は側縁に条痕の残る面取りを行う。凸面には縦長格子目（宝満山分類I-Bb）を一部ナテ消す。

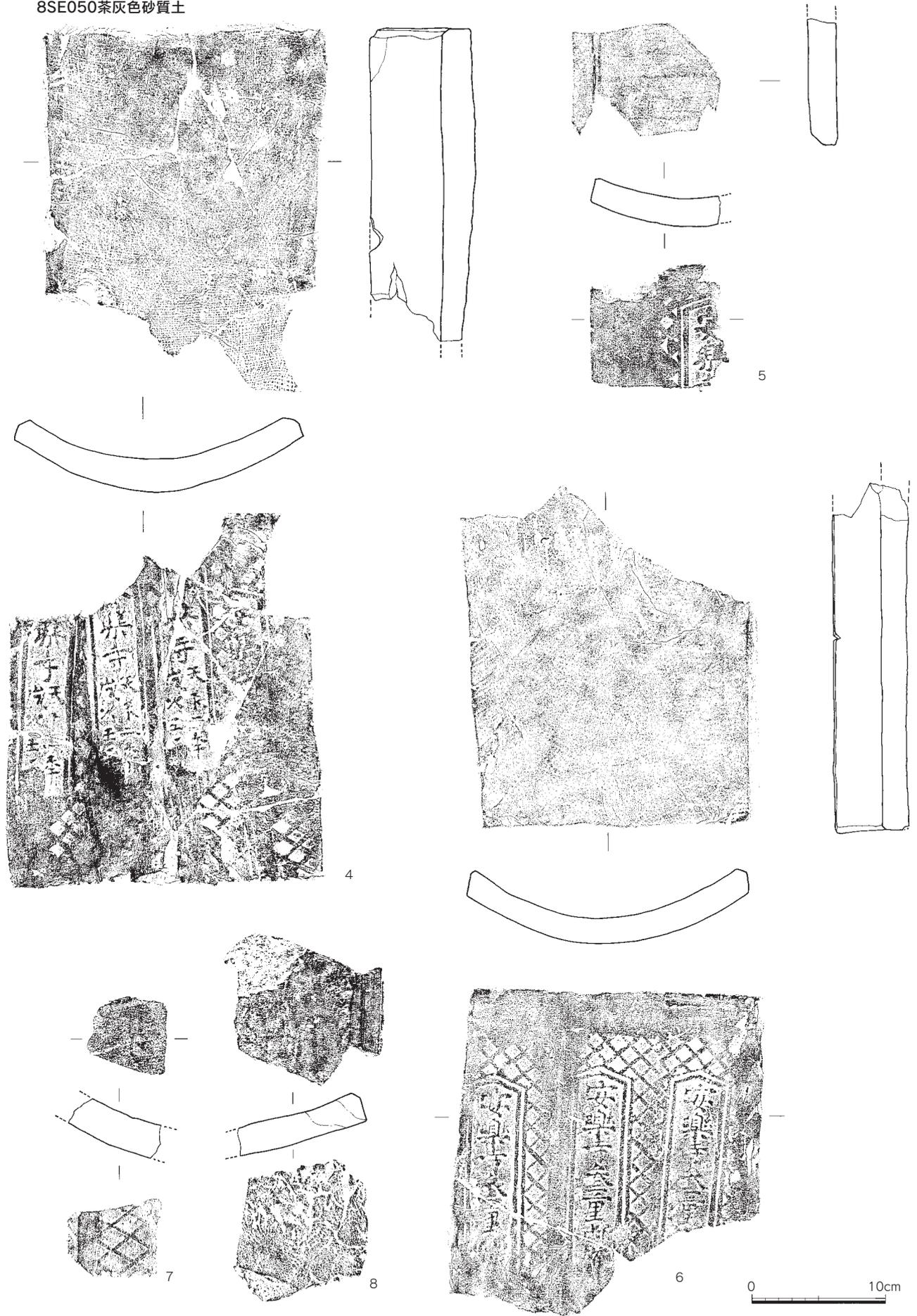


图25 8SE050出土遺物実測图4 (1/4)

8SE050茶灰色砂質土

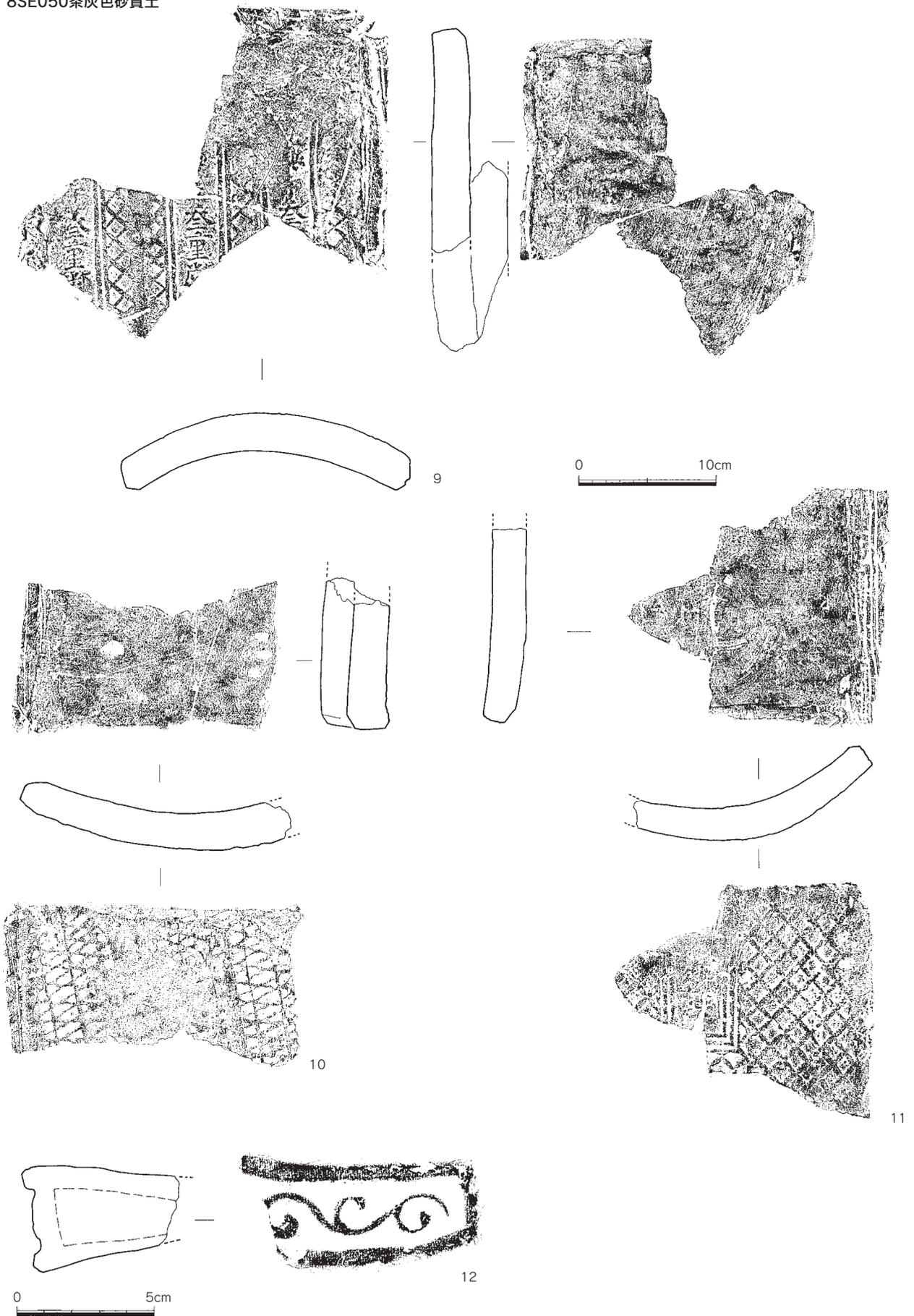


图26 8SE050出土遺物実測图5 (1/2、1/4)

凹面はタタラ挽き痕が残り、やや粗めの布目が確認できる。2は9.8×15.9cm、厚み2.5cmを測る破片である。やや硬質の須恵質な焼成である。側面形状は側縁に条痕の残る面取りを行う。凸面には横長斜格子目（I-Cb）に文字の入る縦長二重界線は確認できるが、文字の部分がすべてナデ消されている。凹面はタタラ挽き痕が残り、やや粗めの布目が確認できる。3は13.5×10.6cm、厚み2.4cmを測る破片である。やや軟質の瓦質な焼成である。側面の形状は分割後、端部と凹面側縁に条痕の残る面取りを行う。凸面は縦長斜格子目（I-Bb）で一部ナデ消し、凹面は粘土貼り付けに伴う接合面の指ナデが確認できる。

平瓦（4～11） 4は27.7×21.6cm、厚さ2.5cmを測る。大粒の白色砂粒や茶色砂粒を多く含みやや粗い胎土で、やや軟質の須恵質な焼成である。側面の形状は分割後、端部と凹面側縁に条痕の残る面取りを行う。凸面は横長斜格子目（I-Cb）に山型形状の縦長二重界線内に「安楽寺天承二年歳次壬子」の文字が入る叩きが施される。叩き板の大きさは確定できなかった。凹面の布目は粗めである。5は縦9.5×横9.6cm、厚さ2.1cmを測る破片である。「安楽□（寺）」の文字が入る文字が入る叩きが施される。凹面には布目が丁寧にナデ消されている。6は24.6×21.1cm、厚さ1.9cmを測る破片である。大粒の白色砂粒を若干含む密な胎土である。やや軟質の須恵質な焼成だが、一部凸面が燻し状に黒色化している。側面の形状は分割後、端部と凹面側縁を丁寧に面取りする。凸面には横長斜格子目（I-Cb）に山型の縦長二重界線内に「安楽寺参重□□（御塔カ）」の文字が入る叩きが施される。叩き板の大きさは版の重なりから判断して幅約7cmと推定される。凹面にはケズリによる丁寧な調整が施されている。7は6.3×7.1cm、厚さ2.7cmの小片である。白色砂粒を若干含む密で、硬質な須恵質に焼成される。凸面には大きな横長斜格子目（I-Cc）の叩きが入り、一部ナデ消されている。8は11.2×10.0cm、厚さ2.3cmを測る。白色砂粒と雲母石を多く含む粗い胎土で、硬質の須恵質に焼成される。側面形状は分割後、丁寧な面取りが施される。二度にわたる粘土継ぎ足しが確認でき、凸凹面ともナデ調整が行われる。凹面には粉殻が付着した痕跡がある。9は28.1×15.8cm、厚さ2.5cmを測る破片である。白色砂粒を多く含みやや密な胎土で、硬質で須恵質な焼成である。側面形状は分割後、凸凹両端部と側縁に丁寧な面取りを行う。凸面は縦長二重界線内に「安楽寺・・・」の文字が入る叩きが施され、凹面はナデ調整である。10は11.1×19.6cm、厚さ2.6cmの破片である。大粒の白色砂粒を含みやや密な胎土で、硬質の須恵質に焼成される。凸面には横長格子目に直線の入る格子目（I-D）が入り、凹面は布目後ケズリ調整である。11は17.4×17.4cm、厚み2.5cmの破片である。硬質で須恵質な焼成である。側面形状は端部と凹面側縁に条痕の残る面取りが施される。凸面には縦長格子目（I-Bb）と三重界線内に「□□□（安楽寺カ）」の叩きが入り、凹面は布目が丁寧にナデ消されている。

軒平瓦（12） 縦5.6×横9.6cmの小片である。細かな砂粒を多く含む密な胎土で、やや軟質で瓦質な焼成である。平瓦を瓦当部分に差し込んでおり、凸凹面ともにナデによる調整が行われる。瓦当の幅が短い偏行唐草文で、京都市尊勝寺跡や平安京内出土資料に類似する（『器瓦録想』2004伏見城研究会）。

道路状遺構出土遺物

8SF125淡灰色砂出土遺物（[図27](#)、[CD写真99・100](#)）

土師器

坏a（1） 口縁のみの小片で、器高2.8cmを測る。内面口縁部分に油煙の煤が付着する。

同安窯系青磁

椀Ⅲ類（2） 口縁は直で、Ⅲ類のように外反していないが、内面花文のみで見込みの釉を掻き取る。

8SF125黄色砂出土遺物（[図27](#)、[CD写真99・100](#)）

土師器

小皿a（1） 口径10.4cm、器高1.3cmを測り、底部糸切りである。

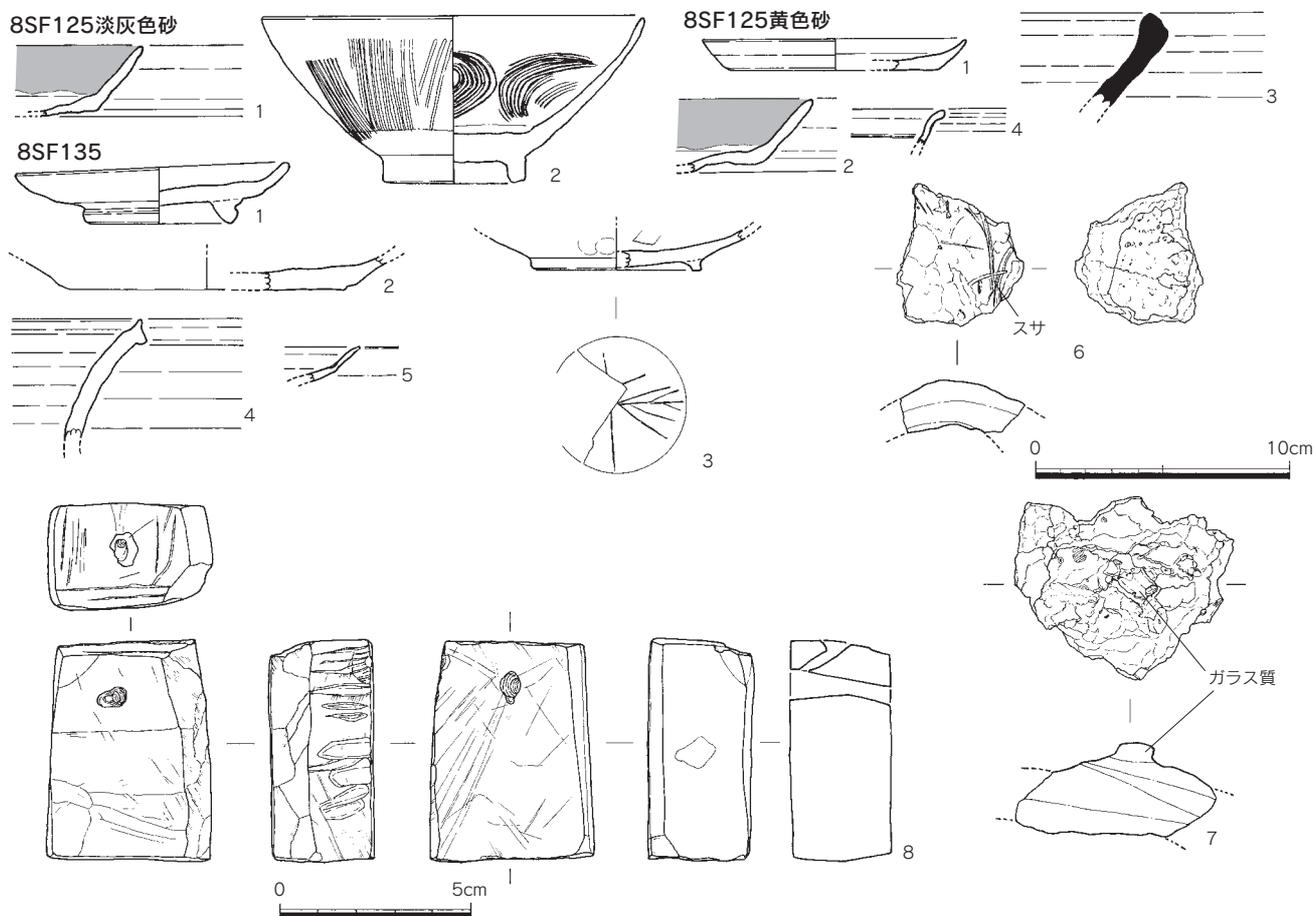


図27 8SF125・135出土遺物実測図 (1/2、1/3)

坏a (2) 器高2.9cmを測る。口縁部から内面見込みに油煙の煤が付着する。

須恵質土器

鉢 (3) 東播系鉢で器高3.8cmの破片である。口縁端部外面に重ね焼きの色相差がある。口縁端部を玉縁状に仕上げ、体部が外反する特徴から、森田編年II-2期相当と考えられる。

同安窯系青磁

椀II類 (4) 器高1.5cmで口縁端部のみの小片である。

8SF135出土遺物 (図27、CD写真101・102)

土師器

小皿c (1) 口径10.5cm、器高2.3cmを測る。底部はヘラ切り後板状圧痕が残り、外踏ん張りの高台を呈す。

坏a (2) 底径10.8cmを測り、底部のみの小片である。底部糸切りで、内面見込みがかなり平坦化している。

瓦器

椀c (3) 高台のみの小片である。畳付部分に葉脈状のヘラ記号が入る。

灰釉陶器

壺 (4) 口縁～頸部にかけての小片である。体部は外面に開き、上下に突出した口縁端部をもつ。胎土は精良な灰白色で、やや厚めの釉がかかる。内面は淡緑灰色、外面は黒斑の混じる黒灰色である。

同安窯系青磁

皿I-1 (5) 口縁のみの小片である。口縁端部は薄く反り気味で、体部外面下半以下には施釉はない。

石製品

権 (8) 滑石製で5.7×4.2cm、厚み2.7cmを測り、重量158.1gを量る。一部に煤が付着していることから、石鍋の2次加工品と考えられる。穿孔が二箇所に及ぶ。

土製品

炉壁 (7) 縦7.2×横8.7cm、厚さ3.6cmを測る破片である。胎土は多くのスサや籾殻を含み粗い。内面は高温で炉壁が溶解し、ガラス質化や金属質が付着した部分が確認できる。

鞆羽口 (6) 5.6×5.0cm、厚さ1.8cmを測る破片である。胎土はスサや籾殻を含みやや粗い。外面は高温で溶解し、黒灰色のガラス質に変化しており、炉内部に挿入されていた部分と推定される。

土坑出土遺物

8SK045茶色土出土遺物 (図28、Pla4-2、CD写真103・107・108)

土師器

小皿a (1～4) 1は口径8.2cm、器高1.1cmを測り、口径が小型である。底部糸切りで金雲母を多く含む。2～4は口径9.5～9.6cm、器高は1.1～1.2cmを測り、底部糸切りである。

坏a (5～8) 口径は16.0～16.6cm、器高2.7～3.0cmを測る。底部は糸切りで、時期は口径が大型であることからXV期までと推定される。

石製品

石鍋c (16) 滑石製の鏝のみの小片である。鏝の大きさから小型の石鍋と考えられる。

土製品

炉壁 (12・13) 12は縦10.5×横6.8cm、厚さ5.0cmを測る。胎土は多くのスサや炭を含み粗い。内面は高温で炉壁が溶解し、暗灰色のガラス質化している。外面には指によるナデ上げ調整が残り、やや還元気味の淡灰白色を呈す。13は縦10.6×横6.9cm、厚さ4.8cmを測る。胎土はスサや籾殻を多く含む、炉壁は高温で溶解した紫黒色のガラス質化している。

鞆羽口 (9～11) 9は縦9.6×横8.9cm、厚さ3.4cmを測る破片である。外面は器壁が高温で溶解し、黒緑色のガラス質が流れた状況が観察できる。内面は灰色に還元している。先端部近くの羽口と考えられる。11は10.6×9.0cm、厚さ3.6cmを測る。内径6.0cmほどに復元できる。外面は高温で溶解した黒灰色のガラス質が付着している。外面の角のある形状から炉と鞆羽口との接合部分と考えられる。

鋳型 (14・15) 14は縦9.0×横11.8cm、厚さ9.5cmを測る。胎土は砂粒をほとんど含まない精良な粘土で、断面から粘土塊を重ねている状況が確認できた。これまでの鋳型とは胎土がまったく違い、8SK062出土鋳型に類似している。鋳込み面は見られず、被熱し灰色に変色している部分があることから鋳型としている。

8SK045黒色土出土遺物 (図28、Pla4-2、CD写真104・106～108)

土師器

小皿a (1・2) 口径9.6～10.0cm、器高1.0～1.2cmを測り、底部糸切りである。

坏a (3) 口径16.8cm、器高2.1cmを測る。上記小皿aの法量も考慮して、XV期までの時期と考えられる。

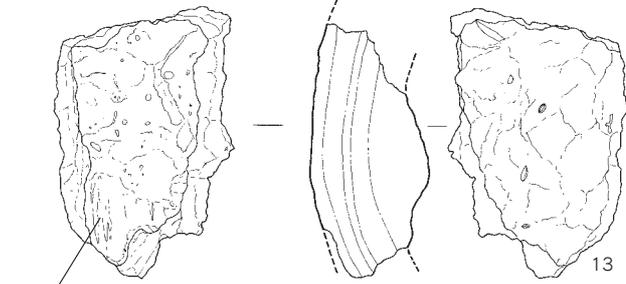
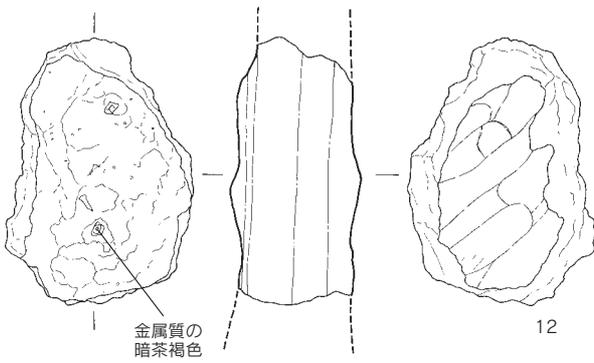
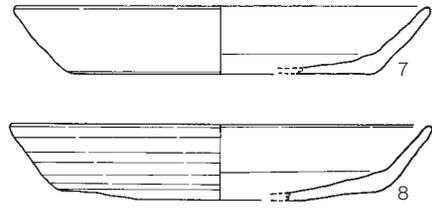
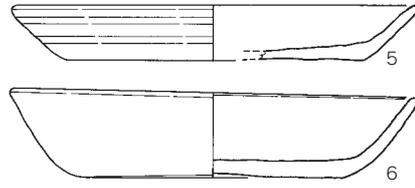
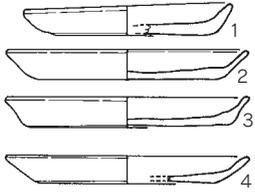
瓦器

椀c (4) 口径17.4cm、器高5.4cm、高台径6.3cmを測る。内面はミガキbで外面の押し出し指頭痕に対応する。高台は小さな三角形を呈する。

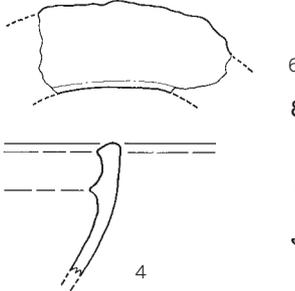
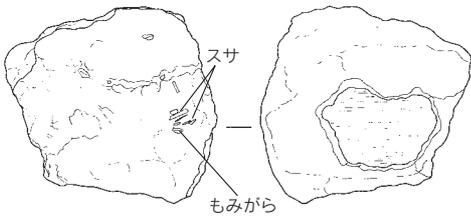
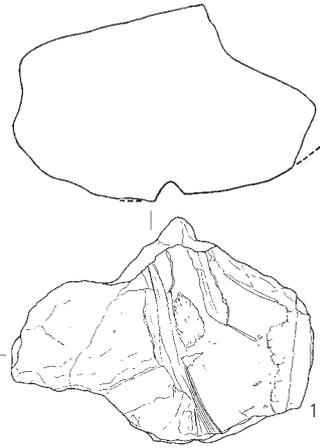
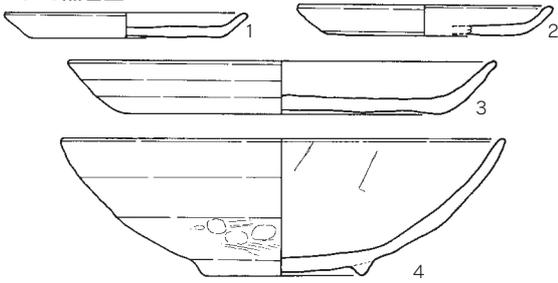
土製品

鞆羽口 (5) 縦7.3×横10.2cm、厚さ5.0cmを測る破片である。外面は細かな気泡を多く含む黒灰色と表面がなめらかな淡黒緑色や紫黒色のガラス質化している。内面は酸化した淡橙褐色である。

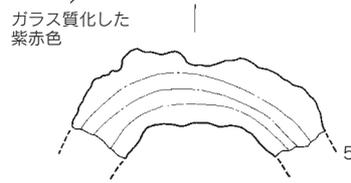
8SK045茶色土



8SK045黒色土



8SK045暗茶色土



8SK045暗灰色土

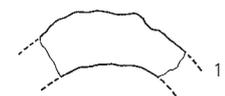
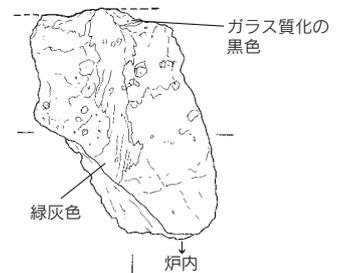


図28 8SK045出土遺物実測図 (1/2、1/3)

鑄型（6） 縦7.6×横8.2cm、厚さ3.1cmを測る破片である。鍋型の一部と想定され、鑄込み部分が残存している。真土は細かな淡黄白色で鑄込み面には挽型痕の条線とクロミが残る。粗真土はスサヤ
籾殻、炭を多く含み粗く、酸化した淡橙褐色を呈す。

8SK045暗茶色土出土遺物（[図28](#)、Pla4-2、[CD写真107・108](#)）

土師器

小皿a（1～3） 口径9.4～10.3cm、器高1.1～1.2cmを測り、底部糸切りである。

中国陶器

鉢 I-2a無釉（4） 器高5.1cmの破片である。口縁形態は施釉のあるタイプのもので、この鉢は施釉
されていない。

8SK045暗灰色土出土遺物（[図28](#)、Pla4-2、[CD写真107・108](#)）

土製品

鞆羽口（1） 縦9.0×横5.8cm、厚さ2.2cmを測る。外面は高温で気泡の多い黒灰色のガラス質化
し、内面は還元した灰黒色を呈す。

8SK045茶灰色砂質土出土遺物（[図29](#)、Pla4-2、[CD写真107・108](#)）

土製品

鞆羽口（1） 縦7.7×横9.4cm、厚さ3.7cmを測る破片である。胎土は白色砂粒を多く含みやや粗い。
外面は器壁が高温でガラス質化しており、光沢のある紫黒色や灰紫色を呈す。

鑄型（2） 縦5.7×横5.3cm、厚さ3.6cmを測る破片である。胎土は酸化した黄褐色の細かな砂粒
で気泡を多く含む。鑄込み面は確認できず、椀型の中子の可能性もある。

8SK045茶灰色土出土遺物（[図29](#)、Pla4-2、[CD写真107・108](#)）

土師器

小皿a（1～3） 口径9.0～9.6cm、器高1.0～1.2cmを測る。底部糸切りで、淡黄白色の精良な胎
土である。

丸坏a（4） 口径17.6cm、器高4.3cmを測る大型の丸底坏である。口縁端部がやや丸く、体部が外
面に開く形態をしている。上記の小皿aの法量と合わせて、時期はX II期以降と考えられる。

瓦

丸瓦（5） 縦5.3×横9.4cm、厚さ1.8cmを測る破片である。一部に煤が付着し、全体が還元気味
の灰白色で、二次的に被熱したと考えられる。凸面は縦長格子目（I-C a）、凹面には模骨痕が残り、
粗い布目が確認できる。

8SK045灰色土出土遺物（[図29](#)、Pla4-2、[CD写真107・108](#)）

土師器

坏a（1） 口径12.8cm、器高2.1cmを測る。やや外反気味の口縁で、底部糸切りである。

土製品

鑄型（2） 10.7×7.5cm、厚さ3.0cmの破片で円形状を呈す。胎土は細かな砂粒である。鑄込み面
はないが、両面で淡灰白色に還元した部分がある。中子の可能性がある。

8SK055黒灰色土出土遺物（[図29](#)、[CD写真109](#)）

土師器

小皿a（1・2） 口径9.2～9.4cm、器高1.3cmを測り、底部糸切りである。

坏a（3） 口径15.8cm、器高3.1cmを測り、底部糸切りである。

土師質土器

鉢A×D(4) 器高5.8cmを測る小片である。白色砂粒と金雲母石を多く含むやや粗い胎土である。内面はヨコハケで、外面はヨコナデ後指押さえによる調整がのこる。

8SK062出土遺物 (図29・30、Pla4-3、CD写真109～111)

土師器

小皿a(1) 口径8.6cm、器高1.1cmを測り、底部糸切りである。

坏a(2) 口径14.9cm、器高3.0cmを測り、底部糸切りである。小皿aの口径が小型化していることからXVII期までの時期と推定される。

土製品

轆羽口(3～5) 3は縦3.5×横6.8cm、厚さ2.6cmを測り、内径10.1cmと推定される。内外面ともに高熱で溶解した部分は見られず、酸化気味の茶褐色を呈す。炉から遠位部分の羽口と考えられる。4は内径8.4cm、口径10.8cmを測る。胎土は大粒の白色砂粒を多く含み、やや密である。外面は高温で器壁が溶解し、黒色のガラス質化している。内面は先端部分が気泡の多くガラス質化し、その他は酸化した橙色を呈す。5は内径8.8cm、口径13.6cmを測る。外面の角のある形状から炉と轆との接合部分だと考えられる。外面から内面先端部分にかけて、黒色～暗赤黒色にガラス質化している。内面は酸化し、橙褐色を呈す。

鑄型(6～12) 6は縦5.8×横8.6cm、厚さ5.8cmを測る。胎土は砂粒をほとんど含まない精良な粘土で、断面から粘土塊を重ねている状況が確認できた。8SK045出土鑄型に類似している。鑄込み面は見られず、酸化した橙色砂が付着した部分があることから鑄型としている。7～11の胎土は淡灰白色の砂粒と気泡を多く含みやや粗い。鑄込み面は確認できないが、灰色に還元した面が確認できる。胎土と還元した面が共通していることから同一の鑄型の可能性が高い。総体的にみて、段を境に上方と下方に内湾する形態である。12は6.0×8.0cm、厚さ1.9cmを測る。胎土は白色砂粒を含みやや粗い。断面形状が蒲鉾状である。鑄込み面は確認できないが、淡灰色に還元した部分が鑄型中央に見られる。

8SK064出土遺物 (図30、Pla4-3、CD写真110・111)

土師器

小皿a(1) 口径7.8cm、器高1.4cmを測る。底部糸切りで金雲母を多く含む。

須恵質土器

鉢(2) 器高3.1cmの小片である。東播系鉢で口縁端部が平坦で、内湾する体部をもつ。森田編年I期段階と考えられる。

土製品

炉壁(4・6) 4は縦8.7×横10.5cm、厚さ3.8cmを測る。胎土は大粒の白色砂粒とスサ、粉殻を多く含みやや粗い。内面は暗灰色に被熱し、外面は淡黄白色に酸化している。6は22.6×15.8cm、厚さ10.4cmを測る大型の破片である。胎土は大粒の褐色砂粒と炭、メタル質の金属粒を多く含み粗い。内面は炉壁が高温で溶解した黄白色のガラス質になっており、所々に炭やメタル質が確認できる。SX082出土。

轆羽口(3・5) 3は縦4.7×横8.1cm、厚さ1.7cmを測る。外面は器壁が高温で黒灰色のガラス質に変化している。内面も灰黒色に還元している。5は5.2×7.0cm、厚さ2.8cmを測る破片である。外面は炉内での高温で凸凹の多い黒灰色のガラス質に変化している。内径の円と比較して、角のある外面をしていることから、炉壁の接合部分と考えられる。

8SK110出土遺物 (図30、CD写真112)

土師器

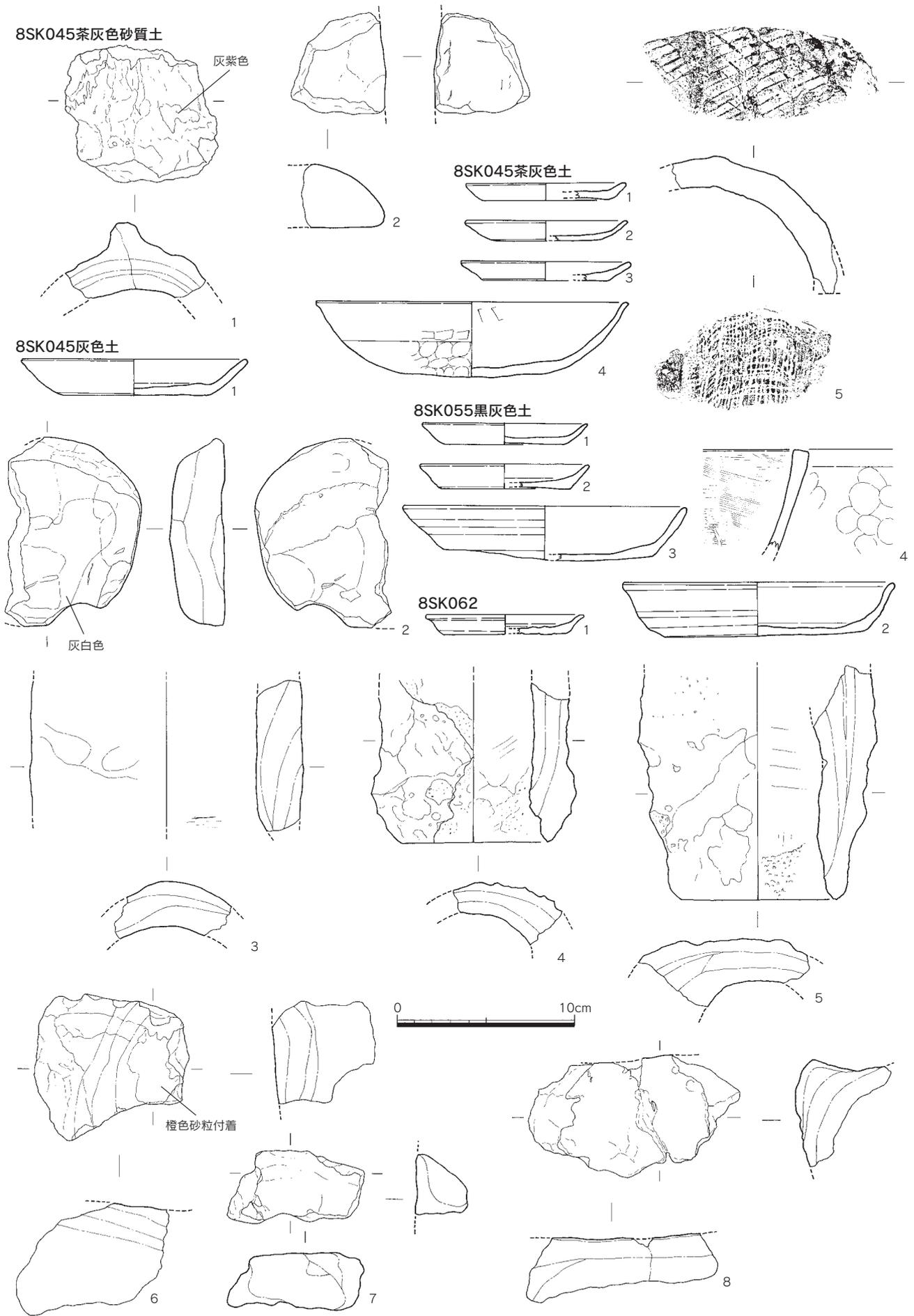


图29 8SK045·055·062出土遺物実測図 (1/3)

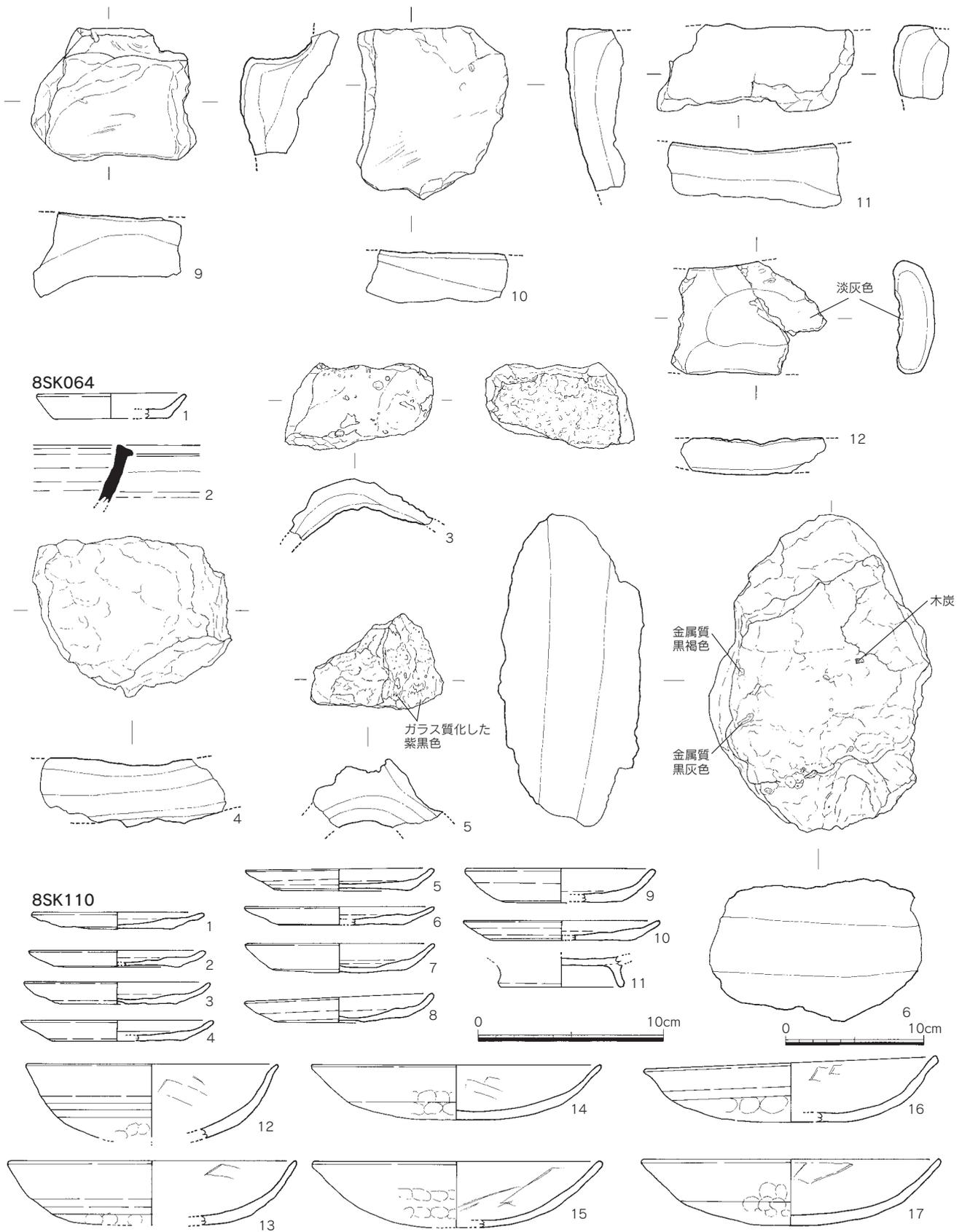


図30 8SK062・064・110出土遺物実測図 (1/3、1/4)

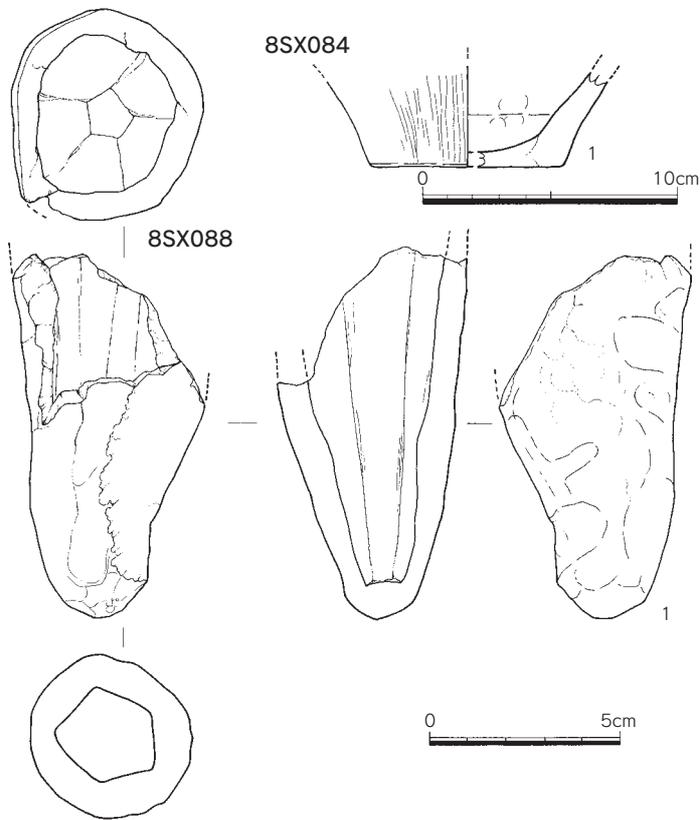


図31 8SX084・088出土遺物実測図 (1/2、1/3)

小皿a (1~10) 口径9.4~10.6cm、器高0.9~1.5cmを測る。底部へラ切りのみで、板状圧痕が残る。

丸坏a (12~17) 11は口径13.6cmを測り、やや外反気味の口縁をもつ。12~16は口径15.6~16.2cmを測る。押し出しによる内面ミガキbと外面の指頭痕が残る。口縁端部はやや外反気味である。小皿aの法量と合わせ、時期はX I期までに比定される。

椀c (11) 高台のみの小片である。胎土は精良な淡黄白色で、やや外踏ん張りの高台を呈す。

その他の遺構出土遺物

8SX084出土遺物 (図31、CD写真127・128)

弥生土器

甕 (1) 器高3.8cm、底径7.4cmを測る小片である。胎土には大粒の白色砂粒と赤色斑点を多く含みやや粗い。内底部に指圧痕、外面はタテハケ調整を施す。須玖II式に相当する。

8SX088出土遺物 (図31、CD写真127・128)

土製品

鋳型 (1) 縦9.6×横4.6cm、厚み0.7cmを測る破片である。胎土は細かな白色砂粒を若干含み密で、酸化気味の暗褐色を呈す。内部が五角形の空洞になっている。製品は脚状の部品と考えられる。

第3遺構面出土遺物

柵列出土遺物

8SA145a出土遺物 (図32、CD写真67・68)

土師器

坏a (1・2) 1は口縁から底部にかけての破片で、器高2.8cmを測る。底部糸切りである。2は口径14.0cm、器高2.5cmを測り、底部糸切りである。1・2ともに胎土が淡灰白色で精良である。

溝出土遺物

8SD119出土遺物 (図32、CD写真124)

土師器

小皿a (1) 口径9.4cm、器高1.2cmを測る。底部切り離しは不明。

小皿a2 (2) 口径9.8cm、底部へラ切りである。器壁が厚く、金雲母を多く含む。

坏a (3~5) 3は口径16.2cm、器高2.3cmを測り、底部糸切りである。4・5は口縁部だけの破片で、器高2.2cmを測る。底部は糸切りである。3~5は胎土が淡茶褐色で細かな金雲母を多く含む特徴がある。時期はX II期までと考えられる。

8SD130茶灰色砂質土出土遺物 (図32・33、Pla4-4・4-5、CD写真115~119)

土師器

小皿a (1~7) 口径9.4~10.0cm、器高1.2~1.3cmを測る。3は底部糸切りで、3以外は底部ヘラ切りである。7は底部に瓢箪状の墨書がある。

小皿c (8) 口径11.0cm、器高2.6cm、高台径7.4cmを測る。底部切り離しは底部が上から下へ穿孔されていたので、不明である。内外面ともに被熱して、一部黒色化している。

丸坏a (12~14) 口径15.3~17.2cm、器高2.6~3.3cmを測る。1は内面にミガキcを施し、外面には押し出しによる指圧痕が残る。

坏a (9・10・15~18) 9は底部糸切りで、底部に文字の判読は出来ないが墨書が確認できる。10は底部ヘラ切りで、底部に「大□」の二文字が確認できる。15~18は口径15.6~16.4cm、器高2.4~2.8cmを測る。底部糸切りである。18は体部外面に煤が付着している。

白磁

皿V×VI (11) 底部に文字は判読出来ないが、墨書が確認できる。

須恵質土器

鉢 (19・20) 19は口縁から体部にかけての破片で、口径26.8cmを測る。口縁端部は体部から内湾し、やや小さな玉縁状を呈し、外面に重ね焼き時に灰被りし黒灰色になる。口縁形態から森田I-2期段階と考えられる。20は底部から体部下半にかけての破片で、底径11.0cmを測る。底部糸切りで、内面にはタテ方向のナデがあり、見込みは使用により摩滅している。平坦な底部形態から森田I期段階と考えられる。

土製品

円形状土製品 (21) 白磁碗V×VIII類の高台部の中心を円形に打ち欠いている。縦7.7×横7.8cm、厚み2.3cmを測る。

棒状土製品 (22) 縦13.6×横5.6cmを測る破片である。胎土は白灰色の砂粒を多く含みやや粗い。全体が磨耗により調整は不明であるが、断面で粘土を丸めて整形した状況が確認できた。

炉壁 (26) 縦10.5×横8.6cm、厚さ5.4cmを測る。胎土は白色砂粒と金雲母を多く含みやや粗い。内面は被熱し、茶褐色を呈すが、全体的に酸化し淡橙褐色になっている。

瓦

平瓦 (23~25) 23は縦10.5×横13.5cm、厚さ2.0cmを測る。凸面は縦長斜格子目(宝満山分類I-B b)の叩きで、版の幅が約5cmほどであることが確認できる。24は10.5×13.5cm、厚さ2.4cmを測る。凸面には縦長斜格子目(I-B b)で格子目の間に「米」状の記号が入る。凹面には若干の粉殻痕と凸面の格子目が押しつけられた状況が確認できた。これは瓦が乾燥していない状況で瓦同士を重ねて置いていたためと考えられる。25は8.5×7.2cm、厚さ2.2cmを測る小片である。凸面は大きな横長斜格子目(I-C c)で、凹面はナデ消されている。凹面は被熱し、淡灰色に変色している。

石製品

石臼 (27・28) 27は径が9.4cm、軸穴は2.6cmを測る。石材は赤色片岩で、細かい播り目が確認できる。28は径が17.1cm、器高6.8cm、底径13.2cmを測る。石材は緑色片岩で、外面に線状の細かな叩きないし削り痕が確認できる。

笠石状石製品 (29) 花崗岩を五輪塔の火輪状に削りだしたもので縦23.6×横23.2cm、高さ12.5cmを測る。調整は1面がノミ状工具による線状の荒削りの段階で他は荒割り段階で止まる。

8SD130灰色土出土遺物 (図33、CD写真113・114)

土師器

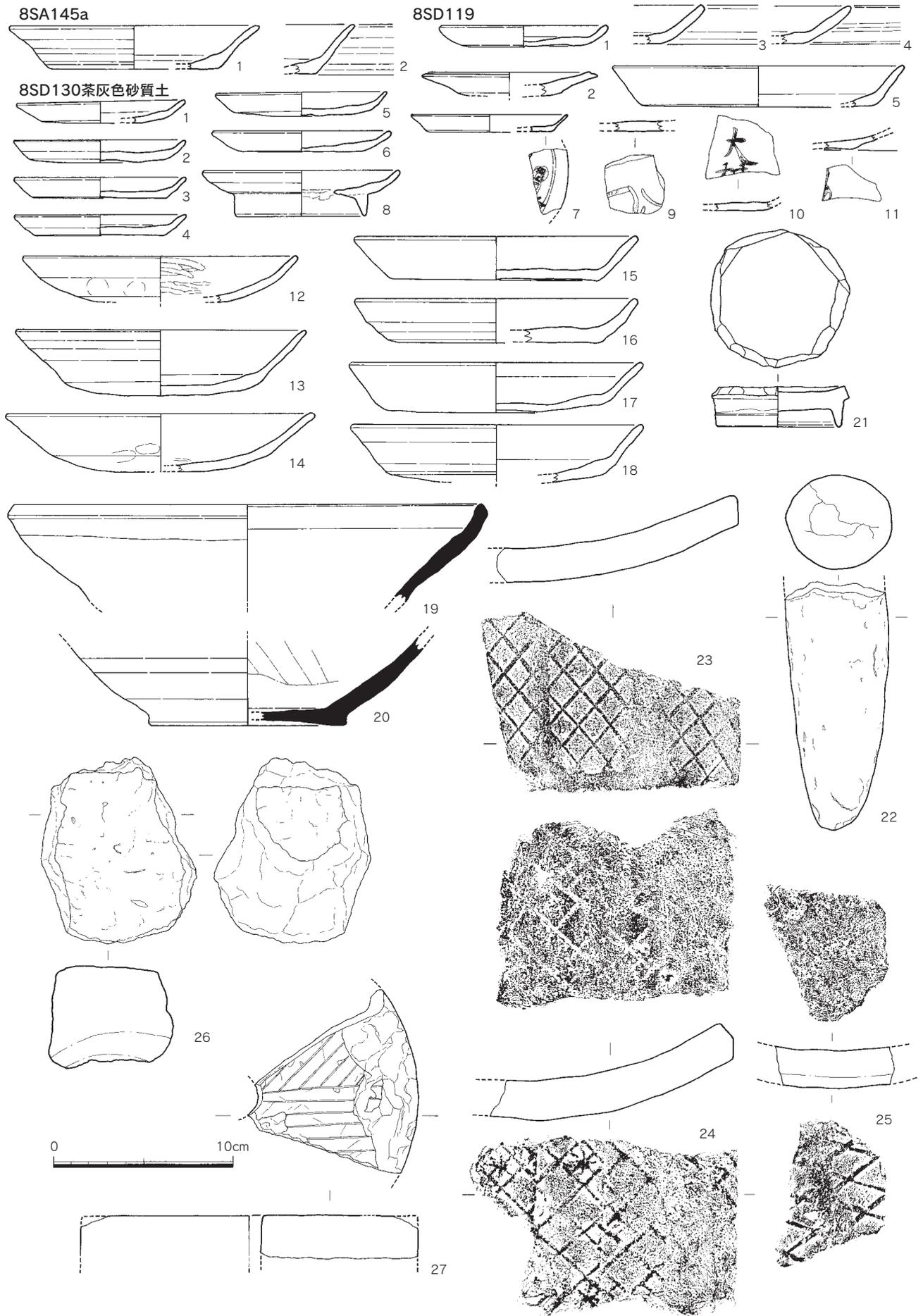


图32 8SA145、SD119·130出土遺物実測図 (1/3)

小皿a (1~3) 口径8.8~10.0cm、器高1.1~1.5cmを測る。底部へラ切りである。

瓦器

小椀 (4) 口径11.0cmを測る破片である。内外面ともに細かなミガキcが施される。胎土は砂粒が少なく精良で、燻し良好で光沢のある黒色を呈す。

瓦

丸瓦 (6) 縦3.0×横3.5cm、厚さ1.7cmを測り、やや硬質で須恵質な焼成である。凸面は縦長格子目 (I-B b) で凹面はナデ消される。側縁状況は分割後切り離しのままである。

平瓦 (5) 縦8.6×横6.8cm、厚さ1.7cmを測る小片で、硬質で須恵質な焼成である。凸面は横長斜格子目に直線の入る格子目 (I-D) の叩きを施す。

8SD130茶色土出土遺物 (図33、CD写真113・114)

土師器

小皿a (1~6) 1は口径6.2cm、器高1.5cmを測る。3は口径9.2cm、器高1.5cm、底径4.9cmを測る。2、4~6は口径8.1~11.2cm、器高1.0~1.2cmを測る。4、6は口縁端部に煤が付着し灯明皿として使用している。

坏a (7~9) 口径13.6~15.6cmを測る。7、8は底部糸切りで、9は底部へラ切りである。

土師質土器

鉢D (10) 口縁部だけの小片である。口縁端部外面に沈線状の窪みがあり、外面は指圧後細かなヨコハケを施す。

石製品

石鍋a (12) 口径39.4cmを測る破片である。滑石製で縦耳が付き、外面は細かなケズリで調整され煤が付着する。

瓦

丸瓦 (11) 縦7.0×横5.8cm、厚さ1.9cmを測る。凸面には大きな横長斜格子目 (I-C c) で、凹面に粗めの布目がある。側縁は分割切り離しのままである。

落込み出土遺物

8SX133出土遺物 (図34、Pla4-6、CD写真120・122・123)

土師器

小皿a (1) 口径9.9cm、器高1.9cmを測り、底部へラ切りである。

小皿c (2) 口径9.7cm、器高2.2cm、高台径5.0cmを測る。底部はへラ切りでハの字状の貼り付け高台である。淡黄白色の精良な胎土である。

坏a (3~6) 3、4は口径14.6~14.8cm、器高3.1~3.6cmを測る。押し出し技法により内面にミガキb、外面に指頭痕が観察できる。5は口径15.6cm、器高3.7cmを測る。口縁端部が丸く、体部がやや内湾する。6は口径16.0cm、器高3.0cmを測る。口縁端部が外反する特徴をもつ。5、6は3、4に比べて、口径が大きく、胎土が淡黄白色で精良である。

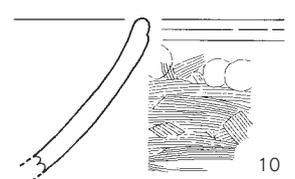
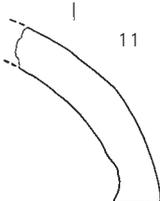
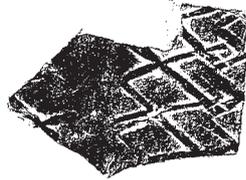
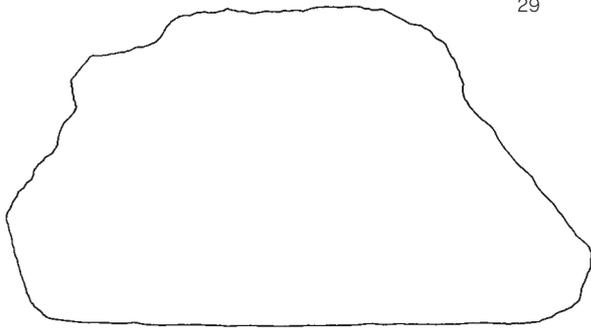
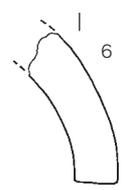
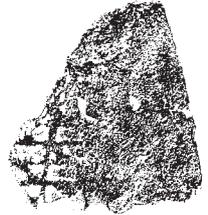
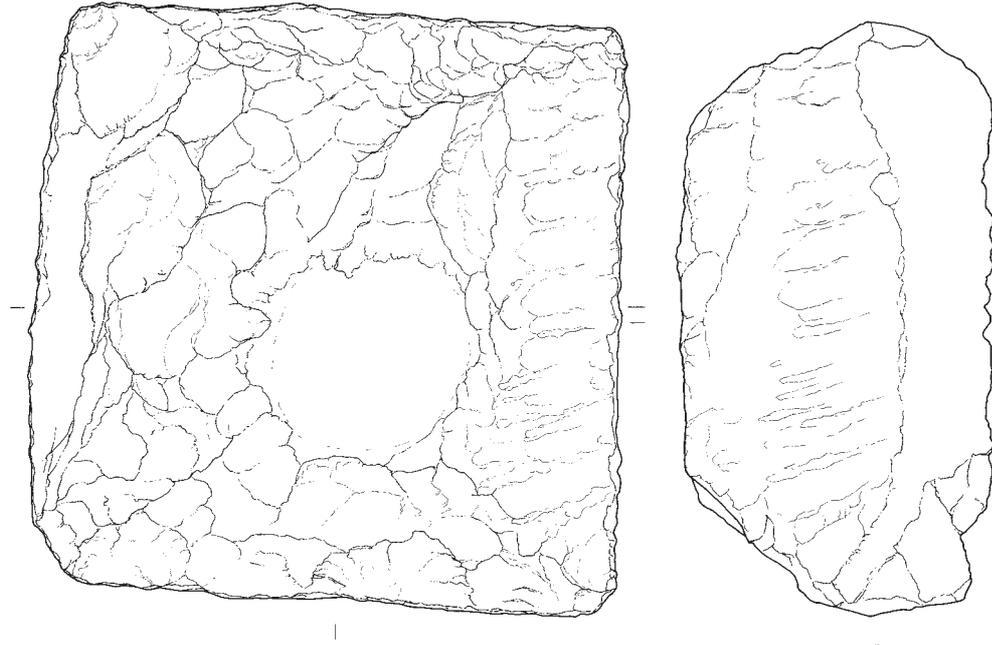
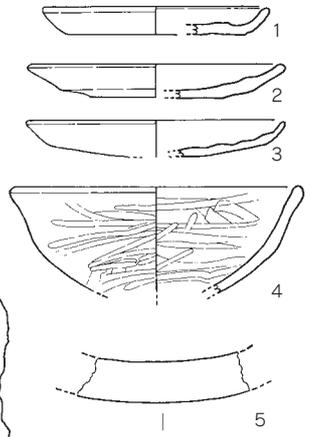
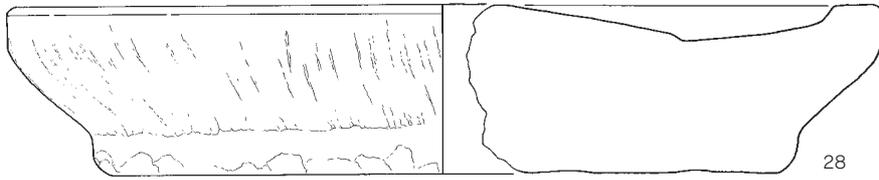
丸坏a (7・8) 7は口径14.0cm、器高3.3cmを測り、底部へラ切りである。8は口径15.0cm、器高3.5cmで、底部へラ切りである。胎土は淡黄褐色で赤色斑点を多く含む。

瓦器

椀c (9) 口径16.6cm、器高5.5cm、高台径6.2cmを測る。内面はミガキb、外面は押し出し指頭痕後、粗いミガキcである。口縁端部は丸く、体部が開く形態をなす。

椀 (10) 器高3.9cmの口縁部だけの小片である。内面はミガキb、外面は押し出し指圧痕後に細い

8SD130灰色土



8SD130茶色土

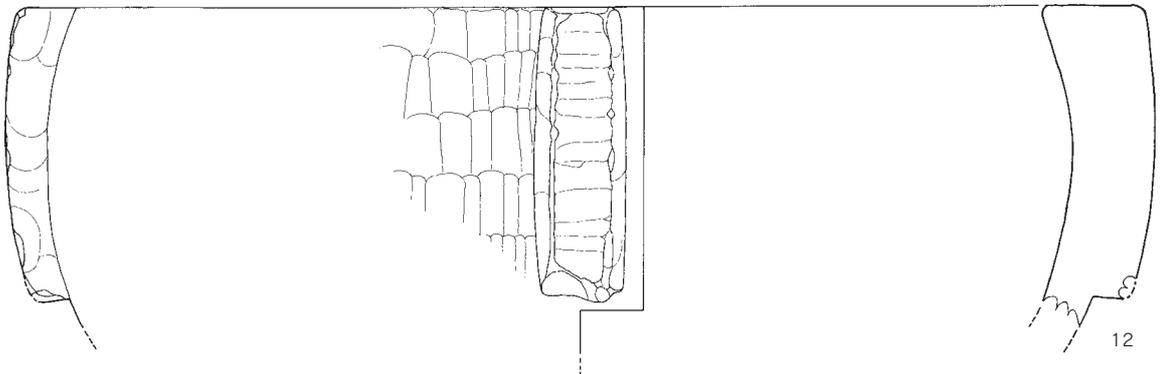
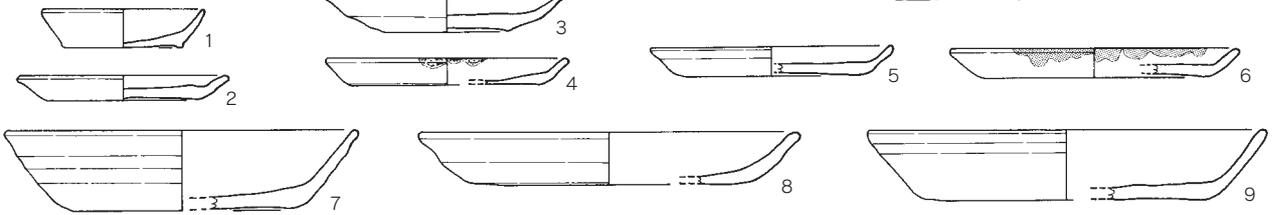


图33 8SD130出土遺物実測図 (1/3)

ミガキcを施す。口縁端部内面には沈線がめぐり、畿内産樟葉型の可能性がある。

石製品

砥石(14) 使用面には大きな傷が多く、石材は茶灰色の砂岩である。欠損している部分も含めて、二次的に被熱しており煤が付着している。

金属製品

椀形滓(13) 縦7.1×横5.7cm、厚さ3.8cmを測る。底部には砂粒が付着し、内面には明茶褐色の溶解した金属質が確認できる。

瓦

平瓦(11・12) 11は縦5.6×横8.8cm、厚さ1.9cmを測る破片である。やや軟質で瓦質の焼成である。側面状態は端部を凸面側にケズリで面取りをしているが、側縁は分割切り離しのままである。凸面は横長斜格子目(I-C b)で、凹面はやや細かな布目が残る。12は7.2×10.1cm、厚さ1.6cmを測る破片で、硬質な須恵質の焼成である。側縁は分割切り離しのままである。凸面は大きな横長斜格子目(I-C c)で、凹面は粗い布目である。

その他は写真のみの小片(CD写真122・123-16~19)であるが、白磁のみが出土している。

8SX134出土遺物(図34、CD写真121)

土師器

小皿a(1) 口径9.3cm、器高1.2cmを測り、底部へら切りである。

小皿a2(2) 口径9.4cm、器高1.4cmを測る。底部へら切りで、板状圧痕が見られない。

瓦器

椀(3) 口径14.0cmを測る。口縁端部は沈線がめぐり、内面は端部まで隙間なく細かなミガキcが入る。見込み部分はジグザグ状のミガキcが確認できる。外面は押し出し指頭痕後に隙間のある分割のミガキcが入る。内外面ともに燻し良好で銀化した光沢のある黒色を呈している。畿内産樟葉型I-3と推定される。

8SX137出土遺物(図34、CD写真121~123)

土師器

小皿a(1~3) 1は口径9.6cm、器高1.3cmを測り、底部糸切りである。胎土は淡黒灰色で、細かな金雲母を多く含む精良である。2は口径9.6cm、器高1.0cmを測り、底部へら切りである。3は口径9.6cm、器高1.7cmを測る。口縁下半で屈曲し、口縁が外反する。内底は強いナデがあり、底部はへら切り後板状圧痕は見られない。時期はXⅢ期までと考えられる。

椀c(4) 体部下半~高台にかけての破片である。内面は粗いミガキcで、外面は押し出し指頭痕がある。

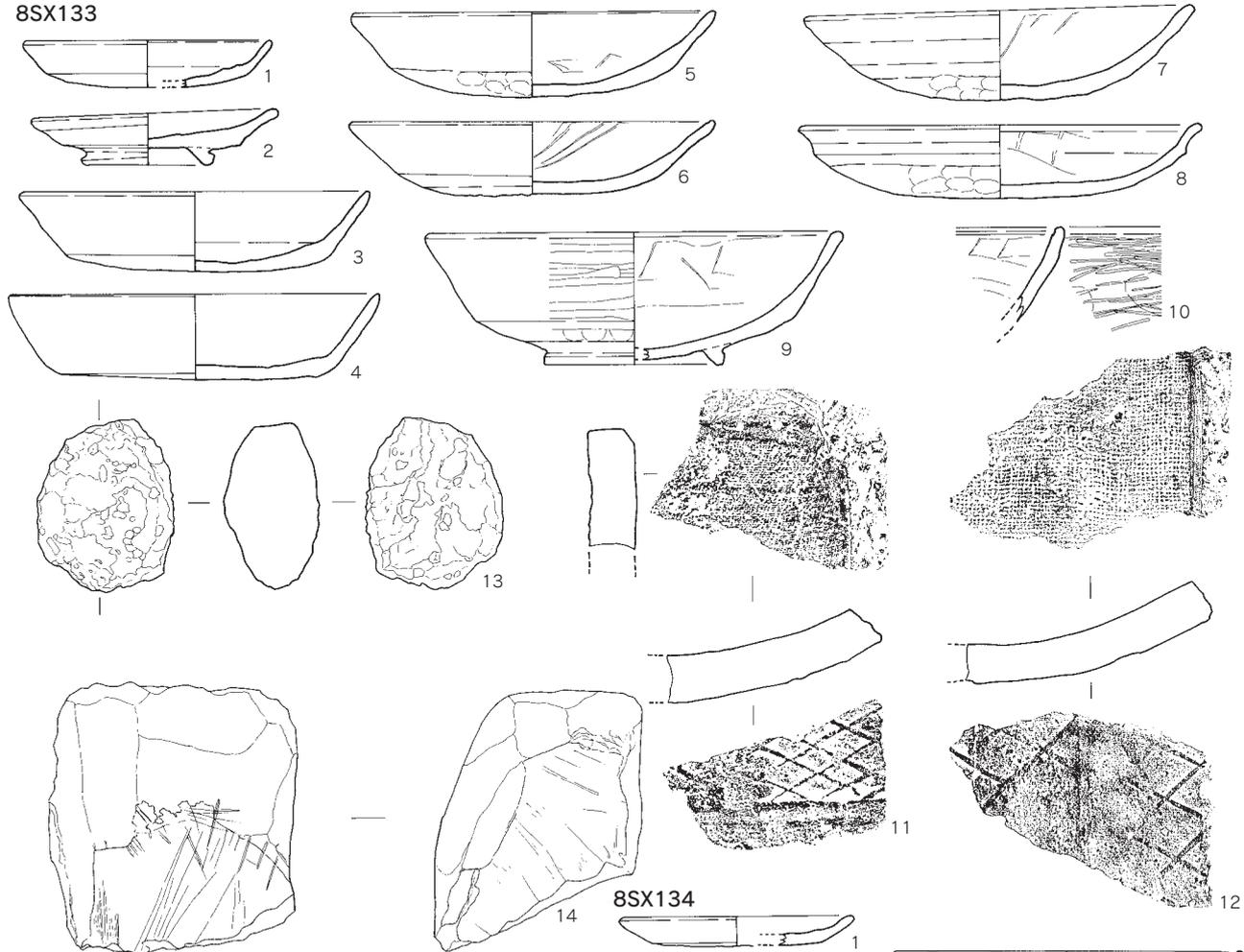
土師質土器

鉢(5) 口径29.0cmを測る口縁部のみの破片である。上部につまみ上げたような口縁端部で、外面には指押えによる調整がある。胎土は大粒の砂粒や赤色斑点を含む、やや粗である。口縁外面端部から内面にかけて油煙の煤が付着しており、内面は掻き落としたような状態である。このことから鉢を転用して、油煙煤を作るのに使用した可能性がある。

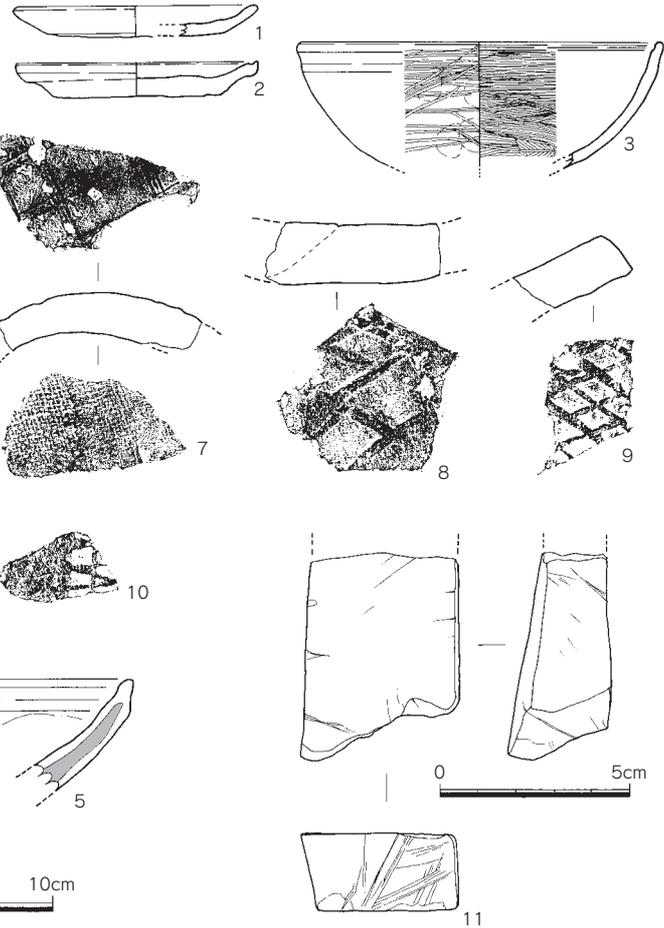
瓦

丸瓦(6・7) 6は縦10.3×横5.9cm、厚さ1.9cmを測る破片である。硬質で須恵質な焼成である。凸面は「・・寺」の文字の入る二重界線以外は丁寧にナデ消されている。7は4.4×8.0cm、厚さ1.8cmを測る破片である。凸面に細い二重格子(Ⅱ)の叩きが入る。

8SX133



8SX134



8SX137

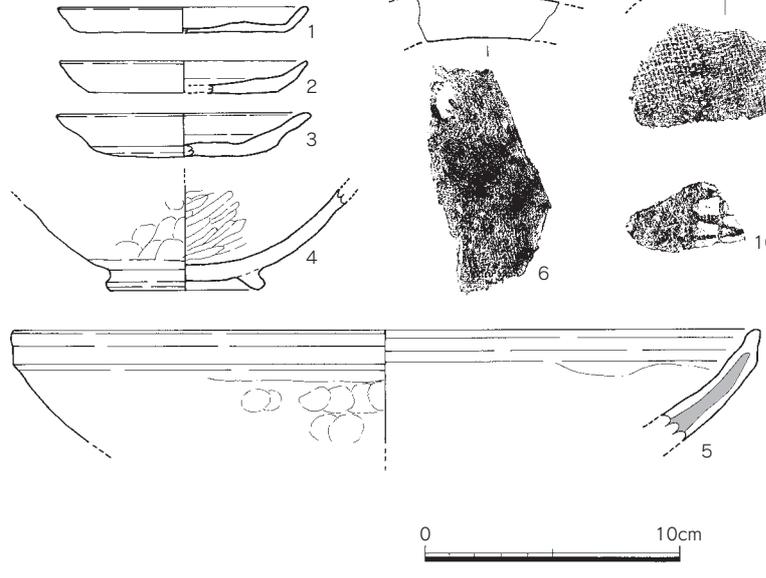


图34 8SX133 · 134 · 137出土遺物実測図 (1/2、1/3)

平瓦（8・9） 8は縦5.6×横8.8cm、厚さ1.9cmを測り、叩きは大きな横長斜格子目（I-C c）である。9は7.2×10.1cm、厚さ1.6cmを測る。横長斜格子目（I-C b）の叩きである。

瓦（10） 縦2.9×横5.0cmの小片である。叩きは横長格子目に直線の入る（I-D）である。

石製品

砥石（11） 淡灰黄褐色の天草産砂岩が石材で、細かな傷が多い。欠損した一箇所を除き、すべての面で使用痕がある。

土坑出土遺物

8SK096黄灰色土出土遺物（[図35](#)、[CD写真125・126](#)）

石製品

タタキ台（1） 縦14.4×横18.7cm、厚さ2.9～6.2cmを測る破片である。石材は花崗岩で、煤や被熱し黒色に変色している状況が見られる。被熱を伴う作業台に使用された可能性がある。

8SK097黒灰色土出土遺物（[図35](#)、[CD写真125・126](#)）

土師器

小皿a（1） 口径10.8cm、器高1.1cmを測り、底部へら切りである。

丸坏a（2） 口径16.4cm、器高4.1cmを測る。淡黄白色の精良な胎土で、口縁端部はやや丸く、外面の底部から口縁部に掛けて指圧痕による屈曲がある。

整地層出土遺物

8SX080茶灰色土出土遺物（[図35](#)、[CD写真125・126](#)）

青白磁

小坏（1） 口径6.6cm、器高5.1cm、高台径3.6cmを測る。胎土は黒色斑点を含む精良で、青みがかった乳白色釉が薄くかかる。体部にはケズリによる雑な蓮弁文が入る。

土製品

鋳型（2） 縦3.7×横3.1cm、厚さ1.4cmを測る破片である。胎土には白色砂粒と粉殻、スサなどを含みやや粗い砂質である。鋳込み面にはクロミが若干残り、全体は酸化し橙色を呈す。段を有する形状である。

8SX080出土遺物（[図35](#)、[CD写真125・126](#)）

土師器

小皿a（1～3） 口径8.8～9.4cm、器高0.9～1.1cmを測り、底部へら切りである。1は細かな砂粒と赤色斑点、金雲母石を多く含む淡黄白色の胎土である。

黒色土器

椀c（4） 底部のみの小片である。底部へら切りで、外踏ん張りの高台をもつ。内面見込みにへら記号が入る。

石製品

砥石（5） 縦8.4×横5.0cm、厚さ2.2cmを測る。石材は淡黄色にピンクや褐色のマーブルが入る泥砂岩である。手持ちの上砥石と考えられる。

瓦

軒丸瓦（6） 連弁の一部のみの小片である。胎土は大粒の白色砂粒を多く含みやや密で、硬質の須恵質な焼成である。瓦当は連珠文複弁である。

その他の遺構出土遺物

8SX126出土遺物（[図35](#)、[CD写真129・130](#)）

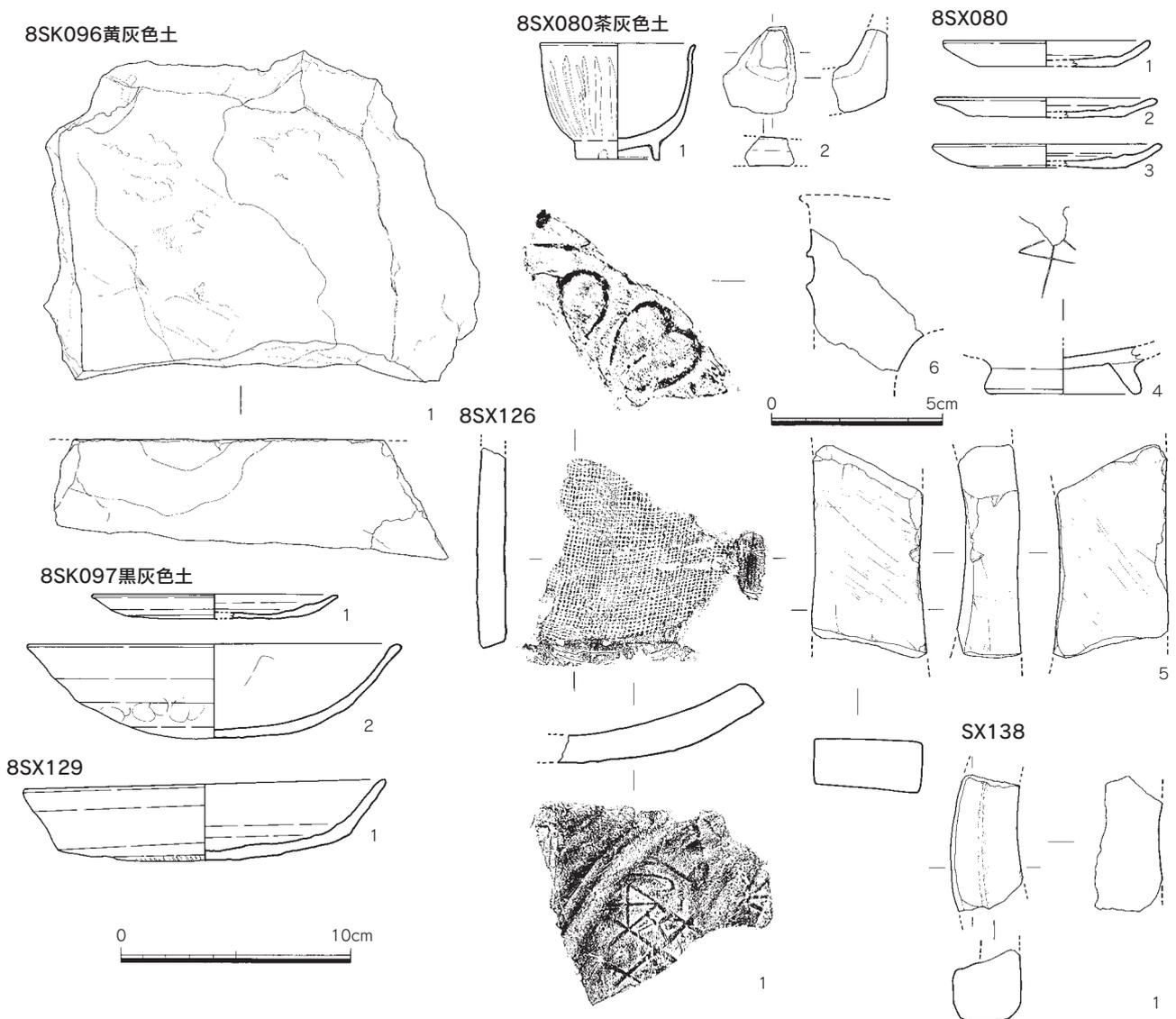


図35 8SK096・097、SX080・126・129・138出土遺物実測図 (1/2、1/3)

瓦

平瓦 (1) 凸面の叩きが大きな横長斜格子目 (I-C c) の中に「+」、「×」や鈎針状の模様が入る。

8SX129出土遺物 (図35、CD写真129・130)

土師器

坏a (1) 口径15.8cm、器高3.6cmを測り、底部ヘラ切りである。

8SX138出土遺物 (図35、CD写真129・130)

土製品

鋳型 (1) 円形のドーナツ状を呈す鋳型で、全体が酸化し淡茶褐色になっている。四角い端部が確認できる。鋳込み面は確認できず、中子の可能性もある。

包含層出土遺物

暗灰土出土遺物 (図36、CD写真131・132)

土師器

小皿a (1) 口径9.8cm、器高1.1cmを測り、底部ヘラ切りである。

坏a (3~5) 口径15.6~15.8cm、器高2.8~3.1cmを測り、底部ヘラ切りである。

瓦器

小皿a (2) 口径10.4cm、器高2.1cmを測る破片である。胎土は精良で、外面口縁部が黒色に燻さ

れている。

土製品

円形状土製品（6） 縦8.2×横8.5cm、厚さ2.5cmを測る。白磁椀V類を加工し、高台を残し周辺を打ち欠き円形にしている。

炉壁（7） 縦8.7×横10.5cm、厚さ3.8cmを測る。胎土は大粒の白色砂粒とスサ、粉殻を多く含みやや粗い。内面は暗灰色に被熱し、外面は淡黄白色に酸化している。

石製品

砥石（8） 縦6.3×横6.9cm、厚さ0.6cmを測る破片である。暗灰色の泥砂岩製で、小型で非常に薄いことから、手持ちの上砥石と考えられる。

黒灰色土出土遺物（図36、CD写真133～135）

土師器

大皿a（6） 口径25.0cm、器高4.8cm、底径19.6cmを測る。底部糸切りで、板状圧痕がある。口縁部はナデ上げの痕跡が残り、外面に煤が付着する。

高麗青磁

壺（7・8） 7、8は接合しないが、胎土や釉調から同一の破片と推定される。胎土は細かな黒色、白色砂粒を多く含み硬質で密である。釉調は貫入が入り光沢のある青灰色釉が外面に掛かる。7は白色・黒色の化粧土で象嵌模様が入る。

中国陶器

壺Ⅳ（9） 口径21.5cm、器高2.5cmを測る口縁のみの破片である。胎土は砂粒を多く含み、器面に黒色斑点が多く噴出する紫灰色で、黄灰緑色の釉が薄くかかる。

肥前系磁器

蓋（1） 口径8.0cm、器高2.4cmを測る。外面には梅模様、内面には浜と網小屋模様が入る。呉須は明るい青色である。

椀（2・3） 2は1とセットである。口径9.5cm、器高5.3cmを測る。3は口縁が端反り、全体的に器壁が薄い。外面には明るい青色の呉須で、円窓文を施す。

国産陶器

小壺（5） 口径10.0cm、器高7.9cmを測る。底部はヘラケズリで、体部中位まで削りがはいる。口縁が外面に屈曲する。光沢のある暗茶褐色釉が薄く掛かる。

土製品

チャツ（4） 口径7.0cm、器高2.5cmを測る。底部はヘラ切りで、接着面に離れ砂が付着している。陶磁器の焼成時に使用される台で、口径7.0cm、器高2.5cmを測る。底部はヘラ切りで、接着面に離れ砂が付着している。窯買いした製品についていたものか。

鑄型（10～12） 10、11は、二重の沈線を持つ大型の獣脚部分の鑄型である。香炉など仏具の一部と考えられる。胎土は白色砂粒や金雲母石を多く含み、気泡が多くやや粗い。鑄込み面は暗灰色に還元し、その他は赤茶色に酸化している。12は椀形状の破片である。胎土は砂粒や金雲母石を多く含みやや粗い。鑄込み面は淡灰色に還元し、その他は淡橙茶色に酸化している。

茶色土出土遺物（図36、CD写真134・135）

龍泉窯系青磁

坏Ⅲ-3b（1） 口径13.4cm、器高3.7cmを測る破片である。胎土は淡褐色の砂粒を若干含み精良で、貫入の入る厚めの灰緑色を呈す。

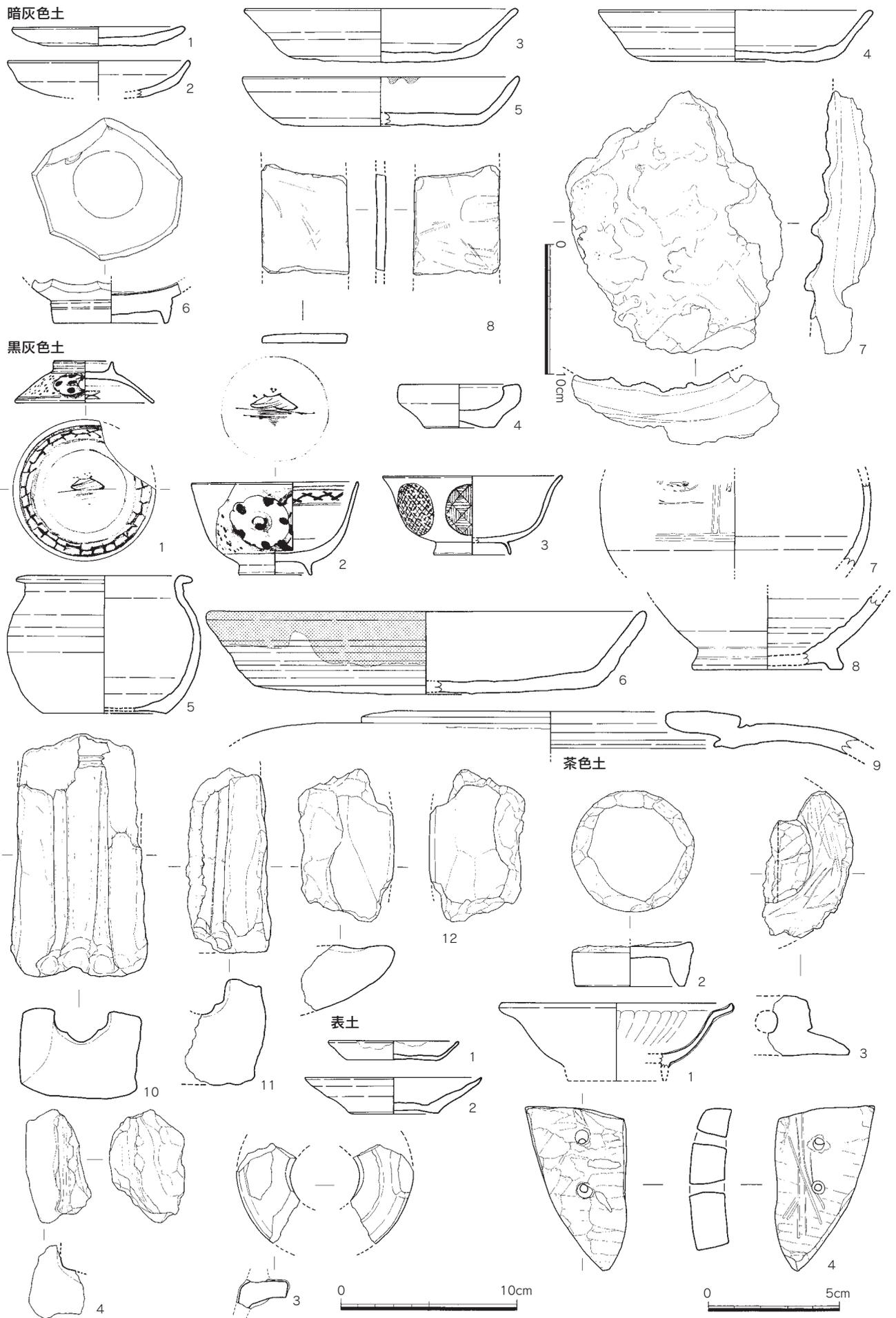


图36 暗灰色土、黑灰色土、茶色土、表土出土遺物実測図 (1/2、1/3)

土製品

円形状土製品（2） 縦7.0×横7.0cm、厚さ2.3cmを測る。白磁椀Ⅳ類を高台周辺を円形に打ち欠く。

石製品

石鍋補修品（3） 滑石製石鍋を二次加工した石鍋の補修品である。石鍋と補修品とを留める穿孔があるが、補修した後に付着した煤が先端部に付着している。

不明製品（4） 縦6.4×横3.7cm、厚さ1.3cmを測る。二つの穿孔が入り、二等辺三角形の滑石製品である。断面形状がやや内湾し、凸面に煤が付着していることから石鍋の二次加工品と考えられる。

表土出土遺物（図36、CD写真134・135）

土師器

小皿a（1・2） 1は口径7.4cm、器高1.1cmを測り、底部糸切りである。器壁が薄く、口縁端部に煤が付着しており、灯明皿として使用している。2は口径10.1cm、器高2.1cm、底径5.2cmを測る。底部糸切りで、口縁が大きく外反する。

龍泉窯系青磁

不明製品（3） 欠損部分から推定して香炉か、筒状製品と推定される。胎土は微細な黒色粒子を含む明灰色で精良、釉調は大きな貫入が入り光沢のある灰緑色釉が厚く掛かる。

土製品

鋳型（4） 黒灰色出土の獣脚の鋳型と類似しており、同一の型と考えられる。鋳込み面は還元して明灰色になっており、胎土は白色砂粒を多く含むやや粗い。

第4章 まとめ

今回の調査でわかったこと

- 1、12世紀中頃以前に行われた天満宮周辺の開発で掘られた南北溝を検出したこと
- 2、この溝の東側の法面が石積み（葺き）で作られていたこと
- 3、12世紀中頃～13世紀前半までの鋳造関連遺構を検出したこと。
- 4、この遺構は観世音寺前面の鋳造関連遺構と同時期の可能性が高く、安楽寺天満宮前面の開発に伴って発生した鋳造工房があったと推定されること。
- 5、12世紀後半に埋没した井戸から「安楽寺天承二年銘」と「安楽寺参重御塔」の瓦が出土したこと。
- 6、このことから『天満宮安楽寺草創日記』に記載される「新三重塔」よりも古い段階の三重塔の存在が想定されること。

3・4については茶灰色土の整地層（8SX080）に切り込む第2遺構面で、鋳造関連遺構や遺物が確認できた。第1遺構面での少量の遺物の出土から、小規模な鋳造は行なわれていたと推定されるが、遺構は確認できない。獣脚や鍋などの器物を中心とした仏具を含む調度品が造られており、12世紀中頃以降の安楽寺周辺の開発に連動した工房の存在が考えられる。

瓦については「安楽寺参重御塔」の文字瓦は本報告以前からその存在が知られ、『天満宮安楽寺草創日記』に記載される建永元年（1206）後鳥羽上皇の母・七条院が寄進した「新三重塔」の瓦ではないかと考えられてきた。しかし、今回の調査で12世紀後半埋没の井戸（8SE050）から出土し、「安楽寺天承二年銘」（1132年）文字瓦の存在から、文献に残る「新三重塔」の瓦ではなく、それ以前に存在した三重塔の瓦ではないかと想定できる。これまでの発掘成果と文献資料とを考え合わせると安楽寺周辺の最も活発な開発は、平安時代後期以降、上皇を中心とした中央貴族や寺院などの権門との関わりの中で進行していったと考えられる。

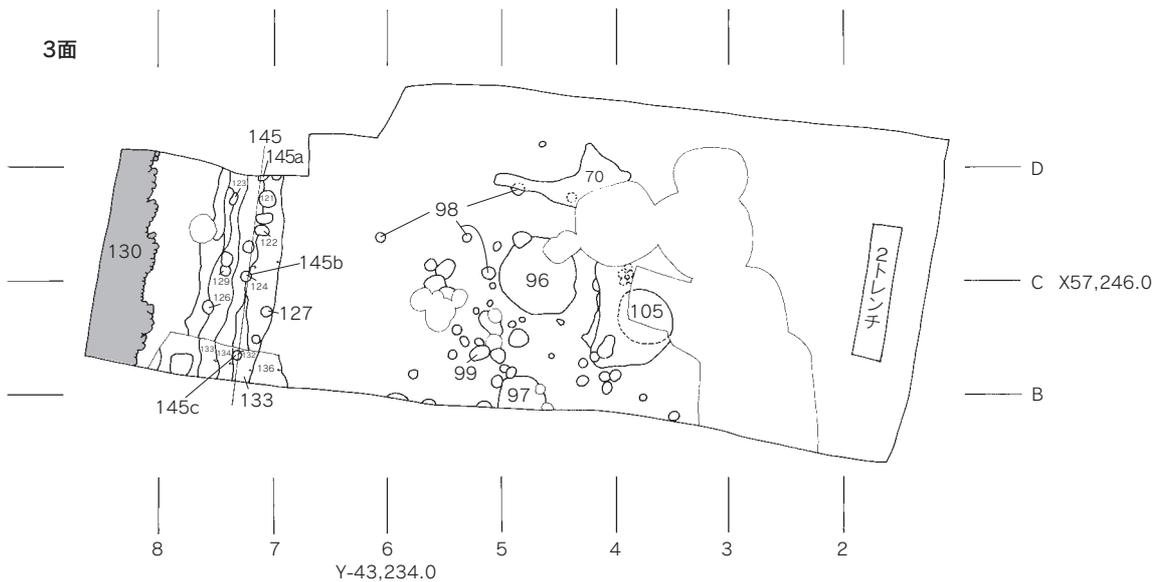
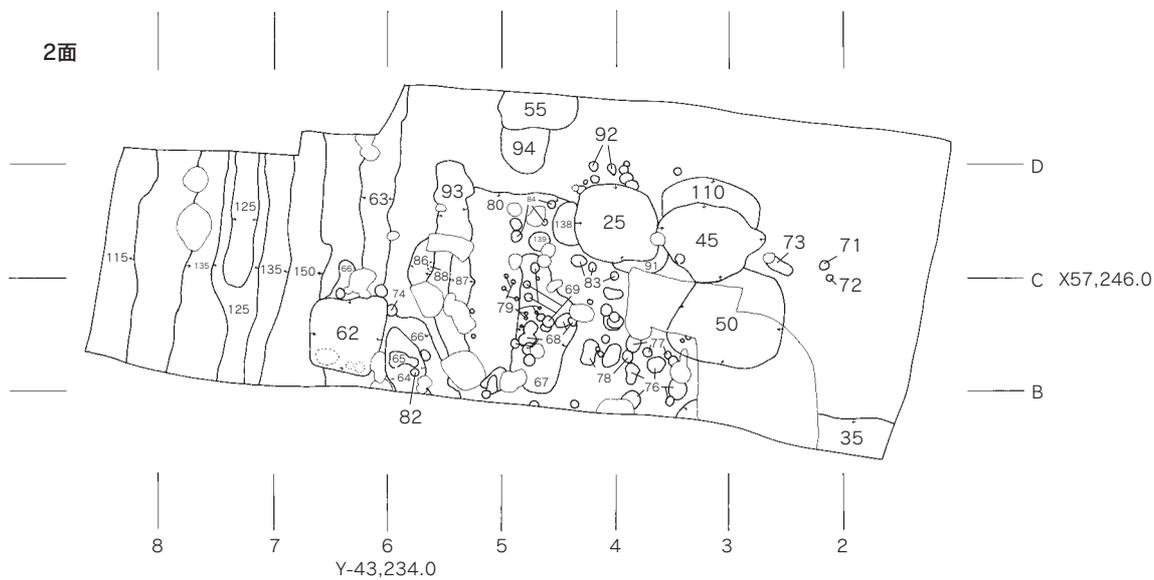
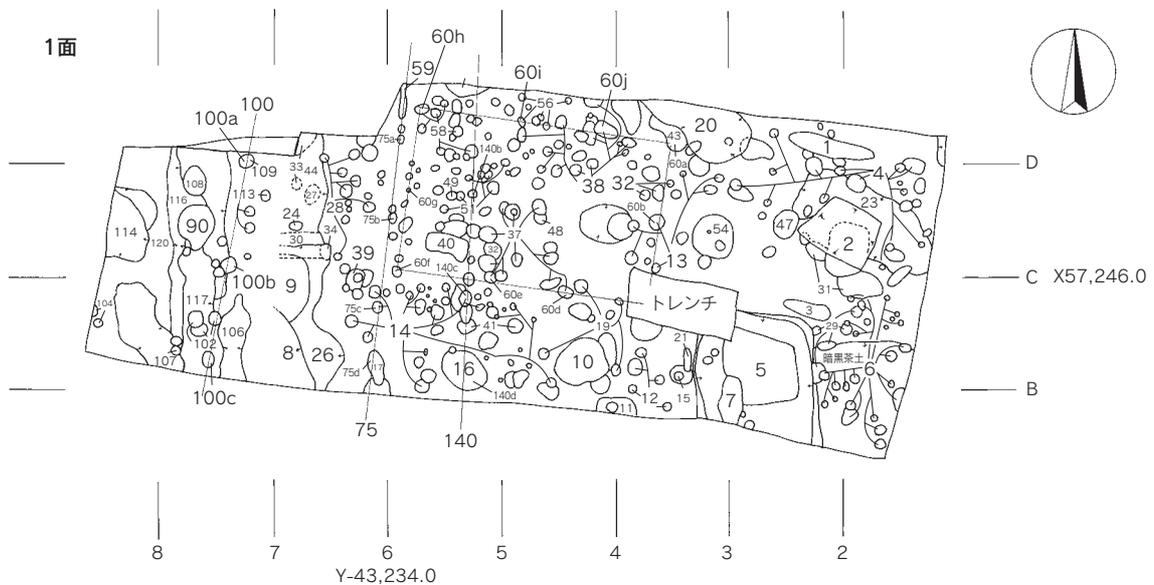


図37 略測図 (1/200)

遺構一覧 (1)

S番号	遺構番号	遺構性格	堆積土	備考【先後関係】	時期	地区
1		溝状たまり	灰黒色土 (炭混じり)			D1.2
2		土坑	黒色土			C2
3		溝状たまり	明茶色土			B2
4		小穴群	茶灰色土			C1~D2
5	SK005	土坑	黒茶色粘←黄茶色粘	5→7	18c後半～	A2~B3
6		小穴群	黒色土			B1~A2
7		土坑	青灰色粘	5→7		A2~B3
8		たまり	暗茶灰色土(炭混じり)	9→8		B6
9		たまり	灰色土	9→8		B6
10	SK010	土坑	黒茶色土(炭混じり)	土器集積傾向あり	12c後半～	B4
11		土坑	黒茶色土			A3.4
12		小穴群	黒色土			A.B3
13		小穴群	茶褐色土			C3
14		小穴群	黒色土			B4~6
15	SK015	埋壺		15→21	近世～	B3
16		土坑	茶黒色土			B5
17		土坑	灰黒色土			B6
18		小穴	黒茶色土	18→8		B6
19		小穴群	黒色土			B4
20	SK020	土坑	茶色土←茶黒色土	22→20	近世～	D2.3
21		くぼみ		15→21		B3
22		土坑群		22→20		D2.3
23		たまり群	淡茶色土	23→4		B.C1
24		小穴	灰白色土	27→24		C6
25	SE025	石組井戸		25→13	～13c中頃	C3.4
26		くぼみ	暗灰黒色土	27→26		B6
27		くぼみ	暗茶色土	27→26		C6
28		小穴群	黒灰色土	27→28		C6
29		小穴群	茶黒色土	29→6		B1.2
30		土坑	黒色土	30→44		C6
31		くぼみ群	灰茶色土	31→2		B1.C2
32		小穴群				C3
33		くぼみ群	暗黒色土	33→27		C.D6
34		小穴群	暗灰青色土	34→27		C6
35		溝	茶灰色土	→暗黒茶色土		A1
36		土坑	灰茶色粘	36→14		B5
37		小穴群	茶色土			C4
38		小穴群	黒茶色土			D4
39		小穴	青灰色土	39→14		B6
40		土坑	暗茶色土			C5
41		小穴群	暗茶色土	41→37		B5
42		小穴	茶色土			C4
43		くぼみ	暗茶色土	43→20		D3
44		くぼみ	暗青黒色土			B.C6
45	SK045	土坑	茶灰色土	45→54	13c中頃～	C3
46		くぼみ	黒色土			C5
47		小穴	黒色土←茶灰色土			C2
48		小穴		48→37		C4
49		小穴	茶灰色土			C5
50	SE050	井戸	茶灰色粘		12c中頃～	B2
51		小穴群	黒灰色土			C5
52		小穴	黒色土	52→37		C5
53		小穴	黒色土			C5
54		たまり	茶色土	45→54		C3
55	SK055	土坑		55→56		D4
56		小穴群	黒色土	55→56		D4
57		たまり	暗灰色土			D5
58		小穴群	黒色土			D5
59		溝状	黒黄色土			D5
60	SK060	掘立柱建物		a~j	12c中頃～	C3~5
61		小穴	黒灰色土			D5
62	SK062	土坑	黒灰色土		13c中頃～	B6
63	SD063	溝	淡灰色土		12c後半	C.D6
64	SK064	土坑	灰色土(炭混じり)			B5
65	SX065	流動滓		65→64	～13c中頃	B5
66		整地層	灰色土(黄土ブロック入)	66→62.64		B5
67		たまり	黒色土			B4
68		小穴群	黒色土	68→67		B4
69		小穴群	茶灰色土	69→67		B4
70	SD070	溝	茶灰色土	70→25	11c後半～12c初頭	C4
71		小穴	黒色土			C2
72		小穴	茶灰色土			C2
73		土坑	黒色土			C2
74		小穴	茶灰色土			B5
75	SA075	柵列		a~c		B~D5

遺構一覧（2）

S番号	遺構番号	遺構性格	堆積土	備考【先後関係】	時期	地区
76		小穴群	灰色土			B3
77		小穴群	黒色土			B3
78		小穴群	灰色土			B4
79		小穴群	黒色土			B4
80	SX080	整地層	茶灰色土		～12c前半	B.C4
81		小穴	淡灰色土	81→64		B5
82		炉跡?	暗灰色土	82→64		B5
83		小穴群	黒色土			C4
84		小穴群	灰色土			C4
85	SX085	胎衣壺			近世～	B5
86	SD086	溝	茶灰色土(炭混じり)		13c前半	C4
87	SD087	溝	茶灰色土(炭混じり)		13c前半～	C4
88		小穴	茶灰色砂	88→86		C5
89		小穴	黒色土			C3
90		土坑	黒灰色土			C7
91		たまり	黒色土	91→25		C3
92		小穴群	黒色土		13c前半～	D4
93	SD093	溝	暗灰色土			C5
94		土坑	茶灰色土	94→55		D4
95		土坑	暗灰色土	110→95→20		C2
96	SK096	土坑	黄灰色土	→80	～12c前半	C4
97	SK097	土坑	黒灰色土		11c後半～12c初頭	B4
98		小穴群	黒灰色土	98→70		C5
99		小穴群	黒灰色土			B5
100	SA100	柵列		a～c		B～D5
101		土坑×たまり	茶色土			A3
102		小穴群	黒灰色土			B7
103		小穴	黒灰色土	100cに変更		B7
104		小穴群	灰色砂			B8
105	SE105	井戸		→黒灰色土	11c後半～12c初頭	B3
106	SD106	溝	茶灰色砂			B7
107		小穴	灰色粘			B7
108		小穴	黄色砂			C7
109		小穴	黄色砂	100aに変更		C7
110	SK110	土坑	茶灰色土	110→45、95	11c中頃	D3
111		小穴	灰色粘	100bに変更		C7
112		小穴群	黒灰色土			C7
113		小穴群	黒灰色土			C7
114		土坑×たまり	茶灰色土	120→114		C8
115	SD115	溝	黒灰色粘	130→115→120	14c後半～	B.C8
116		整地層	黄色土	118→117→116		B.C7
117		整地層	灰黄色土			B7
118		整地層	淡灰色土			C7
119		溝	茶配色土			B.C8
120	SD120	溝	暗灰色土	130→115→120	18c後半～	B.C8
121		小穴	黒灰色土			C7
122		小穴	黒灰色土			C7
123		小穴	暗灰色土			C7
124		小穴	黒灰色土	145aに変更		C7
125	SF125	道路状遺構	淡灰色砂		～12c後半	C7
126		小穴	暗灰色土			B7
127		小穴	黒灰色土			B7
128		小穴				
129		小穴	暗灰色土			C7
130	SD130	石積遺構	茶灰色砂	130→115→120	12c中頃～	B.C8
131		溝	黒灰色土			
132		小穴	暗灰色土	133→132 145cに変更		B7
133	SX133	落ち込み	茶灰色土	136→133→134→130茶灰色粗砂	～12c中頃	B.C7
134	SX134	落ち込み	黒色土	S-130上面	～12c初頭	B.C7
135	SF135	道路状遺構	黒灰色土	135→125	～12c後半	B.C7
136	SX136	落ち込み	茶色砂		～12c中頃	B7
137	SX137	落ち込み	暗灰色砂			B7
138		土坑	茶灰色土(炭混じり)			C5
139		溝	茶灰色土(炭混じり)			B5
140	SA140	柵列				B～D5
145	SA145	柵列				B～D5
150	SX150	落ち込み		8SX133・134・136・137の総括番号		B.C7



Pla1-1 第1遺構面完掘状況（上から南）



Pla1-2 第2遺構面完掘状況（西から）



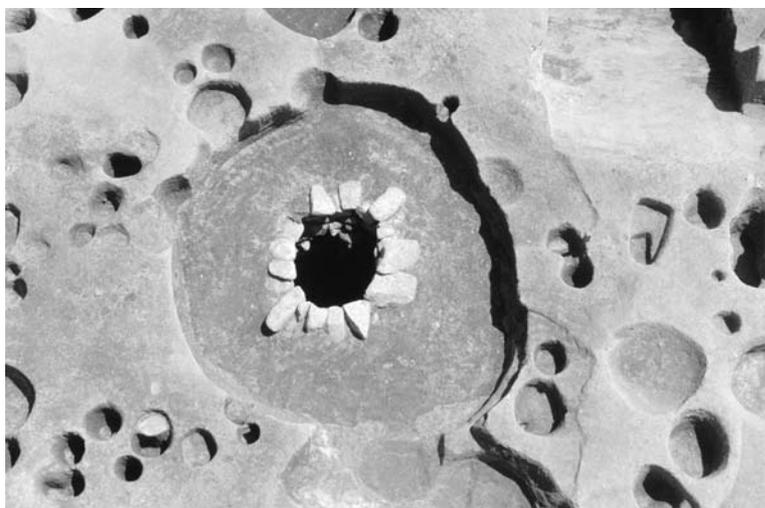
Pla1-3 第3遺構面完掘状況（西から）



Pla2-1 西側第1遺構面完掘状況（北から）



Pla2-2 西側第2遺構面完掘状況（北から）



Pla2-3 8SE025検出状況（西から）



Pla2-4 8SE050瓦出土状況（北から）



Pla2-5 8SK045検出状況近景（北から）



Pla2-6 8SK045東西土層（南から）



Pla3-1 8SK064検出状況近景 (南から)



Pla3-2 8SD130検出状況 (北から)



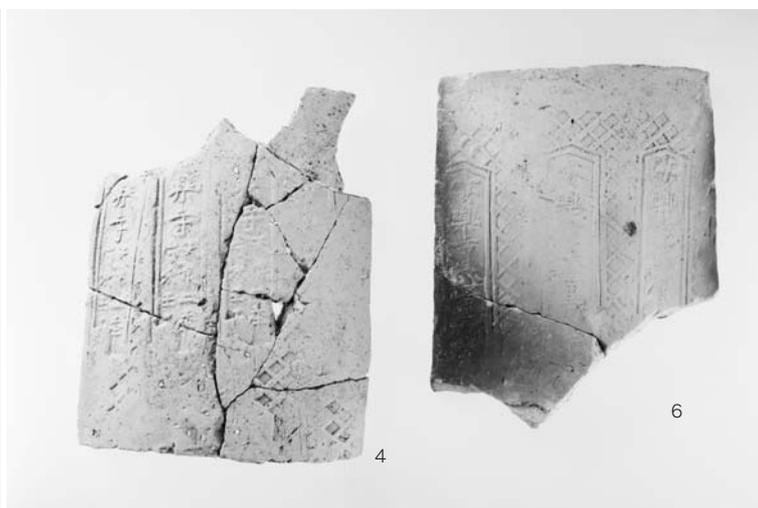
Pla3-3 8SK005出土遺物



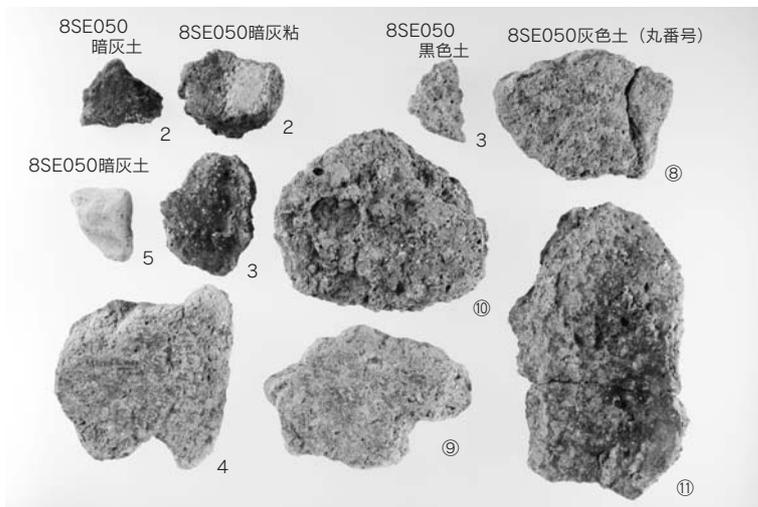
Pla3-4 8SX085出土遺物



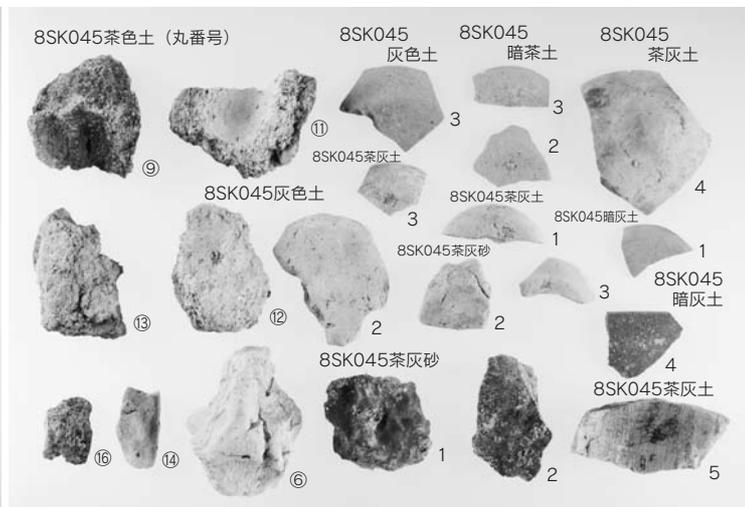
Pla3-5 8SE050出土遺物①



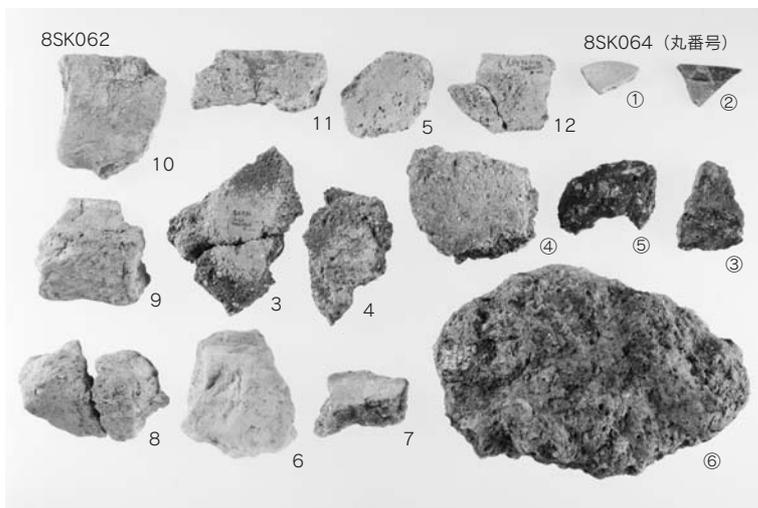
Pla3-6 8SE050出土遺物②



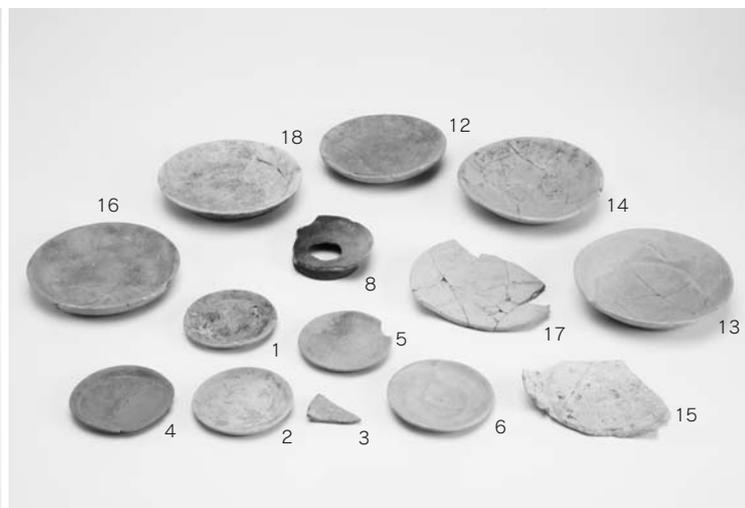
Pla4-1 8SE050出土遺物③



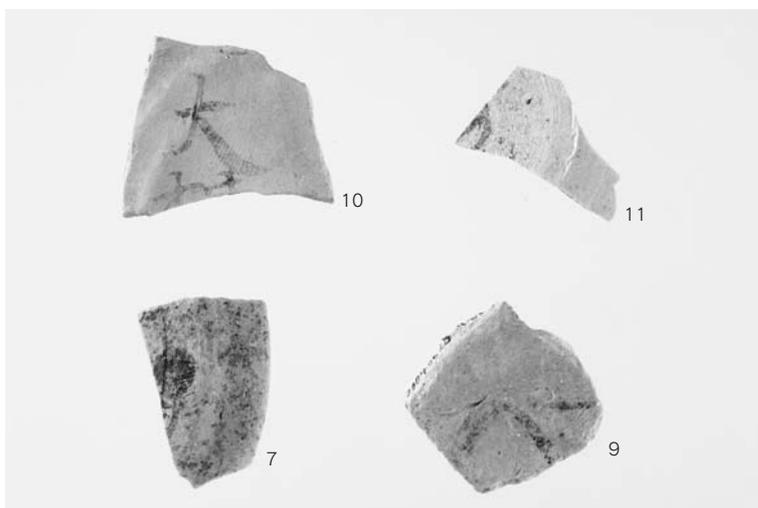
Pla4-2 8SK045出土遺物



Pla4-3 8SK062・064出土遺物



Pla4-4 8SD130出土遺物①



Pla4-5 8SD130出土遺物②



Pla4-6 8SX133出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ばばいせき
書名	馬場遺跡 2
副書名	第8次調査
シリーズ名	太宰府市の文化財
シリーズ番号	87集
編著者	柳 智子、山村信榮
編集機関	太宰府市教育委員会
所在地	福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号
発行年月日	2006（平成18）年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		座標		調査期間		調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了	m ²	
ばばいせき	太宰府市							177	
馬場遺跡 第8次調査	太宰府市 宰府2丁目1133	402214	210326-08	57,246.0	-43,220.0	20030202	20040708	延354	博物館散策路整備事業

所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構	主要遺物	特記事項
馬場遺跡 第8次調査	集落・工房跡	古代、中世、近世	掘立柱建物、石積溝、井戸、炉跡	炉壁、鞆羽口、鋳型、安楽寺銘瓦	平安時代後期の石積溝 一部埋土保存

太宰府市の文化財 第87集

馬場遺跡 2

馬場遺跡第8次調査

平成18年3月

編集発行 太宰府市教育委員会
福岡県太宰府市観世音寺1-1-1

印刷 株式会社 三光
福岡県福岡市博多区山王1丁目14-4